

県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

## 十川東・平田遺跡

2016. 3

香川県教育委員会



遺跡遠景（航空写真、東より）



遺跡遠景（航空写真、南より）



遺跡遺景（航空写真、西より）



調査区全景（航空写真、南より）

# 序 文

本書には、県道高松長尾大内線の改良事業に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市十川東町(そがわひがしまち)に所在します十川東・平田遺跡(そがわひがし・ひらたいせき)の報告を取録しています。

十川東・平田遺跡では旧石器時代から近世にかけての遺構・遺物が出土しました。遺跡は低位段丘上に立地し、長期にわたり人々の活動の場として利用されていたことが明らかとなりました。

遺跡が立地する低位段丘の堆積層からは、多数のサヌカイト礫が出土しました。定型的な石器が出土しておらず、明確な時期を特定することはできませんでしたが、出土したサヌカイト礫は、自然科学的な分析により、これまで知られていた五色台や金山などとは異なる分析値を示し、遺跡周辺に未知の産地が所在する可能性が明らかとなりました。

また、本遺跡からは有舌尖頭器1点が出土しております。同種石器は、香川県下からは32遺跡・地点から39点ほどしか出土しておらず、そのなかでも本資料は、古く位置付けられる資料であることがわかりました。

以上のように、本遺跡の調査により、本地域の歴史を考えるうえで貴重な資料が得られたと同時に、新たな課題も明らかとなりました。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成 28 年 3 月

香川県埋蔵文化財センター  
所長 真鍋 昌宏

# 例 言

- 1 本報告書は、県道高松長尾大内線道路改良事業に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市十川東町326番地ほかに所在する十川東・平田遺跡(そがわひがし・ひらたいせき)の調査報告である。
- 2 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
- 3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。  
期間 平成6年9月1日～平成7年3月31日  
担当 文化財専門員 谷畑雅彦 主任技師 蔵本晋司
- 4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。  
坂出市教育委員会、香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合(順不同、敬称略)
- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は国土座標第Ⅳ系(日本測地系)で、方位の北は国土座標第Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。  
SH 竪穴建物 SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝  
SR 流路 SX その他の遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位m)である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖32版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 遺物の時期等については主に次の文献を参照した。  
弥生土器：信里芳紀2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』  
信里芳紀2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心

にして-」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要 I』

信里芳紀 2011「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』, 香川県教育委員会

大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』, 香川県教育委員会

須恵器： 田辺昭三 1981『須恵器大成』, 角川書店

大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006「年代のものさし -大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40-」佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』

中世土器：佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』, 香川県教育委員会

貿易陶磁：太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡XV -陶磁器分類編-』

近世土器：佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」『サンボート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』, 香川県教育委員会

※ 地図は国土地理院地形図を使用しました。

# 本文目次

## 第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2

## 第2章 立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

## 第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	10
第2節 基本層序	10
第3節 I区の遺構・遺物	24
第4節 II区の遺構・遺物	38
第5節 III区の遺構・遺物	59
第6節 IV区の遺構・遺物	65
第7節 V区の遺構・遺物	71
第8節 VI区の遺構・遺物	83
第9節 VII区の遺構・遺物	99

## 第4章 自然科学分析

第1節 十川東・平田遺跡出土木製品の樹種同定	104
第2節 動物遺存体の同定	106
第3節 十川東・平田遺跡出土サヌカイトの産地推定	106

## 第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷	109
第2節 香川県内出土の有舌（莖）尖頭器について	113

# 挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	遺跡周辺地形分類図	4
第3図	周辺遺跡分布図	5
第4図	調査区割図	10
第5図	グリッド割図	11
第6図	包含層等出土遺物実測図	13
第7図	Ⅱ・Ⅲ区北壁土層断面図	14
第8図	Ⅱ・Ⅲ区北壁土層断面図2	15
第9図	Ⅲ区東壁土層断面図	16
第10図	Ⅳ・Ⅴ区北壁土層断面図1	17
第11図	Ⅳ・Ⅴ区北壁土層断面図2	18
第12図	Ⅵ区北壁土層断面図	19
第13図	Ⅵ区東・西壁土層断面図	20
第14図	Ⅶ区北壁土層断面図1	21
第15図	Ⅶ区北壁土・東壁土層断面図	22
第16図	Ⅰ区遺構配置図	23
第17図	SB01平・断面・出土遺物実測図	24
第18図	SB02平・断面図	25
第19図	SB03平・断面・出土遺物実測図	26
第20図	SB04平・断面図	27
第21図	SP141平・断面・出土遺物実測図	28
第22図	SK01～SK03平・断面図	29
第23図	SD05断面図	30
第24図	SE01平・断面図	30
第25図	SD01・SD02・SX02・SX03断面・ SD01・SX02・SX03出土遺物実測図1	32
第26図	SD02・SD04出土遺物実測図1	33
第27図	SD02・SD04出土遺物実測図2	34
第28図	SD02・SD04出土遺物実測図3	35
第29図	SD03断面図	35
第30図	SX01平・断面・出土遺物実測図1	36
第31図	SX01出土遺物実測図2	37
第32図	SX04・SX05平・断面・出土遺物実測図	38
第33図	Ⅱ区遺構配置図	39
第34図	SK05・SK08・SK09・SK12・SK14平・断面・ SK08・SK12出土遺物実測図	40
第35図	SR01断面・出土遺物実測図	41
第36図	SB05平・断面図	42
第37図	SB06平・断面図	43
第38図	SB07平・断面・出土遺物実測図	43
第39図	SB08平・断面図	44
第40図	SB09平・断面図	45
第41図	SP55出土遺物実測図	45
第42図	SK04・SK06・SK07・SK13平・断面・ SK06・SK13出土遺物実測図	46
第43図	SD06～SD09断面・SD08出土遺物実測図	48
第44図	SD11断面・出土遺物実測図	49
第45図	SD13断面図	50
第46図	SK10平・断面図	50
第47図	SD12・SD14・SD17断面・出土遺物実測図	52
第48図	SD15・SD18断面・SD15出土遺物実測図	53
第49図	SD23・SD24断面・出土遺物実測図1	54
第50図	SD23・SD24出土遺物実測図2	55
第51図	SD25断面・出土遺物実測図	56
第52図	SD26平・断面・出土遺物実測図	57
第53図	SD27・SD28断面・出土遺物実測図	58
第54図	SD29・SD10断面・スギ溝群出土遺物実測図	59
第55図	Ⅲ区遺構配置図	60
第56図	SH01平・断面・出土遺物実測図	61
第57図	SB10平・断面図	62
第58図	SK20平・断面図	63
第59図	SD30断面図	63
第60図	SD32断面・出土遺物実測図	64
第61図	SK15・SK17・SK18平・断面図	64
第62図	SK19平・断面図	65
第63図	SK21平・断面図	65
第64図	SD31断面図	65
第65図	Ⅳ区遺構配置図	66
第66図	SK23・SK24平・断面・出土遺物実測図	67
第67図	SR02・SR03断面・出土遺物実測図	68
第68図	SD33～SD35断面図	69
第69図	Ⅴ区遺構配置図	70
第70図	SB11平・断面・出土遺物実測図	71
第71図	SB12平・断面図	72
第72図	SB13平・断面・出土遺物実測図	73
第73図	SB14平・断面	74
第74図	SB15平・断面図	75
第75図	SB16平・断面・出土遺物実測図	76
第76図	Ⅴ区柱穴出土遺物実測図	77
第77図	SK29・SK30平・断面・出土遺物実測図	77
第78図	SK31平・断面・出土遺物実測図	78
第79図	SK36平・断面・出土遺物実測図	79
第80図	SK37平・断面図	79
第81図	SD37・SD38断面・出土遺物実測図	80
第82図	SD39・SD41～SD43・SX09断面図	80
第83図	SD40・SD44断面図	80
第84図	SD45・SD46断面・出土遺物実測図	81
第85図	SK27・SK28・SK32・SK34・SK35 平・断面図	82
第86図	Ⅵ区遺構配置図	84
第87図	サヌカイトブロック出土遺物実測図	85
第88図	サヌカイトブロック平・断面図	86
第89図	SH02平・断面・出土遺物実測図	87
第90図	SK39平・断面・出土遺物実測図	88
第91図	SK44平・断面図	88
第92図	SD48・SD49・SD51断面・出土遺物実測図	89
第93図	SB17平・断面図	90
第94図	SB18平・断面・出土遺物実測図	91
第95図	SB19平・断面図	92
第96図	SB20平・断面図	93
第97図	SB21平・断面・出土遺物実測図	94
第98図	SB22平・断面図	95
第99図	SK38平・断面・出土遺物実測図	95
第100図	SD52平・断面・出土遺物実測図	96
第101図	SK10・SK11断面・SK10出土遺物実測図	96
第102図	SD50断面・出土遺物実測図	96
第103図	SK41～SK43断面図	97
第104図	SK45平・断面図	97
第105図	Ⅶ区遺構配置図	98
第106図	SD57～SD59断面・SD57出土遺物実測図	99
第107図	SR04断面・出土遺物実測図	100
第108図	柱穴出土遺物実測図	101
第109図	SK47・SD55平・断面・出土遺物実測図	101
第110図	SK12断面・出土遺物実測図	102

第111図	SD53 断面図	103
第112図	樹種鑑定用プレパレート作製 フローチャート	104
第113図	サヌカイト産地推定判別図(1)	108
第114図	サヌカイト産地推定判別図(2)	108

第115図	遺構変遷図1	110
第116図	遺構変遷図2	111
第117図	遺構変遷図3	112
第118図	香川県内出土有舌尖頭器実測図1	115
第119図	香川県内出土有舌尖頭器実測図2	116

## 表目次

第1表	ブロック出土サヌカイト一覧表	85
第2表	動物遺存体同定結果一覧	106
第3表	分析対象	106
第4表	原石採取地と判別群名称	106
第5表	分析値および産地推定結果	107
第6表	香川県内出土有舌尖頭器一覧	114
第7表	土器観察表(1)	117
第8表	土器観察表(2)	118
第9表	土器観察表(3)	119
第10表	土器観察表(4)	120
第11表	土器観察表(5)	121
第12表	土器観察表(6)	122

第13表	土器観察表(7)	123
第14表	土器観察表(8)	124
第15表	土器観察表(9)	125
第16表	土器観察表(10)	126
第17表	土器観察表(11)	127
第18表	土製品観察表	127
第19表	軒丸瓦観察表	127
第20表	平瓦観察表	127
第21表	丸瓦観察表	127
第22表	石器観察表	128
第23表	木製品観察表	128
第24表	金属器観察表	128

## 写真目次

出土木製品の顕微鏡写真	105
I～Ⅲ区全景(航空写真、上が北)	130
Ⅳ・Ⅴ区全景(航空写真、上が北)	130
Ⅳ・Ⅴ区全景(航空写真、上が北)	130
Ⅵ・Ⅶ区全景(航空写真、上が北)	130
I・Ⅱ区全景(南東より)	131
I区全景(南より)	131
I区全景(南より)	131
I区全景(北より)	131
I区全景(西より)	131
I区SB01全景(南東より)	131
I区SP124遺物出土状況(北より)	131
I区SP141遺物出土状況(北より)	131
I区SD02下層遺物出土状況(南より)	132
I区SX01遺物出土状況(西より)	132
I区SD01土層断面(北より)	132
I区SD01・02土層断面(北より)	132
I区SD01・02土層断面(西より)	132
I区SK03全景(西より)	132
I区SK02全景(南より)	132
I区SK01全景(東より)	132
Ⅱ区SK05全景(南より)	133
Ⅱ区SK14全景(南より)	133
Ⅱ区SK04全景(南より)	133
Ⅱ区SK05全景(西より)	133
Ⅱ区SK07全景(北より)	133
Ⅱ区SK13遺物出土状況(南より)	133
Ⅱ・Ⅲ区全景(南西より)	133
Ⅱ・Ⅲ区全景(南西より)	133
Ⅱ・Ⅲ区全景(東より)	134
Ⅱ区全景(西より)	134

Ⅱ区全景(西より)	134
Ⅱ区SB07・09全景(南より)	134
Ⅱ区SB09全景(南より)	134
Ⅱ区SB08全景(南より)	134
Ⅱ区SR01全景(南東より)	134
Ⅱ区SD11遺物出土状況(西より)	134
Ⅱ区SD15遺物出土状況(北より)	135
Ⅱ区SD25・26遺物出土状況(南より)	135
Ⅱ区SD11遺物出土状況(北より)	135
Ⅱ区SD26集石検出状況(北より)	135
Ⅱ区SD26集石検出状況(西より)	135
Ⅱ区SB10全景(南より)	135
Ⅲ区調査区北壁東半土層断面(東南より)	135
Ⅲ区調査区東壁土層断面(北西より)	135
Ⅲ区SH01全景(東より)	136
Ⅲ区SH01全景(南より)	136
Ⅲ区SH01全景(西より)	136
Ⅲ区SH01土層断面(北東より)	137
Ⅲ区SH01内292・293・294出土状況(南東より)	137
Ⅲ区SH01内292・293・294出土状況(北より)	137
Ⅳ・Ⅴ区北半部全景(南西より)	138
Ⅳ・Ⅴ区北半部全景(南より)	138
Ⅳ・Ⅴ区北半部全景(東より)	138
Ⅳ・Ⅴ区全景(東より)	138
Ⅳ区全景(西より)	138
Ⅳ区全景(東より)	138
Ⅳ区SK13遺物出土状況(南より)	138
Ⅳ区SK03土層断面(南より)	138
Ⅳ区SK02全景(南より)	139
Ⅳ区SK23遺物出土状況(北より)	139
Ⅳ区SK24全景(南より)	139

IV区SK24 遺物出土状況（東より）	139
V区北半部全景（南西より）	139
V区SB11・SB12 全景（南より）	139
V区SB14・15・16 全景（東より）	139
V区SB12 全景（東より）	139
V区SB11 全景（西より）	140
V区SB15・16 全景（南より）	140
V区SK16 根石検出状況（北より）	140
V区SK16 遺物出土状況（北より）	140
V区SK30 遺物出土状況（南より）	140
V区SK31 石礫出土状況（南より）	140
V区SP156 遺物出土状況（北より）	140
V区SK36 遺物出土状況（東より）	140
VI区全景（南より）	141
VI区全景（西より）	141

VI区SH02 全景（南より）	141
VI区SB21・22 全景（西より）	142
VI区SB20 全景（北より）	142
VI区SB17・18 全景（南より）	142
VI区SD52 遺物出土状況（北より）	143
VI区SK40 全景（北より）	143
VI区SK38 遺物出土状況（南より）	143
VI区SK39 全景（南西より）	143
VI区SK47 全景（北より）	143
VI区SP413 遺物出土状況（東より）	143
VI区SK45 全景（西より）	143
VI区SK47 土層断面（南より）	143
VI区サスカイトブロック全景（西より）	144
VII区全景（西より）	144
VII区2面全景（西より）	144

## 付図目次

付図 十川東・平田遺跡平面図

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

県道高松長尾大内線道路改良事業にかかる用地のうち、高松市内東端部の工区について、香川県教育委員会は平成5年度に試掘調査を実施した。調査の結果、対象地西端部を除く約8,000mについて、弥生時代から中世の遺構・遺物を確認し、事前の保護処置が必要と判断された。これをうけて香川県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下埋文センターと略す）及び香川県土木部道路建設課と協議を進め、翌平成6年度に埋文センターが発掘調査を実施することで合意した。



第1図 遺跡位置図

## 第2節 調査の経緯

平成6年4月1日、香川県教育委員会は埋文センターとの間で「埋蔵文化財調査契約」を締結し、本遺跡の調査を同年7月1日より9ヶ月の予定で発掘調査を実施することとした。しかし、大川郡(現さぬき市)志度町八丁地遺跡の調査を先行して実施したため、本遺跡の調査開始が2ヶ月遅れ、同年9月1日より開始することとなった。幸い調査は順調に進んだため、予定の面積を年度内に終えることができた。なお、発掘調査は直営方式により実施した。

整理作業は、平成26年12月1日から平成27年3月31日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28<sup>リットル</sup>入りコンテナ33箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

平成6年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 文化行政課			財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター		
総括	課長	高木 尚	総括	所長	松本 豊胤
	主幹	小原 克己		次長	真鍋 隆幸
総務	課長補佐	高木 一義	総務	参事	別枝 義昭
	係長	源田 和幸		係長	前田 和也
	主査	星加 宏明		主査	大西 健司
埋蔵文化財	主事	高倉 秀子	調査	参事	糸目 末夫
	係長	藤好 史郎		文化財専門員	西村 尋文
	主任技師	國木 健司		文化財専門員	谷畑 雅彦
	主任技師	森下 英治		主任技師	蔵本 晋司
				調査技術員	陶山 仁美

平成26年度整理作業体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	増田 宏	総括	所長	真鍋 昌宏
	課長補佐	川上 泰		次長	前田 和也
総務・生涯学習推進グループ	副主幹	松下由美子	総務課	課長(兼)	前田 和也
	主事	和木 麻佳		主任	俵野 英二
文化財グループ	課長補佐	片桐 孝浩	主任	寺岡 仁美	
	主任文化財専門員	山下 平重	主任	中川 美江	
	文化財専門員	松本 和彦	主任	高木 秀哉	
			資料普及課	主任	岩崎 昌平
				課長	森 格也
				主任文化財専門員	蔵本 晋司
				嘱託	伊藤 真紀
				嘱託	岡崎 江伊子
				嘱託	加藤 恵子
				嘱託	合田 和子
				嘱託	竹村 恵子
				嘱託	田中 沙千子
				嘱託	正本 由希子
			嘱託	山地 眞理子	

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

遺跡は、高松市十川東町326番地ほかに所在する。高松平野東端部にあたり、東の長尾盆地と高松平野との結節点に位置する。

高松平野は、南縁を讃岐山脈に、東縁は屋島・立石山、西縁は五色台・堂山の各丘陵に画され、北縁は開けて瀬戸内海に面する。総面積約181km<sup>2</sup>の概ね平面矩形を呈する平野で、讃岐山脈に源を発する新川・香東川の各水系が、平野中央部を北流して瀬戸内海へ注ぐ。新川は幹線流路延長約18.7km、香東川は同約33.0kmと平野を貫流する河川はいずれも小規模な二級河川で、瀬戸内式気候の影響もあり、下流域での三角洲の形成は、現海岸線より最大で4～5kmと限定的である。平野の大半は沖積扇状地が占め、平地は旧河道の移動に伴う微起伏が列状に連なり、その間に集落の形成に適した紡錘形の微高地が点在する。河口部の三角州地帯には、概ね海岸線に平行に数列の砂州が形成され、漁労や瀬戸内海の海上交通を生業とする集落の形成が弥生時代には開始されていたようだ。

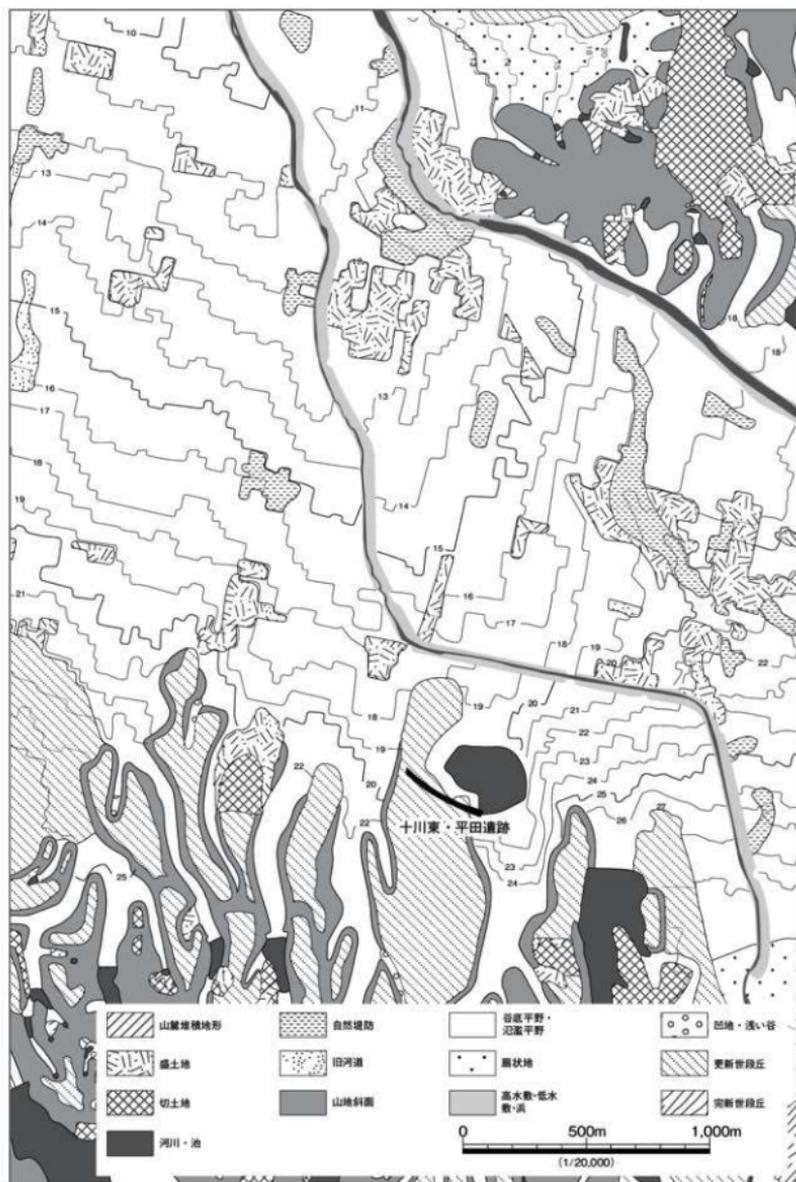
十川東・平田遺跡は、高松平野南東部、川島台地と呼ばれる讃岐山脈北縁にへばりつくように分布する標高22m前後の低位段丘面上に立地する。段丘の堆積物は未固結の風化の進んだ砂岩礫からなる礫層で、湖沼性の堆積物と考えられている。また、その形成時期は上位台地との相対年代より、後期更新世の可能性が想定されている(高桑1975)。台地上面の標高は30～50m前後を測り概ね平坦であるが、多数の崖端浸食谷が刻まれて、幅100～200m程度の舌状丘陵が発達する。その谷部には、多数の谷池が築池され、段丘前面の低地部の農業用水として利用されている。この段丘上には、歴史的環境で述べる、相尾神社や鯉字神社経塚、十河城跡といった政治・宗教施設が配され、その開発が中世段階まで遡ることを示している。こうした段丘面の開発がどのような形で進められたのかについて、考古学的な資料は乏しい。仮に水田等を開墾するためには、谷奥部に築池して段丘上に揚水する必要があり、多数の谷池のうちいくつかは中世に遡る可能性を示すものの、推測の域を出ない。ただし上記した諸施設が、平地部との接点に近い段丘端部付近に配置されている点は、谷池を利用した平地部の用水管理の観点からは妥当なものと考えられる。

### 第2節 歴史的環境

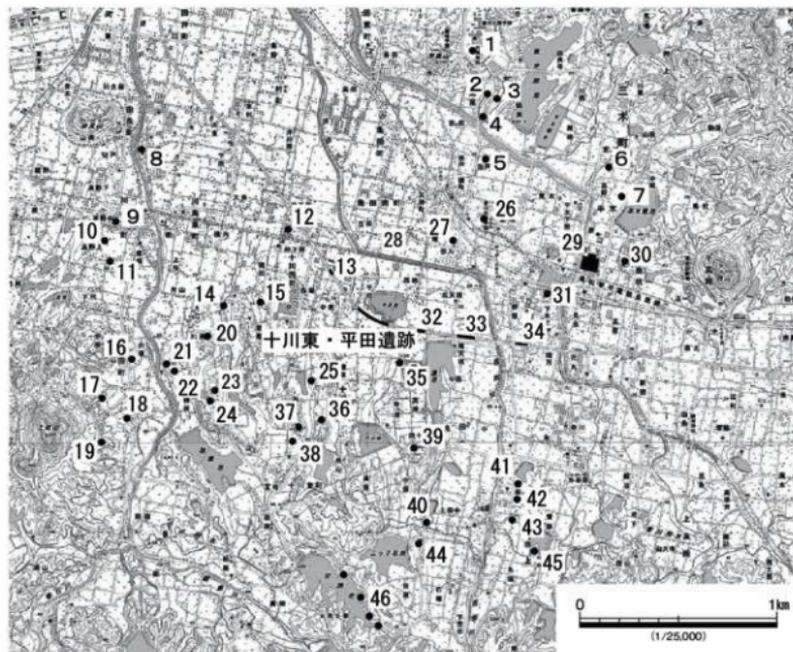
#### 旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は、鹿伏・中所遺跡や池戸八幡遺跡、男井間池周辺でナイフ形石器や翼状剥片が出土するなど、エリア北部の上位段丘面を中心に分布がみられる。また、南部でも、南天枝遺跡で風化の進んだサヌカイト剥片が出土し、本遺跡も混入資料ながら翼状剥片が出土しており、本地域の遺跡数は増加しているが、採集資料や混入資料のみで、詳細は不明である。

香川県において縄文時代の遺跡数は乏しく、とくに前半期の遺跡はこれまで丘陵裾部を中心に散発的にみられる程度であった。しかし、近年の大規模開発に伴う調査で、例えばさぬき市森広遺跡や尾崎西遺跡など、当該期の遺跡数は増加傾向にあり、本遺跡でも有舌尖頭器が出土しており、今後の資料増加



第2図 遺跡周辺地形分類図



1. 権八原古墳群 2. 池戸古墳群 3. 池戸鍋淵遺跡 4. 恵慶寺跡 5. 池戸城跡 6. 高野八幡社古墳
7. 高岡城跡 8. 由良南原遺跡 9. 川島本町山田遺跡 10. 川島本町遺跡 11. 川島本町南遺跡
12. 西下遺跡 13. 西尾遺跡 14. 松宇八幡馬場古墳 15. 西尾天神社古墳 16. 光専寺山遺跡
17. 上佐山東麓古墳 18. 池田合子神社古墳 19. 中山田遺跡・中山田3、4号墳 20. 古塚古墳
21. 川東2号墳 22. 川東1号墳 23. 金法寺古墳 24. 天親墳 25. 十川城跡 26. 農学部遺跡
27. 砂入遺跡 28. 古代南海道推定地 29. 鹿伏遺跡 30. 天神山古墳群 31. 串田城跡 32. 尾端遺跡
33. 南天枝遺跡 34. 福万遺跡 35. 砂古遺跡 36. 出之山北塚 37. 出之山古墳 38. 出之山南古墳
39. 四十塚古墳 40. 中坪城跡 41. 長楽寺跡 42. 旧長楽寺跡 43. 上田中城跡 44. 雷塚古墳
45. 堰切古墳群 46. 公測池家跡群

第3図 周辺遺跡分布図

が期待される。後・晩期になると遺跡数は増加に転じ、本地域では川島本町遺跡と鹿伏・中所遺跡で後期の土器・石器が、農学部遺跡と南天枝遺跡では晩期土器がそれぞれ出土している。旧河道内より遺物が出土した川島本町遺跡を除いて、いずれも包含層や弥生時代以降の遺構での混入資料であり、当該期の集落は未だ確認されていない。

### 弥生時代

弥生時代前期前半の遺跡は現在未確認であり、本地域における遺跡の出現は前期後葉となる。前期後葉から中期初頭の遺物が、農学部遺跡、砂入遺跡、光専寺山遺跡、福万遺跡で出土している。農学部遺

跡で大型水路が、砂入遺跡で土坑や溝がそれぞれ検出されている以外は、包含層等からの出土で居住遺構等の確認は今後の課題である。

中期には、鹿伏・中所遺跡、中山田遺跡、本遺跡で建物遺構が確認され、中山田遺跡や本遺跡にみられるように、段丘上への開発が進展する。鹿伏・中所遺跡以外は単発的な集落で、堅穴建物2～3棟、掘立柱建物1～2棟を1単位とし、1～数単位で集落を構成していた景観が復元される。鹿伏・中所遺跡では中期前葉以降、古墳時代前期初頭まで、短期的な断絶をはさみながら集落の経営が維持される。

鹿伏・中所遺跡は後期に集落を継続し、由良南原遺跡、池戸鍋淵遺跡、砂入遺跡、川島本町遺跡、南天枝遺跡で後期の遺構・遺物が出土する。建物遺構は鹿伏・中所遺跡と砂入遺跡、本遺跡で確認され、川島本町遺跡では土坑や溝のみ、池戸鍋淵遺跡では溝や包含層、南天枝遺跡では包含層などから当該期の遺物が出土している。

鹿伏・中所遺跡で建物遺構が目立って増加するのは、後期後半から終末期にかけてである。阿波・備中・備後などからの搬入土器や金属器の出土が報告されているが、出土土器に占める搬入土器の比率は乏しく、金属器や玉類などの非自給物資の集積も認められない。

砂入遺跡は、後期中葉から古墳時代前期初頭の堅穴建物5、掘立柱建物2が確認され、集落の経営期間の多くを鹿伏・中所遺跡と共有する。本遺跡周辺では、当該期の明確な交易拠点的性格を有する遺跡は現在のところ認められず、格差に乏しい比較的等質的な集団が、堅穴建物や出土土器量に示される集住性に辛うじて格差を顕現させつつ、分住している景観が復元されよう。

後期には、墳墓も顕在化する。鹿伏・中所遺跡では、後期後半から終末期の土器棺墓21基が、3ヶ所の墓群に分かれて検出されている。また砂入遺跡では、終末期の土器棺墓が出土している。ほぼ同時期と考えられる土器棺墓は、東に隣接する丘陵上に立地する天神山遺跡でも確認され、同遺跡では成人埋葬と考えられる土壌墓群も伴う。天神山遺跡の造墓主体が、例えば鹿伏・中所遺跡以外の集落内に墓域を設定しない集団によるものである可能性も否定はできないが、県東部の東かがわ市原間遺跡・成重遺跡・樋端遺跡でも、同様に集落内外でほぼ同時期の墳墓が確認されており、選択基準は不明ながら、集落内部に葬られる集団と、集落外に葬られる集団の2者が、同じ集落内に同居していた可能性は高いと考えられる。

## 古墳時代

当該期の集落については、既述したように、鹿伏・中所遺跡、砂入遺跡では、前期前葉まで集落が継続する。その他、南天枝遺跡では前期前葉の掘立柱建物1棟が検出され、福万遺跡では包含層より前期初頭の遺物が出土している。基本的に弥生集落の延長として、前期前葉まで集落経営は維持されるが、前期中葉以降、遺構はおろか遺物の採集地もみられず、集落の動態は不明瞭となる。

本遺跡周辺で、次に集落の手がかりが得られるのは、中期中葉～後半まで待たねばならない。砂入遺跡では包含層よりTK208型式併行期前後の遺物がやや多量に出土し、鹿伏・中所遺跡ではTK23・47型式併行期の遺物が旧河道より、西下遺跡では同時期の遺物が混入資料としてそれぞれ出土している。建物遺構は未確認だが、これら遺跡の近接地で、当該期の集落が存在した可能性は高い。しかし、いずれの遺跡も土器形式で1～2形式と短期間で集落の経営が断絶している可能性がある。なお、砂入遺跡で、少量ながら韓式系土器が伴う点は重要である。

以後、鹿伏・中所遺跡でTK43型式併行期の遺物が包含層より出土しているのみで、確実な集落の再

間は7世紀に下る。

本地域の古墳は、前期前葉より築造が開始し、おそらくは短期間の断絶を含みながらも、墳形や規模、埋葬施設等に多様性を顕現させつつ、終末期まで継続して築造されている。各古墳の被葬者が単一の系譜を辿れないことは勿論だが、各級首長層がこぞって古墳の築造に参加していることは、本地域が政治的に重要な地域であったことを傍証しているであろう。

前期古墳として、池田谷子神社古墳と池戸八幡神社古墳群、川東1・2号墳がある。

池田谷子神社古墳は、未調査のまま破壊されたが、全長約35mの前方後円墳であったとされる。

池戸八幡神社古墳群は、全長約37mの前方後円墳の1号墳を盟主として、3基の小円墳で構成される古墳群である。近年の調査により、1号墳の前方部墳裾外周には、敷石遺構が認められ、1・3号墳で壺型埴輪が出土した。墳裾外周敷石遺構などから、前期後半の築造の可能性が説かれるが、築造時期を含め詳細はなお調査を要しよう。

川東1号墳は、箱式石棺を埋葬施設とする小円墳で、副葬品として▲裂神獸鏡が出土している。川東2号墳も、埋葬施設や副葬品は不明ながら近接した位置に築造された小円墳で、前期後半に相前後して築造されたと考えられる。

権八原古墳群C地区古墳は、丘陵尾根緩斜面部をやや弧状を呈する周溝で区画した小円墳(?)で、埋葬施設として箱式石棺1基が検出されている。副葬品は出土しなかったが、周溝内より壺型埴輪9個体が出土しており、前期末～中期前葉の築造と考えられる。

西尾天神社古墳は、径15m程度の2段築の円墳で、かつて埴輪片が出土したとされる。埴輪の内容が不詳なため詳細な時期は不明ながら、中期の首長墓墳と考えられる。また、近接する径10m程度の円墳である松宇八幡馬場古墳は、後継首長墳の可能性がある。

権八原古墳群は、既述したC地区の箱式石棺墳を除けば、A地区8基、B地区7基、C地区1基の計16基の径または1辺10mクラスの小円・方墳で構成される初期群集墳である。開墾等により墳丘を削平された古墳が多く、埋葬施設はB地区2号墳で2基の箱式石棺が確認されたのみであった。副葬品として、鉄剣、鉄鏃などが出土している。また、各古墳の周溝内からは土師器や須恵器が出土しており、およそ5世紀後葉を中心とする時期に築造されたと考えられる。

堀切1号墳は、径14.5mの竪穴式石室を埋葬施設とする円墳と考えられており、円筒埴輪が出土している。中期末～後期初頭の築造と考えられる。堀切2号墳は、径10.5mの横穴式石室を埋葬施設とする円墳の可能性が大きい。出土した須恵器高杯より、MT85型式併行期に位置付けられる。埋葬施設が横穴式石室だとすれば、周辺地域で導入期の石室の可能性が大きい。

天神山古墳群は、低丘陵頂部に築造された、径10mクラスの3基の円墳で構成される古墳群である。埋葬施設が大きく損壊していた2号墳を除いて、いずれも横穴式石室を埋葬施設とする。石室規模は、支室床面積3㎡クラスの小規模な1号墳と、同5㎡クラスの中規模の3号墳がある。出土遺物より、2基の古墳はTK43型式併行期にはほぼ同時に築造され、以後TK217型式併行期まで追葬されていた。

中山田古墳群は、径10mクラスの円墳からなる古墳群で、うち3・4号墳の2基が発掘調査された。いずれも両袖式横穴式石室を埋葬施設とする。石室規模は、支室床面積5㎡クラスの中型墳の3号墳と、同8㎡クラスの大規模の4号墳があり、3号墳は6世紀後半、4号墳は7世紀前葉の築造である。

## 古代

律令期には、山田郡が置かれ、管内には殖田郷以下11郷があり、遺跡周辺は蘇甲郷に含まれる。関係史料として、平城宮西北佐伎池南辺の調査で、木屑・炭層より「讃岐国山田郡□川郷□□」の木簡が出土しており、和銅～養老六年の紀年銘木簡とともに平城宮Ⅱ式の土器を伴う(奈文研1987)。また、郡内に綾公、布敷臣衣女、舍人国足、秦公人足、佐伯、葛木部龍麻呂、宗我部□、讃岐公全雄、中臣宮勉氏などの名がみえる。

本遺跡を含む高松平野では、真北より約10度東偏した条里型地割りが広範に認められる。余剰帯は、条里型地割り分布域の南北中間付近に認められ、ルート上の高松市川島本町付近で低丘陵端を開削した切り通し状の遺構が認められることから、古代南海道と推定された(金田1988)。本遺跡の北約600mを東西走る。高松平野部のルート上では、高松市三谷通谷遺跡などで調査がなされ、川原遺跡では8世紀末以前に開削された片側溝とされる溝が検出されている。しかし、確実な道路遺構の検出には至っておらず、古代南海道の位置については今後の調査を待ちたい。なお、東かがわ市坪井遺跡の調査成果より、その施工時期は8世紀中頃の推定がなされている。

後述するように、7世紀中葉から8世紀前半にかけて、西下・尾端・南天枝の各遺跡で集落が経営され、古代寺院の創建、須恵器窯の築窯など、諸開発行為が集中する。とくに寺院の分布からみれば、郷単位での在地の支配層が、これら開発を主導したことが考えられ、それは律令国家の整備を急ぐ中央政権の意向に則したものであったのだろう。

西下遺跡では、7世紀前葉の溝状遺構より、鳥形木製品が出土している。周辺に当該期の集落が存在した可能性が考えられる。建物遺構が検出されるのは、出土遺物や他遺構との重複関係より7世紀中葉とされるが、SD101との重複関係に不明瞭な点がある。建物主軸が周辺の条里型地割りの方向と合致すること、包含層出土の遺物を参考に、8世紀前半期に下る可能性が高いものと考えられる。

由良南原遺跡では、当該期の遺構は確認されていないが、緑釉陶器2点のほか、須恵器、土師器片が出土しており、近接地に集落の存在が予想されている。緑釉陶器は、南天枝遺跡でも出土している。

尾端遺跡と南天枝遺跡は、南部丘陵縁辺に立地する7世紀中葉から8世紀初頭の集落遺跡で、尾端遺跡では掘立柱建物12、溝などが、南天枝遺跡では竪穴建物3、掘立柱建物21、土坑などが、それぞれ検出されている。建物遺構は、主軸がほぼ真北を指向する一群と、高松平野部の条里型地割りの方向に合致する一群、北より20～30°東偏する一群の3群に分けられる。そのうち真北を指向する一群は、概ね7世紀代の建物が多数を占め、条里型地割りの方向と合致する一群は8世紀代に下る。統一的な現状の条里型地割り成立前に、本地域において正方位を指向する地割りが施工されていた可能性を示唆するものであろう。なお、20～30°東偏する一群の建物については、出土遺物より時期を特定できる建物が乏しく、実証的に説明することが困難だが、一定の方向性を示さないことから、正方位の地割り成立以前の建物群の可能性を想定したい。

讃岐国は古代寺院が数多く造寺された地域のひとつで、30ヶ寺以上が確認されている。本遺跡周辺でもエリア内に1ヶ寺と、隣接地域に始覚寺、上高岡庵寺、下司庵寺、高野庵寺の4ヶ寺が分布する。長楽寺跡は、吉田川の東河岸段丘上に立地する。かつて古瓦が散布していたことから古代寺院跡とされていたが、礎石や基壇等の遺構は確認されておらず、実態は不明である。軒丸瓦と軒平瓦各1点が採集されており、藤原宮式の影響が強く認められることから、白鳳期末の製作年代が指摘されている(高松市歴史資料館編1996)。

生産遺跡としては、公湖池窯跡群がある。池東岸部に築窯された4基の須恵器窯と近在の宮池窯を含

めた窟跡群の総称である。谷間口部側より谷奥へむけて順に変遷したとされ、採集遺物より7世紀後葉から8世紀中葉前後の採集が確認される。

## 中世

西下遺跡では、詳細な時期は不詳ながら、当該期の柱穴・溝などが検出されている。

南天枝遺跡では、掘立柱建物6棟のほか石組井戸等が検出され、12～14世紀にかけて建物遺構が継続するようだ。由良南原遺跡でも、12世紀前葉から14世紀にかけての建物遺構が確認されている。由良南原遺跡の建物は小規模なものが多いが、南天枝遺跡では床面積40㎡クラスの大型総柱建物を含み、富農層をその経営者と考えることもできよう。また、短期の断絶を含む可能性はあるが、比較的長期に経営が維持される点も特徴といえる。

中世城館は、エリア内で10ヶ所が推定されている。主に近世以降の文献や絵図などの記述をもとに、現地踏査や地名調査、地籍図の読解によってその存在が推測されているものが大半で、実際に発掘調査等により遺構が確認されたものはない。そのうち最大規模のものは、十川城であり、横堀、枳形虎口、土橋、土塁、堀切が確認され、前期織豊系城郭との関係が指摘されている（池田2003）。

小規模なものでは、大塚城跡、池戸城跡、串田城跡、池田城跡は、地籍図の検討から、60～100m四方の平地の方形居館の可能性が指摘されている。

中世寺院として、光専寺山遺跡と惠徳寺跡があり、光専寺山遺跡からは13～16世紀代の土器や瓦が出土している。惠徳寺跡は室町期の寺院跡とされている。

鯉宇神社経塚は、低丘段丘端部に築造された平安時代末期の経塚であった。径2～3m、高さ0.5m程度の塚より、土師質外容器に入れられた銅鑄製経筒2点が出土した。そのほか、瓦塔や錫杖かとされるものが出土したと伝えられるが、現存せず不明である。

梶尾神社には、高松市指定文化財の鯉口が保存されている。これは神社北東約100mの「ごまんどう」と呼ばれている西福寺の護摩堂があったとされる場所より、元文年間に掘り出されたとされ、外区に「讃州山田郡十河郷梶尾大明神大師堂元心文和三年甲午三月十一日。」と刻まれている。作風は地方色が豊かであるが、全体として古い形態を保持しているとされる。

## 近世

南天枝遺跡では、16世紀末～17世紀初頭の50～60m程度の方形区画溝を有する屋敷地が検出されている。肥前系陶磁器や中国製白磁皿などの遺物が出土しており、富農層の屋敷地と考えられる。

### 参考文献

- 池田誠 2003 「中世城館跡詳細分布調査から見た香川の城郭」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会  
 金田章祐 1988 「讃岐の桑里遺構」『香川県史』第1巻通史編、香川県  
 高桑礼 1975 「高松南部国幅の地形区分」『香川大学教育学部研究報告』第1部第39号  
 高松市歴史資料館編 1996 「讃岐の古瓦展」  
 奈良国立文化財研究所編 1987 「平城宮発掘調査出土土簡概報（十九）」  
 川野正雄・武田明監修 1989 「日本歴史地名大系第38巻 香川県の地名」平凡社

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査の方法

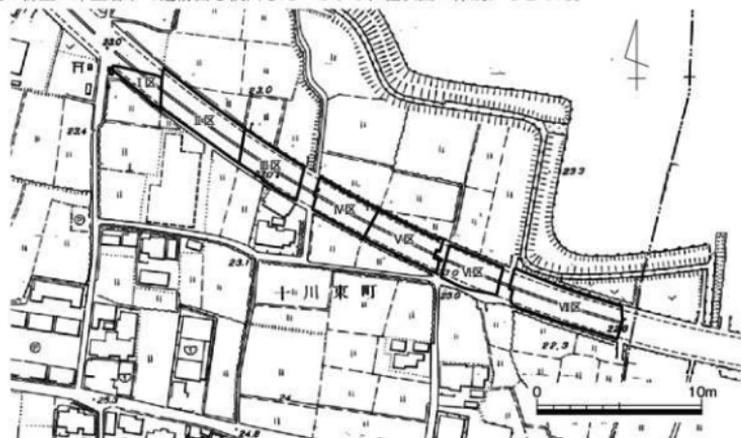
調査対象地は、県道予定地であるため、南北幅約21m、東西延長約350mと東西に細長い。また田園地帯であるため、調査地内を用水路や農道が南北に縦断する。したがって調査区は、現状での地割りを基準に第4図に示すように西よりⅠ～Ⅶ区の7調査区に区分し、調査時の工程や周辺地権者等からの要望などにより、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。調査前の地目は、すべて水田などの耕作地である。

調査は、直営方式により実施し、基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げをおこなった。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。包含層等の遺物については、調査対象地全体を日本測地系の国土座標に従い、 $X = 140,390$ を起点として南へ20m毎にA・B・C…、 $Y = 56,460$ を起点と同様に東へ20m毎に1・2・3…と、それぞれ番号を付して20m四方のグリットを設定し、北東隅の交点をグリット番号として、遺物の取り上げをおこなった(第5図)。

遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、柱穴以外はすべて新たな番号を付して統一した。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲する。

#### 第2節 基本層序

土層序の観察は、東西方向については各調査区の北壁においておこない、南北方向についてはⅢ区東壁、Ⅵ区東・西壁、Ⅶ区東壁においておこなった。なおⅠ区については、調査区が狭小で、基本的に現在の耕土・床土層下で遺構面を検出したことから、柱状図の作成にとどめた。



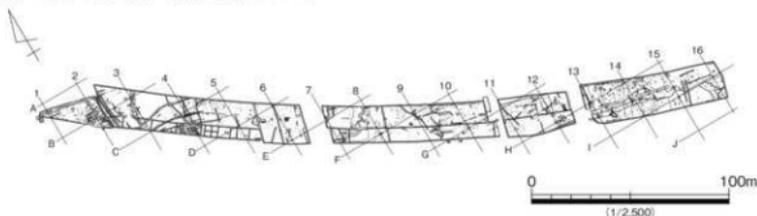
第4図 調査区割図

Ⅱ・Ⅲ区は、調査前は7筆の水田等の耕地に造成されており、北壁土層図でそのうち4筆の耕地の東西方向の断面を観察した。各耕地面の標高は、西より22.60 m、22.75 m、22.60 m、22.20 mを測り、最大0.5 m以上の高低差が認められた。そして現耕土層下には、1～6層に細分された層厚4～10cmの灰色ないし黄褐色系粘土～シルトの旧耕土層の水平堆積（第7～9図3～23層）が連続して観察された。これら旧耕土層群は、出土遺物や土色・土質より基本的には近世以降のものと考えられ、部分的に堆積層の不連続面等が認められることから、耕地区画の変更や耕地面の地上げ等を契機として造成されたと考えられる。Ⅱ区中央部で浅い低地帯は確認されたものの、基本的には低位段丘上の高燥な環境に位置する本調査区において、頻繁に耕地面の上昇が繰り返された要因については、調査によって明らかにすることはできなかった。

これら旧耕土層群を除去すると、調査区の大半において、黄色～灰白色粘土（同図38～42層）をベースとする縄文時代以降の遺構面が露出する。遺構面の標高は、西端で22.3 m、中央部で22.4 m、東端で21.7 mと、後述するⅣ区低地帯へ向けて東半部で緩やかに下降する。包含層は、B3グリットを中心に検出された弥生中期に埋没した浅い低地帯（SR01）周辺で、黄褐色ないし暗褐色粘土層のレンズ状堆積（同図35・36層）を確認した。弥生中期低地帯の最終埋没土壌であろう。本層上面は、現状で遅くとも近世段階を想定する耕地造成によりほぼ水平に削奪されている。こうした平準化を意図した土地造成の始期については、調査で実証的なデータは得られなかったが、調査区周辺に中世の建物群が点在することから、その段階に遡る可能性が考えられる。

本区の旧耕土層からは、図示したように12～17世紀代の遺物が出土している。これら遺物は、本区で検出された各遺構に本来は帰属したと考えられ、各旧耕土層の堆積時期を直接示すものではない。

Ⅳ・Ⅴ区は、調査前には3筆の耕地として造成されており、北壁土層図でそのうち2筆の耕地の東西方向の断面を観察した。本区でもⅡ・Ⅲ区と同様に近世以降と考えられる旧耕土層の厚い水平堆積が確認された。その層厚は、厚いところで8層0.45 mに達する。北壁での観察で、12層と13層、15層と16層、22層と23層は各々近似しており、近接した時期の耕土層と想定される。したがって、近世以降大きく4～5回以上の耕地区画の再編あるいは耕地面の嵩上げがなされた可能性が考えられる。これら旧耕土層下で、弥生時代以降の遺構面を確認した。本区でも弥生時代以降の堆積層は、近世以降の耕地開発により削奪され残存しない。本区での遺構面の標高は、調査区西端部で21.3 m前後、中央部で21.5 m前後、東端部で21.9 m前後と、後述する弥生中期埋没の低地帯（SR02・03）が確認された調査区西端部へ向けて緩やかに下降する。そして本区東半部より後述するⅥ区西半部G11・G12グリット周辺が、微高地の頂部となり、各時期の遺構が検出された。



第5図 グリット割図

本区の旧耕土層からも、12～18世紀代の遺物が出土しており、大半は検出遺構に本来は帰属したものであろう。14は、23層より出土した大宰府分類同安室系青磁皿Ⅰ-1b類である。

Ⅶ区は、調査前には2筆の耕地として造成されており、北壁土層因でその2筆の耕地の東西方向の断面を観察した。本区では既述したように、Ⅴ区東半部で確認された微高地が延長し、現耕土層直下で弥生期以降のベース層が露出する。近世以降と考えられる耕土層の厚い水平堆積層は、後述するⅦ区西半部の低地帯へ向けて緩やかにベース層が下降する調査区東端部付近に限られ、その層厚は最大9層0.55mに達する。なお耕土層群の最下層には、Ⅶ区東端部で検出されたスキ溝群を被覆する耕土層(第12・13図20層)が部分的に残存する。弥生期以降の遺構面の標高は、調査区西部で21.7m前後、東端部で21.15m前後を測る。なお本区南半部では、遺構面のベースとなる黄色粘土層(同図25層)より、風化の進んだササカイト礫が多数出土した。本層は前章で既述した低位段丘礫層の一部と考えられる。本ササカイト礫の埋没時期を特定できうる明確な石器等の資料に恵まれなかったのは残念だが、Ⅱ区SK13やSD28より混入資料ながらナイフ形石器や有舌尖頭器が出土しており、本区周辺に当該期の遺構が所在した可能性は高い。

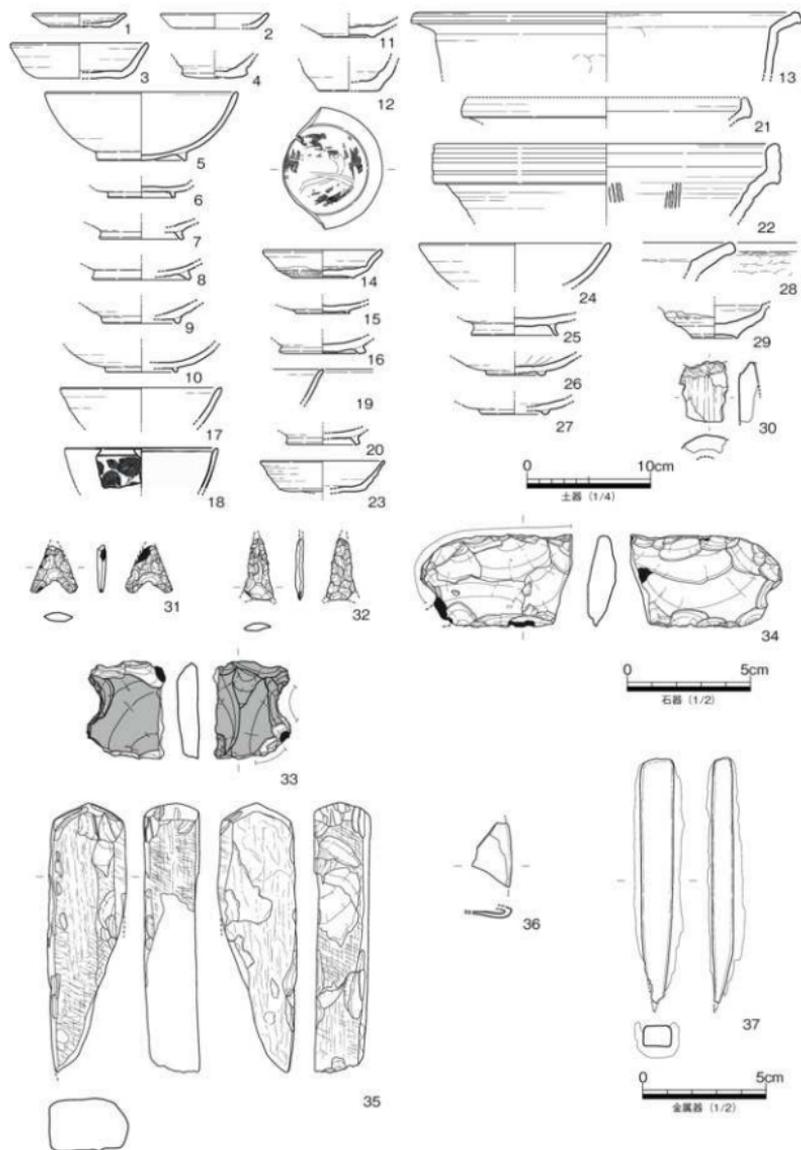
本区の旧耕土層からも、12～17世紀代の遺物が出土している。19は、17層より出土した上田分類D類の青磁碗。21は、8層より出土した神出Ⅲ期後半の東播系須恵器掬鉢である。

Ⅷ区は、調査前には2筆の耕地として造成されており、北壁土層因でその北側1筆の東西方向の断面、東壁土層因で南北2筆の南北方向の断面を観察した。現地表面の標高は、調査区西端で21.40m前後、中央～東端部で21.60m前後をそれぞれ測る。本区でも、現耕土～盛土層下に近世以降と推定される耕土層の厚い水平堆積層が認められ、その層厚は最大4層約0.3mを測る。これら近世以降の耕土層群は、調査に際して後述する第1遺構面まで重機にて掘り下げた。壁面の土層断面の観察時に、これら耕土層の各面より掘り込まれた小溝等の遺構断面を確認し、近世以降に耕地区画の変更が頻繁になされていることが、本区でも確認できた。

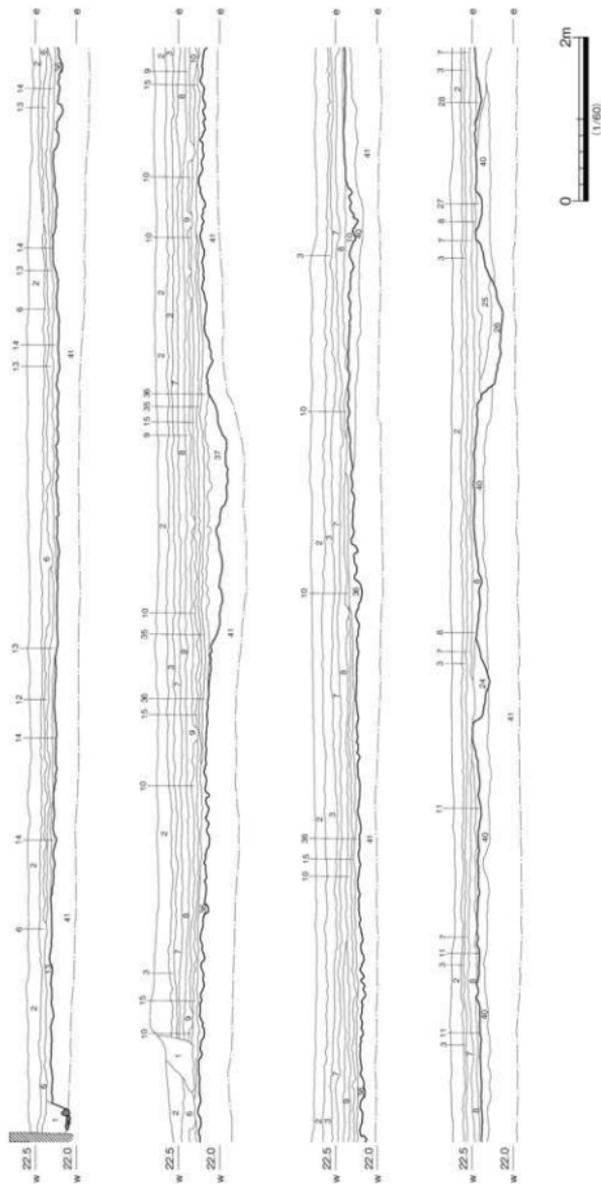
さて、現地表面の高低差に認められるように、本区西半部で弥生時代中期の浅い低地帯が南北に走行し、低地帯上面を中心に層厚0.02～0.1m程度の灰色系シルト～粘土層(第14・15図22～25層)の水平堆積が確認された。本層群からは、土師質土器杯・碗、黒色土器碗、須恵器碗等の遺物(23～28)が少量ながら出土し、13世紀前半代を下限とする堆積層と考えられる。なお30は、22層より出土した径5～6cm程度に復元される輪羽口である。本層上面では、柱穴やSX12等の遺構を確認、第1遺構面として調査を実施した。後述するように、中世後半期の遺構面と考える。

包含層は上述したように4層に細分され、少なくとも25層上面と包含層下面の2面の遺構面を確認したが、調査の都合上、包含層下面で一括して、第2遺構面として調査を実施した。第2遺構面では、ベース層である黄色系粘土層を掘り込む弥生時代の低地帯SR04や溝SD57のほか、低地帯埋没後に掘り込まれた中世の柱穴等を検出した。中世の遺構については、出土遺物より12～13世紀代のものと思われる。

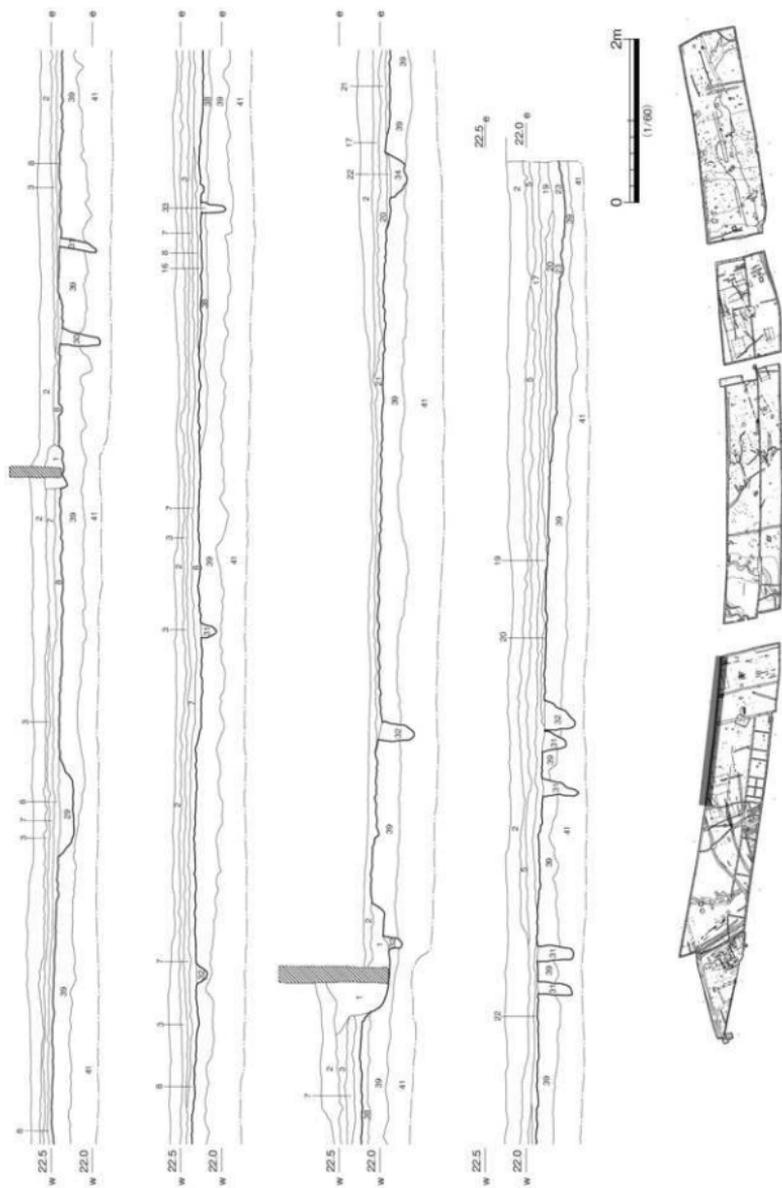
弥生時代の低地帯上面は、ほぼ平準に削奪されており、その上面より中世の遺構が開削されていることからすれば、そうした平準化は中世段階でなされたものと考えられる。しかし、完全に地形環境を克服して平準化がなされたわけではなく、低地帯上面は周辺の微高地と比べて低く、中世段階でもなお、洪水等による低地帯への土壌の堆積と、それに伴う整地・造成が繰り返されていたことを、先の土層断面から何うことができる。



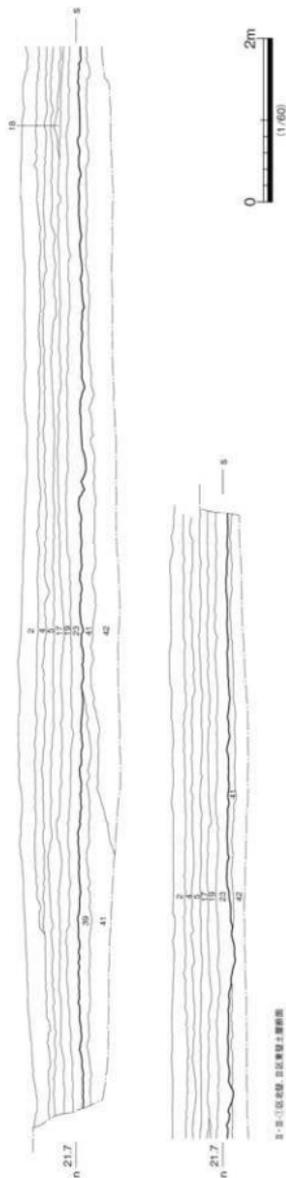
第6図 包含層等出土遺物実測図



第7図 II・III区北壁土層断面図



第8図 II・Ⅲ区北壁土層断面図2



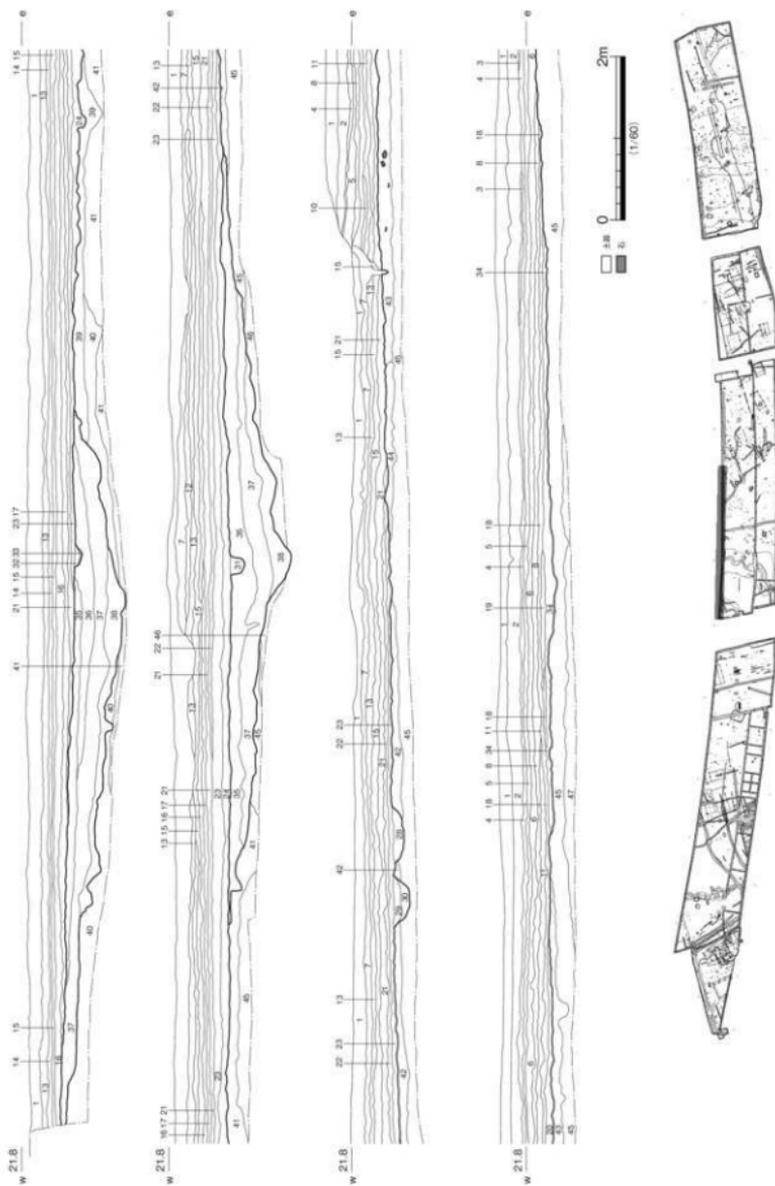
Ⅱ-Ⅱ-1区 区画 日区東壁土層断面

- 1 障壁
- 2 10766.8 砂礫層状砂質粘土 (F<sub>2</sub>, 互層, 粘土)
- 3 粘土
- 4 砂土
- 5 10767.1 砂礫層状砂質粘土 (F<sub>2</sub>, 互層, 粘土)
- 6 障壁
- 7 1067 原状砂質粘土 (F<sub>2</sub>, 互層, Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 8 10768.2 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 9 2577.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 10 10768.2 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 11 10768.2 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 12 2576.6 原状砂質粘土 (F<sub>2</sub>, 互層, Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 13 10768.2 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 14 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 15 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 16 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 17 2577.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 18 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 19 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 20 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 21 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 22 575.1 粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団 1~2cm の片状化, 団粒土)

- 23 10768.1 砂礫層状砂土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 24 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 25 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土, 団 4~5cm の片状化, 団粒土)
- 26 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 27 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 28 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 29 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 30 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 31 575.3 粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団 2~3cm の片状化, 団粒土)
- 32 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 33 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 34 10768.1 砂礫層状砂土 (F<sub>2</sub>, Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)
- 35 10768.1 砂礫層状砂土 (F<sub>2</sub>, Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)
- 36 10768.1 砂礫層状砂土 (F<sub>2</sub>, Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)
- 37 10768.4 粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 38 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 39 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 40 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 41 2576.6 原状砂質粘土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)
- 42 10768.0 砂礫層状砂土 (Mn<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, 団粒土)

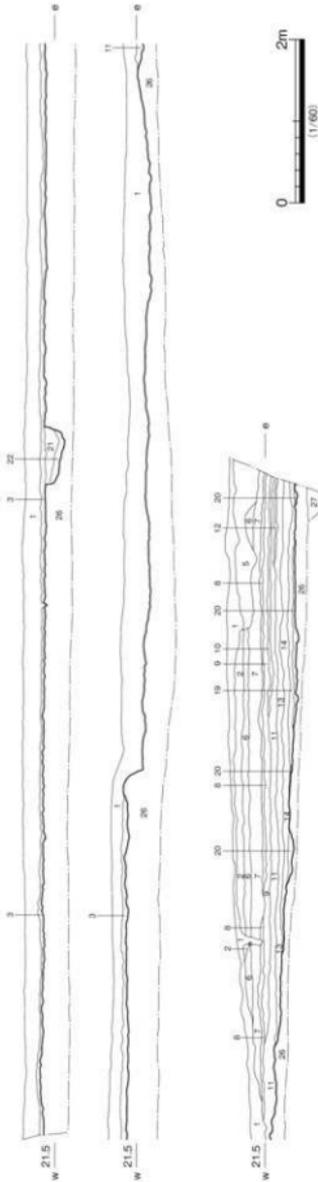


第9図 Ⅱ区東壁土層断面図



第10図 IV・V区北壁土層断面図1

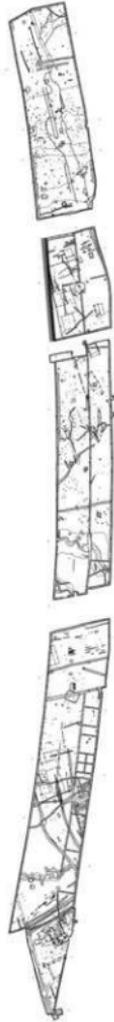




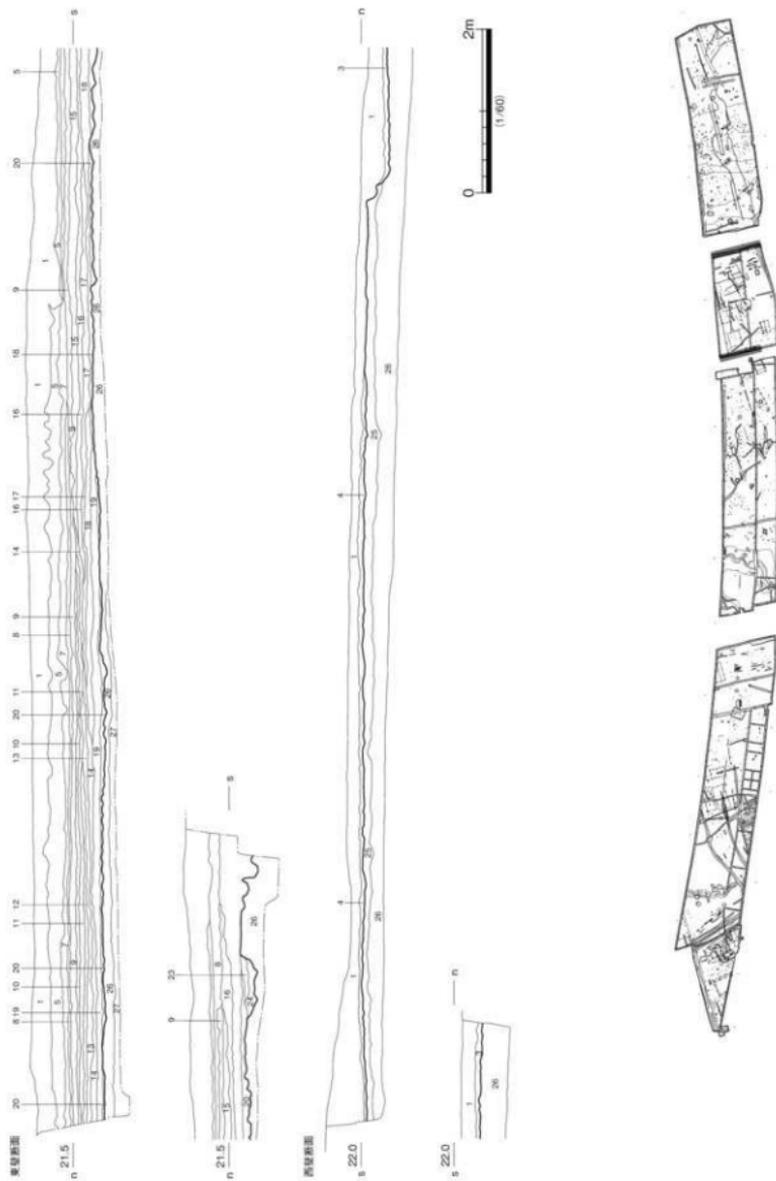
Ⅵ区北 北壁土層断面図

- 1 砂土
- 2 灰土
- 3 灰土
- 4 灰土
- 5 灰土
- 6 灰土
- 7 砂土
- 8 砂土
- 9 5771区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 10 2577区黄褐色砂土 (Mh, 赤土)
- 11 2577区黄褐色砂土 (Mh, 赤土)
- 12 2577区黄褐色砂土 (Mh, 赤土)
- 13 2577区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 14 2576区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)

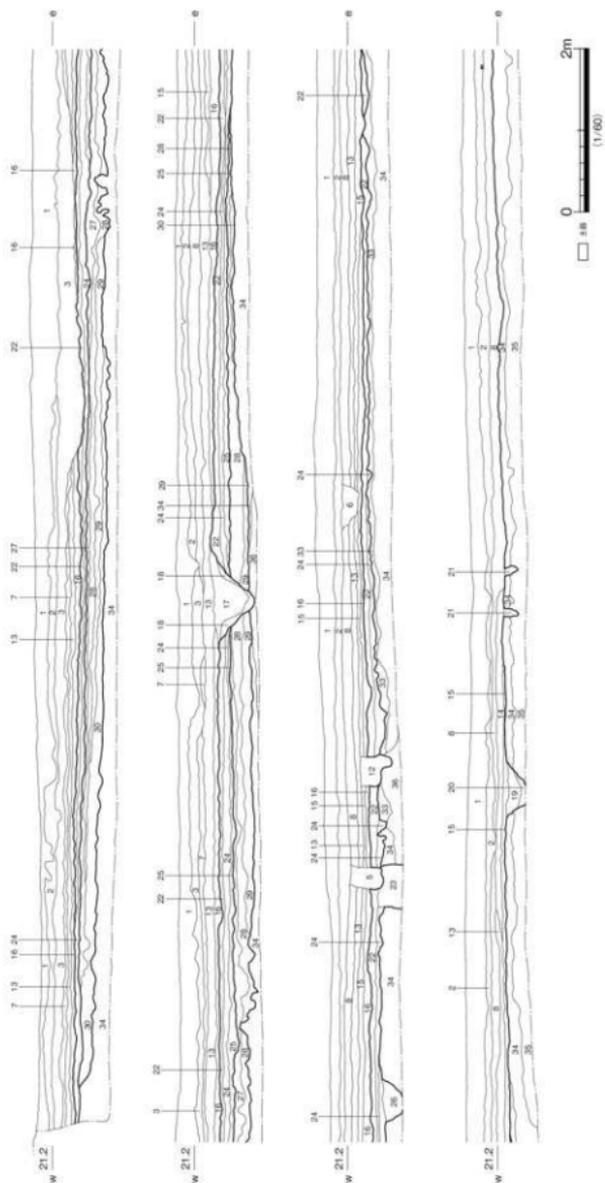
- 15 2577区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 16 2577区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 17 2577区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 18 2576区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 19 2576区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 20 5752区オリーブ色砂土 (Mh, 赤土)
- 21 2577区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 22 2577区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 23 1094区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 24 1094区白亜紀層シルト (Mh, 赤土)
- 25 7297区黄褐色砂土 (Mh, 赤土)
- 26 7297区黄褐色砂土 (Mh, 赤土)
- 27 5871区黄褐色砂土 (Mh, 赤土)



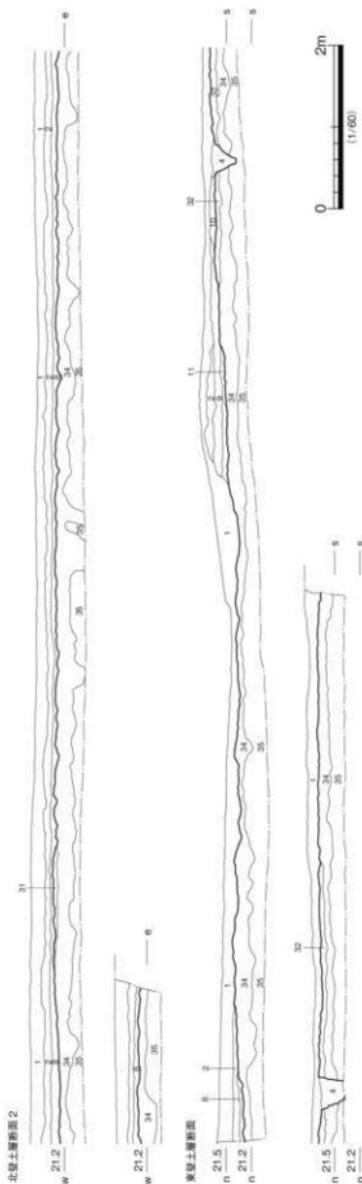
第12図 Ⅵ区北壁土層断面図



第13図 V区東・西壁土層断面図



第 14 図 VI 区北壁土層断面図 1



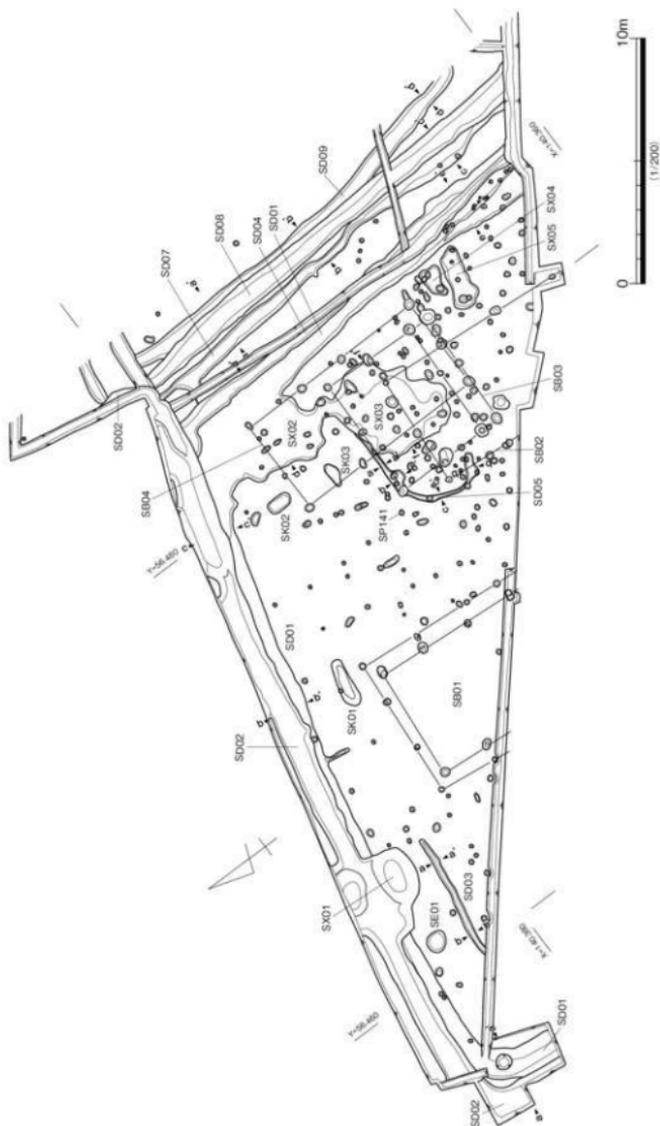
Ⅷ区北・東壁土層断面

- 1 緑土
- 2 腐土
- 3 腐土
- 4 腐土
- 5 腐土
- 6 N7 泥白粉砂土 (圧縮・浸透性弱)
- 7 1095/1 泥白粉砂土 (10層7ロツク層七、泥質・浸透性弱)
- 8 577/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 9 577/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 10 577/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 11 577/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 12 N6 泥白粉砂土 (浸透性、圧縮性弱)
- 13 N6 泥白粉砂土 (浸透性、圧縮性弱)
- 14 2207/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 15 1095/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 16 1095/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 17 1097/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 18 576/1 泥白粉砂土 (10層多量土)

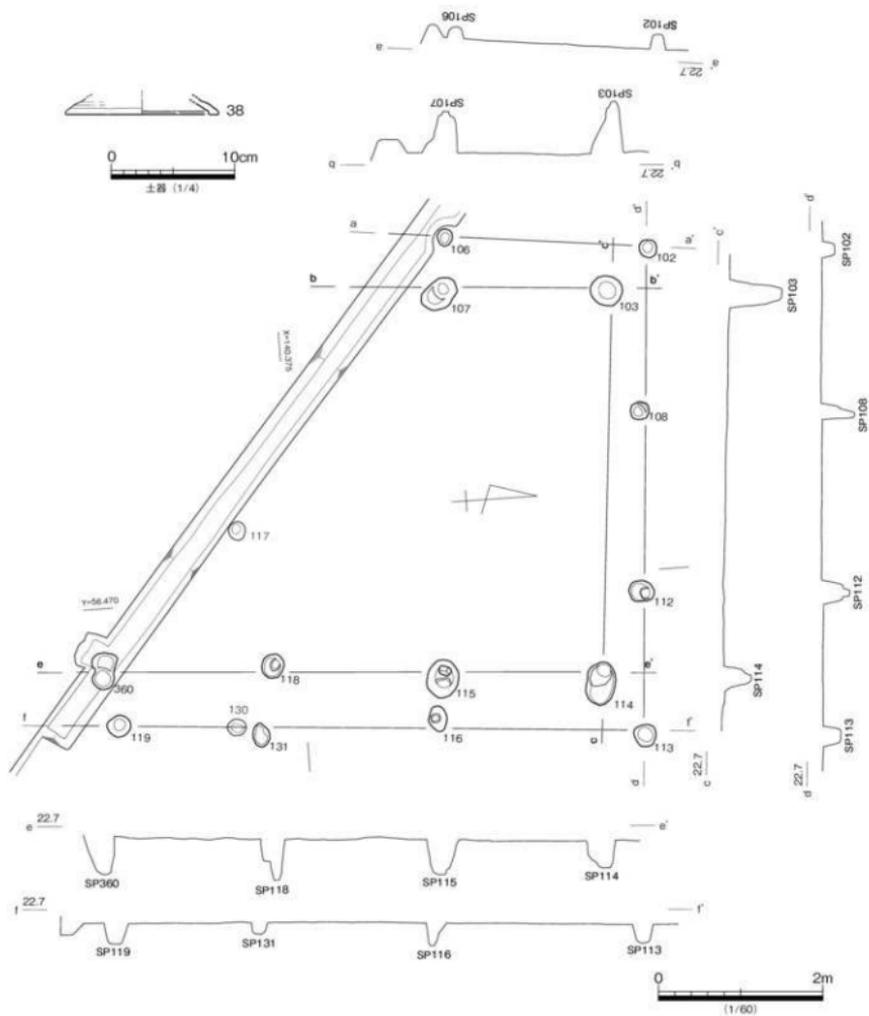
- 19 72976/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 20 72976/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 21 25925/4 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 22 10987/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 23 10987/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 24 N2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 25 72976/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 26 72976/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 27 72976/4 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 28 72976/4 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 29 1095/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 30 1095/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 31 1095/1 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 32 25925/5 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 33 10987/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 34 10987/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 35 10987/2 泥白粉砂土 (10層多量土)
- 36 10987/2 泥白粉砂土 (10層多量土)



第15図 Ⅷ区北壁2・東壁土層断面図



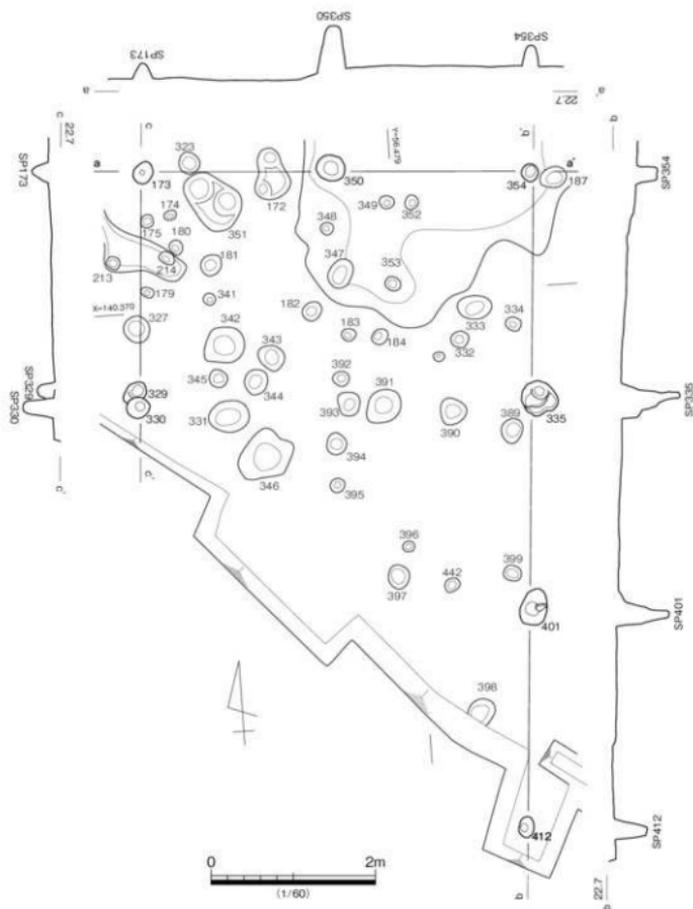
第16図 I区道構配置図



第17図 SB01 平・断面・出土遺物実測図

### 第3節 I区の遺構・遺物

#### 1 中世



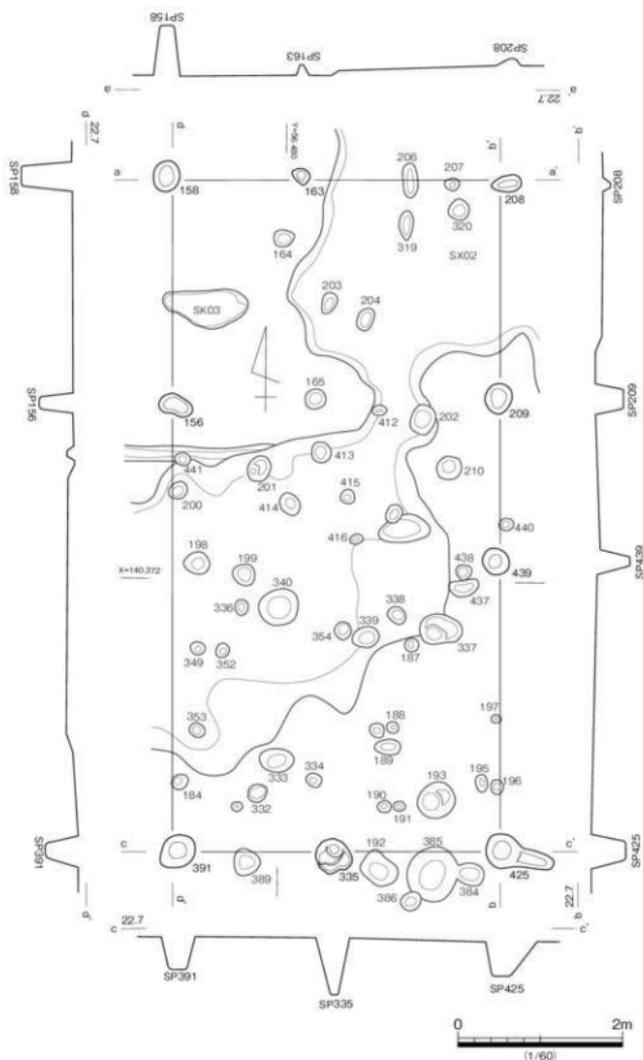
第18図 SB02平・断面図

## 掘立柱建物

## SB01 (第17図)

I区A2グリッドで検出した。南半部は調査区外へ延長し、桁行3間以上、梁間1間、主軸方向N 5.03° Eの南北棟の側柱建物として復元した。現状で、南を除く3面に庇を伴うが、おそらくは4面庇建物となる可能性が高い。桁行は東列で6.12m以上、西列で2.02m以上、梁間は北列で4.68m、床面積28.6m以上を測り、平面プランはほぼ整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.02～2.08mとほぼ均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.26～0.54mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.33





第20図 SB04平・断面図

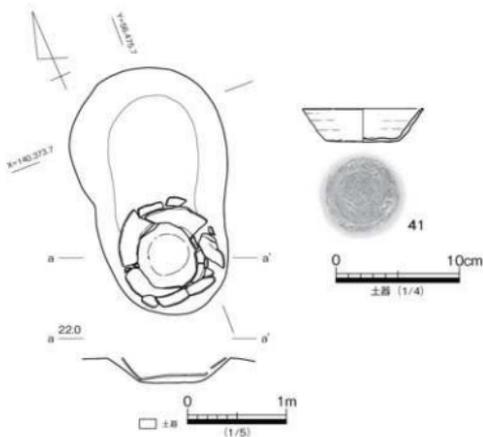
は困難であるが、遺構の規模・内容や、周辺遺構との関係等を踏まえると、当該時期に位置付けるのが妥当と思われる。

向N 443° Eの南北棟の側柱建物として復元した。SB03・04と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明。SX03底面で柱穴を検出したことから、SX03より先行する。桁行は東列で7.96 m以上、西列で2.86 m以上、梁間は北列で4.76 m、床面積37.9㎡以上を測り、平面プランは整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、262～268 mとほぼ揃う。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.2～0.46 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.19～0.70 m、底面の標高21.86～22.36 mであった。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片が少量出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定すること

### SB03 (第19図)

I区A2・B2グリッドで検出した。桁行2間、梁間2間、主軸方向N89.73°Wの東西棟の側柱建物として復元した。SB02・04と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明。SX03底面で柱穴を検出したことから、SX03より先行する。桁行は北列で5.26m、南列で5.00m、梁間は東列で4.14m、西列で3.88m、床面積20.57㎡を測り、平面プランはやや歪な矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.12～2.88mと東側がやや狭い。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.24～0.76mの円ないし楕円形を呈し、



第21図 SP141 平・断面・出土遺物実測図

残存深0.04～0.68m、底面の標高21.85～22.50mであった。

遺物は、図示した以外に土師質土器鍋・足釜、須恵器等の小片が少量出土したのみである。39は、SP193より出土した土師質土器皿、40はSP351より出土した瓦質土器鉢である。いずれも小片のため時期を特定しがたいが、概ね14世紀末から15世紀前葉頃と考えておきたい。

### SB04 (第20図)

I区A2・A3グリッドで検出した。桁行4間、梁間2間、主軸方向N153°Wの南北棟の側柱建物として復元した。SB02・03と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明。SX02・03の底面で柱穴を検出したことから、両遺構より先行する。桁行は東列で8.2m、西列で8.3m、梁間は北列で4.15m、南列で4.0m、床面積33.62㎡を測り、平面プランはやや整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、1.63～2.8mと不均等である。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.15～0.4mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.13～0.53m、底面の標高21.91～22.42mであった。

遺物は、土師質土器杯・足釜等の小片が少量出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、近世以降に下る遺物が出土しておらず、遺構の規模・内容や、周辺遺構との関係等を踏まえると、当該時期に位置付けるのが妥当と思われる。

## 土器埋納遺構

### SP141 (第21図)

I区中央A2グリッドで検出した土器埋納遺構である。長軸0.25m、短軸0.16m、平面形はやや歪な長楕円形を呈し、残存深0.03m。断面逆台形状の小ピットの北端に、土師質土器杯(41)が口縁部を上にして正置の状態でごえ置かれて出土した。遺構検出時に、口縁部が一部破損し小片化してしまっていたが、本来は完形品がごえ置かれていたと思われる。遺構上面は大きく削奪されており、本資料以外に遺物を伴っていたのかどうかは不詳である。他遺跡の類似遺構との比較から、建物建設に伴う地鎮遺構と考えられるが、対象となる建物遺構については、特定できていない。

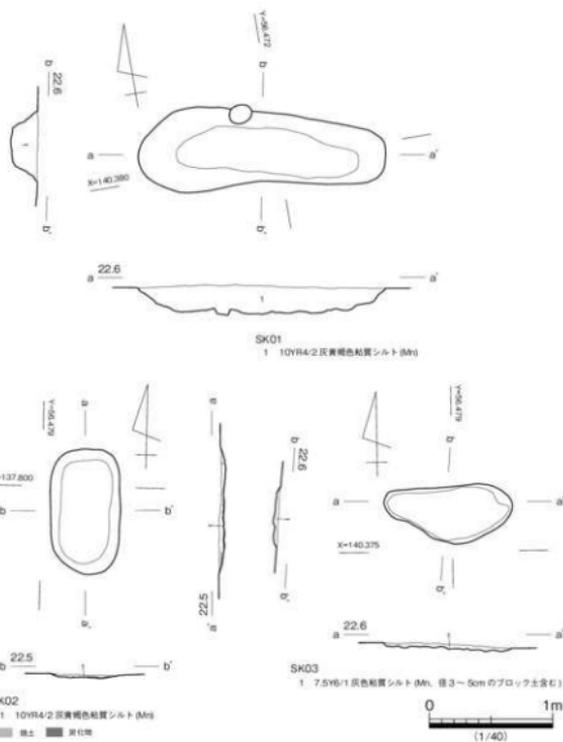
出土遺物より、13世紀末から14世紀前葉頃の遺構と考えられる。

### 土坑

#### SK01 (第22図)

I区中央北半A2グリットで検出した土坑である。平面形は、長軸2.02 m、短軸0.46～0.68 mの東半部がややすはまる隅丸方形を呈する。残存深は0.21 mあり、断面形は概ね逆台形状を呈し、底面には若干の凹凸が認められた。主軸方向はN 79.3° Wで、遺跡周辺の条里型地割りの方向と概ね一致する。埋土は灰黄褐色シルトの単層であった。

遺物は、器種不詳の土師質土器や須恵器小片が少量出土したのみである。



第22図 SK01～SK03 平・断面図

#### SK02 (第22図)

I区東半A2グリットで検出した土坑である。長軸1.00 m、短軸0.54 m、平面形は整った隅丸長方形を呈する。残存深は0.02～0.04 mと浅く、断面形は皿状を呈する。主軸方向は、N 0.89° Wとはほぼ正方位に配される。埋土は、灰オリーブ色シルトの単層で、ブロック土が多量に混在することから、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、底面には南半部を中心に、層厚1～5 mmの炭化物細層が堆積している。炭化物下に被熱の痕跡は認められず、炭化物は土坑内へ投棄されたものと考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片が数点、サヌカイトチップが数十点出土した。

#### SK03 (第22図)

I区東半A2グリットで検出した土坑である。長軸1.01 m、短軸0.42 m、平面形は東西軸のやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.02 m、断面形は浅い皿状を呈し、遺構上面は顕著な削平を蒙っているとみられる。主軸の方向は、N 88.10° Wとはほぼ正方位に配される。埋土は、灰色シルトの単層で、ブロック土が混在することから、人為的に埋め戻された可能性も考えられる。

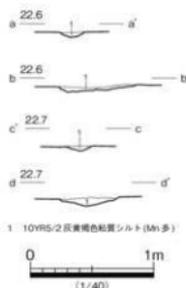
遺物は、器種不詳の土師質土器小片1点が出土したのみである。

溝

SD05 (第23図)

I区東半部A2グリットで検出した溝である。東端をSX03に切られる。東西約5m、南北約2.5mのコ字状に配される。検出面幅0.15～0.6m、残存深0.03～0.05m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰黄褐色シルトの単層である。

遺物は、土師質土器杯等の小片が数点出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。溝の内容容から、I区屋敷地内の建物雨落ち溝である可能性が高く、当該時期に位置付けられるものと考えられる。



第23図 SD05断面図

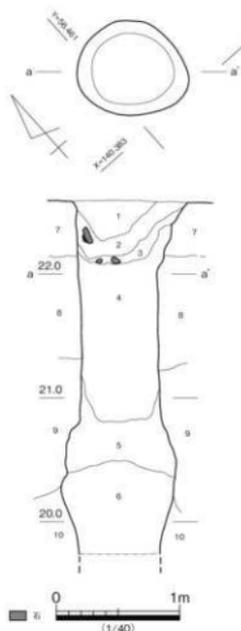
2 近世

井戸

SE01 (第24図)

I区西端部A2グリットで検出した素掘りの井戸である。平面形は、径0.94mの略円形を呈する。残存深2.84m以上あり、危険なため底面までの掘り下げを断念した。最深部でもベース層は青灰色粗砂混粘土であり、透水層までは達していない。断面形は、検出面下0.3mまではやや緩やかに掘り込まれるが、それ以下は径0.6mの円筒状にはほぼ直に掘り込まれ、検出面下2.3m付近で、壁面の崩落により挟れて袋状となっていた。おそらくこの部分まで湧水があったのであろう。埋土は確認した範囲で6層に細分された。下層(6層)は、グライ化した強粘質の粘土層で、遺構機能時の堆積層であろう。中層(5層)は、壁面の崩落部分を中心に堆積していたベース層に近似した粘土層で、ベース層の崩落土と考えられる。おそらくは本層の堆積により、井戸が機能しなくなったため放棄されたと考えられる。上層(1～4層)は、基本的に井戸廃絶後の人為的な埋戻し土である。

遺物は、上層より、土師質土器足釜の小片1点のほか、器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であり、井戸の内容容から近代以降のものと考えられる。



- 1 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質シルト (Fe, 径 2～3 cmの小石少量含む、上層)
- 2 5Y5/6 オリーブ色粘粘土 (Mh, 上層)
- 3 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘粘土 (Mh, 上層)
- 4 7.5Y5/1 灰色粘粘土 (径 10～20 cmのベース層ブロックを多数含む、上層)
- 5 10YR6/6 明黄褐色粘砂粘土 (中層)
- 6 5G5/1 緑黄色粘粘土 (凝結質、下層)
- 7 10YR6/6 明黄褐色粘砂粘土 (地山)
- 8 10YR6/6 明黄褐色粘砂粘土 (径 5～10 cmの風化礫を含む、地山)
- 9 10YR6/2 灰黄褐色粘砂粘土 (径 3～10 cmの風化礫を多数含む、灰黄色土より下部に含む、地山)
- 10 10YR6/2 灰黄褐色粘砂粘土 (径 3～10 cmの風化礫を多数含む、地山)

第24図 SE01 平・断面図

溝

SD01・SX02・SX03 (第25図)

I区屋敷地の北・東・西部をコ字状に配された区画溝と考えられる遺構で、大半が後述するSD02と重複し、全形を不明瞭なものとしているが、SD02に先行する区画溝である可能性を考える。西側南北溝は、検出面幅1.2m以上、残

存深0.2～0.25 m、断面形は概ね皿状を呈する。東西溝は、北半部をSD02により攪乱を蒙り、検出面幅0.6 m以上、残存深0.2 mを確認したにとどまる。東側南北溝も、後述するSD04が上面より穿たれるものの、検出面幅0.7 m以上、残存深0.16 mを確認した。東西溝と東側南北溝との合流部南西部では、溝幅が広がり、落ち込みSX02・03が連接する。

SX02・03は、長軸4 m前後、残存深0.15 m前後を測る、平面不定形の落ち込みである。断面形は浅い皿状を呈し、底面には起伏が認められた。平・断面形状より、人為的なものとは考えられず、当初は浅い土坑や小溝として開削されたが、雨水等による浸食を受けつつ埋没したものと考えられる。

埋土は、いずれも灰黄褐色シルトの単層で、明瞭な流水痕跡は認められなかった。また、SX03では、少量のブロック土や焼土・炭化物粒の混入が認められた。溝の規模からも用・排水路としての用途は想定しがたく、屋敷地区画溝として開削されたと考えられる。

遺物は、総量コンテナ半箱程度出土した。大半がSD01からの出土遺物である。図示した以外に、須恵器、土師質土器小皿・碗・足釜・鍋、黒色土器、瓦質土器、備前焼小壺・播鉢等の小片が出土している。出土遺物のなかで、大宰府分類ⅡもしくはⅢ類の白磁碗(46)や同Ⅰ-5類の龍泉窯系青磁碗(44)、土師質土器皿・杯・鍋(42・45・51)等は、13世紀前半から15世紀前半に遡り、いずれも先行遺構からの混入資料と考えられる。瀬戸美濃系陶器灰軸皿(47)や土師質土器把手付鍋(48・50)等が本遺構機能時の遺物と考えられ、16世紀末から17世紀前半代に位置付けられよう。

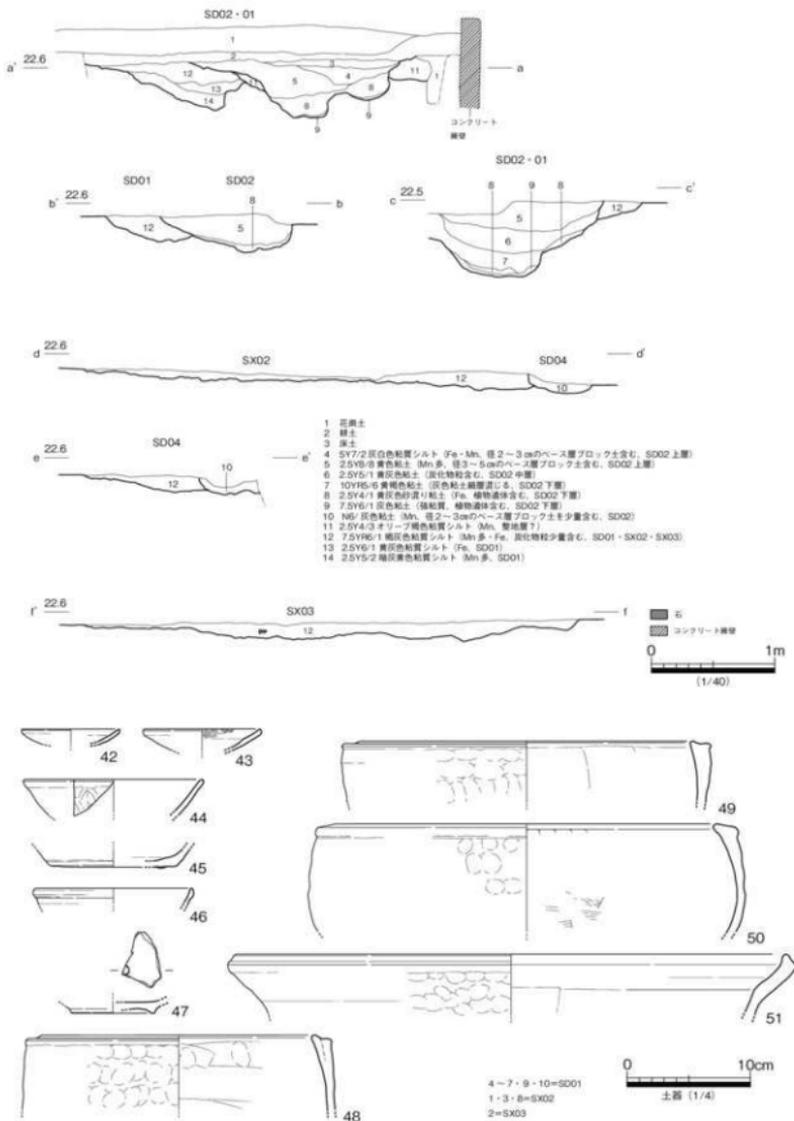
#### SD02・SD04(第25～27図)

SD02は、Ⅰ区北端からⅡ区西端部A1～A3グリットで検出した、Ⅰ区南西から北東へ鍵手状に配された溝である。西側南北溝は屈曲部より延長3 m程度を、東側南北溝は掘り方の東肩をそれぞれ検出したのみで、大半は調査区外へ延長し、東西溝についても北肩は調査区外に位置する。したがって溝の配置には不明な箇所も残されるが、後述するSD04とともに、本区屋敷地の西・東・北辺をコ字状に区画する区画溝と考える。東西溝の延長325 m、流路方向N 79.25°W、検出面幅1.08～1.4 m以上、残存深は0.31～0.63 m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。底面の標高は、東西溝西端部で223 m前後、同東端部で22.0 m前後を測り、西側南北溝より東西溝を介して、東側南北溝へ、つまり南西より北東へ流下していたものと考えられる。

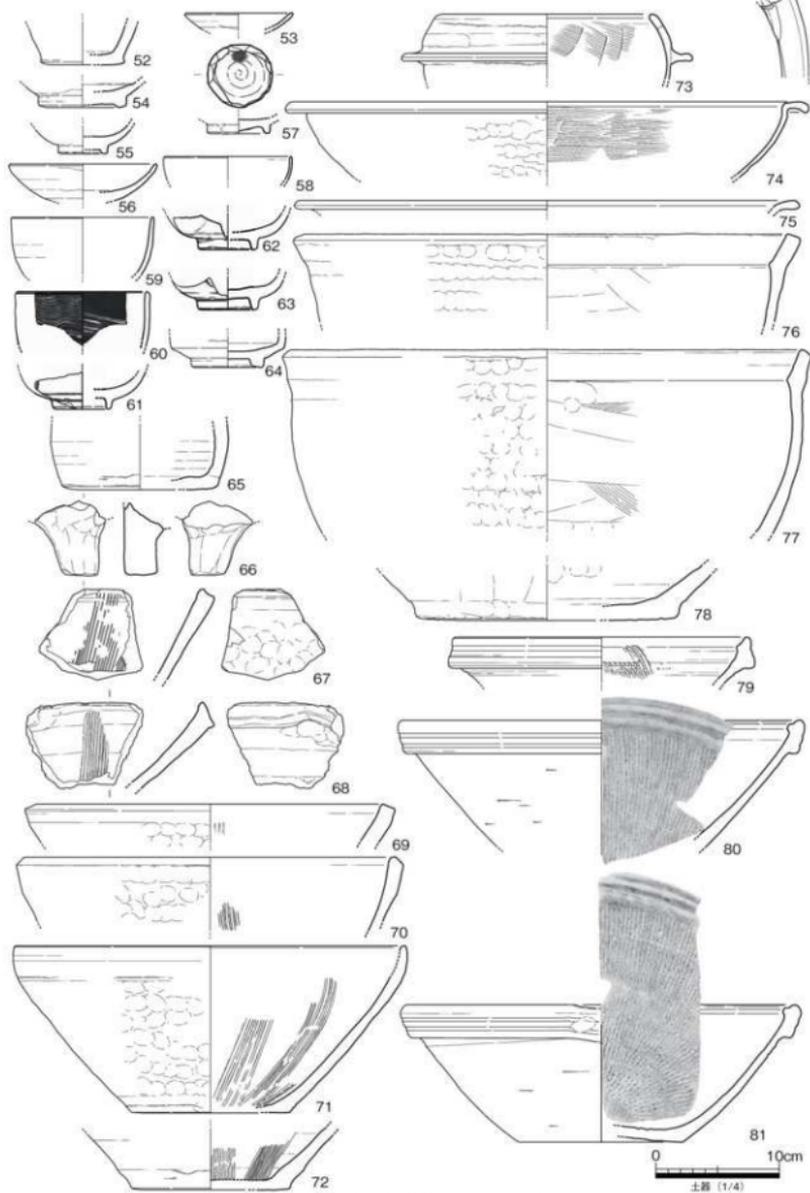
埋土は5層に細分され、3層に大別して遺物を取り上げた。上層は、ブロック土を多量に含み、溝廃棄後の人為的な埋め戻し土と考えられる。下層は、植物遺体を含むややグライ化した灰色粘土層であり、滞水下の埋没の可能性が考えられる。明瞭な流水堆積が認められないことや後述するように遺物が一定量出土していることから、区画溝として利用されていたと考えたい。

SD04は、本区東端A3・B3グリットで検出した南北溝で、既述したように屋敷地東端を限る区画溝である。SD01東側南北溝上面より掘り込まれる。南端は調査区外へ延長し、北端部はSD02に切られるが、出土遺物の内容から、本溝機能時にはSD02とは併存していた可能性は高い。検出面幅1.94 m、残存深0.14 m、断面形は皿状ないしU字状を呈する。埋土は、灰色粘土の単層で、SD01上層下位層に相当する。明瞭な流水の痕跡は認められず、区画溝としての機能が想定される。

遺物は、総量でコンテナ2箱程度出土した。図示した以外に、須恵器甕、土師質土器小皿・杯・鉢・足釜・土鍋・把手付鍋・播鉢・焙烙、瓦質土器羽釜・火鉢・播鉢・焙烙、東播系須恵器控鉢・甕、和泉型瓦器碗、亀山系瓦質土器、同安窯系青磁碗、備前焼播鉢、堺・明石産播鉢、瀬戸美濃系陶器碗等の小片、サマカイト剥片、安山岩角礫焼礫、鉄滓、焼土塊、動物遺体等が出土している。出土遺物のうち、

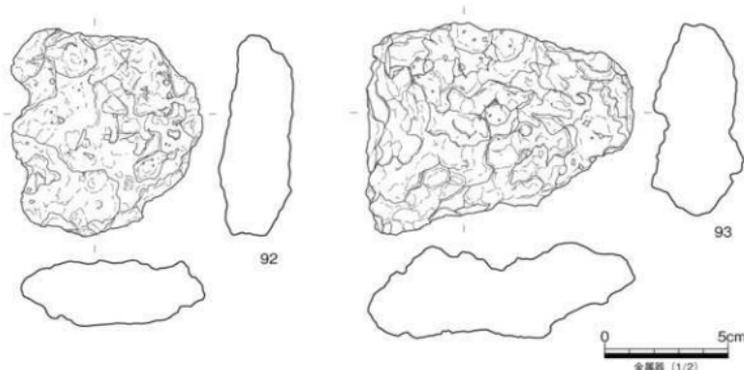


第 25 図 SD01・SD02・SX02・SX03 断面・SD01・SX02・SX03 出土遺物実測図 1



第26図 SD02・SD04 出土遺物実測図1





第28図 SD02・SD04 出土遺物実測図3

大宰府分類Ⅷ類の可能性のある白磁皿(53)や同Ⅳ類の白磁碗(54)、同Ⅰ-1類の龍泉窯系青磁碗(82)、土師質土器播鉢(69・70)、瓦質土器播鉢(67)は、12～13世紀代に遡り、上田分類DまたはE類とみられる青磁碗(55)や備前焼播鉢(68)とともに、先行遺構からの混入資料と思われる。また、土師質土器杯(52)や瓦質土器播鉢(71)、肥前系灰釉陶器皿(83)、同碗(57)、乗岡近世2期に位置付けられる備前焼播鉢(79)等は、先行する区画溝SD01からの混入であろう。本溝は、瓦質土器羽釜(73)や御覧系土師質土器焙烙(74)、肥前系陶胎染付碗(61～63)、堺・明石系焼締陶



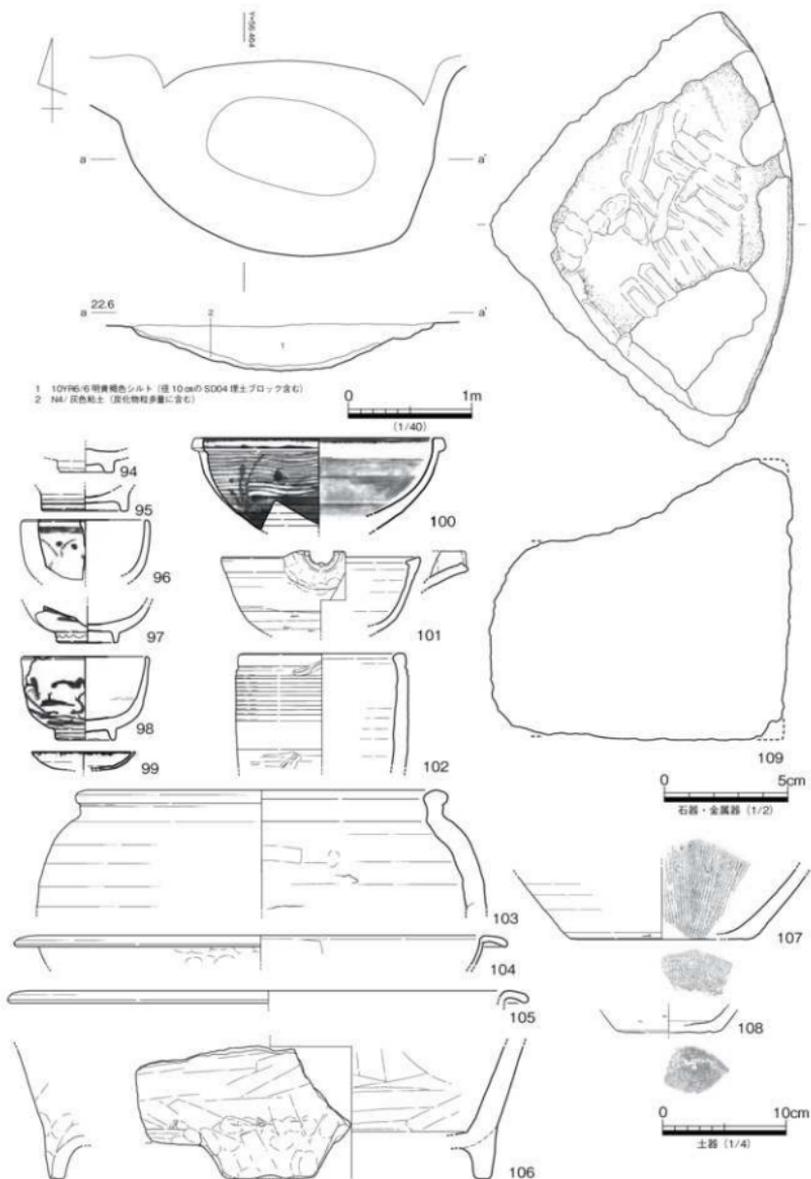
第29図 SD03断面図

器播鉢(80・81)等より、18世紀後半代には機能を停止し、埋め戻された可能性が考えられる。時期を特定することは困難だが、土師質土器火鉢の脚部片(66)や備前系焼締陶器甕の底部片(78)、同じく備前系焼締陶器徳利とみられる底部片(65)、菊丸瓦の瓦当部の小片(84)、角礫凝灰岩製の石臼(87)、角釘(88・89)、鉄滓(90～93)等も、本溝機能時の遺物とみてよいだろう。鉄滓は、本遺構からは図示した以外を含め、上層を中心に6点、総重量約1.078g出土した。最大のものが93で約415gあった。一方、肥前系陶器銅緑釉軸皿(56)や同呉器手腕(59)等、量的には乏しいが17世紀後半～18世紀前半以前に遡る資料も出土しており、先行するSD01との関係からも、本溝の開削時期は17世紀後半に遡る可能性が考えられる。開削期の遺物が乏しいのは、下層からも上層とほぼ同時期の遺物が出土しており、溝内を頻繁に浚渫等の改修を行っていたことが理由と考えられる。

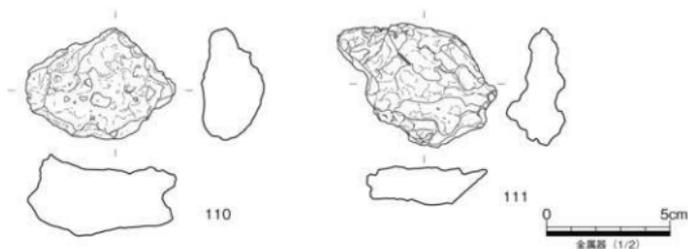
### SD03(第29図)

I区西端A1・A2グリッドで検出した東西溝で、西端は調査区外へ延長する。上述した屋敷地区画溝SD01・02東西溝とはほぼ並走し、検出長約5.2m、主軸方位N 81.62°Wを測る。検出面幅0.25～0.35m、残存深0.07～0.1mで、断面形は皿状を呈する。埋土は灰色シルトの単層であった。

遺物は、土器小片が1点出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。SD01・02とはほぼ並走し、溝の規模より屋敷地内の建物の雨落ち溝である可能性が高く、当該時期に位置付けられるものとする。



第30図 SX01平・断面・出土遺物実測図1



第31図 SX01 出土遺物実測図2

性格不明遺構

#### SX01 (第30・31図)

I区西半北端A2グリッドで検出された土坑である。SD02と重複し、後述する上層はSD02埋土と酷似し、主軸方向も概ね一致することから、開削時期が前後する可能性はあるが、同時期に埋め戻されたと判断される。長軸2.5m、短軸1.9m、平面形はやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.36mで、断面形は概ね皿状を呈する。

埋土は2層に分層された。上層は上述したように、SD01埋土ブロックを含む人為的な埋め戻し土である。下層は灰色粘土の細層で、滞水下の堆積の可能性があり、開削後一定期間オープンな状況であった可能性がある。

遺物は主に上層より、コンテナ半箱程度出土した。図示した以外に、須恵器、土師質土器小皿・碗・播鉢・焙烙・蓋、備前焼壺・播鉢、肥前系陶器器手碗、安山岩板石焼罌、鉄滓、動物遺体等が出土している。肥前系磁器皿(94)は17世紀中葉に遡り、先行するSD01からの混入資料であろう。土師質土器火鉢(106)や御躰系土師質土器焙烙(104・105)、肥前系陶胎染付碗(96～98)、同陶器刷毛目鉢(100)、備前系焼締陶器灯明皿(99)、同甕(103)、同匣鉢(102)、瀬戸・美濃系施釉陶器片口鉢(101)、堺・明石産焼締陶器播鉢(107・108)等より、既述したようにSD02とはほぼ同時期18世紀後半に埋め戻されたと考えられる。なお、101はSD02より同一個体とみられる破片が出土している。

#### SX04 (第32図)

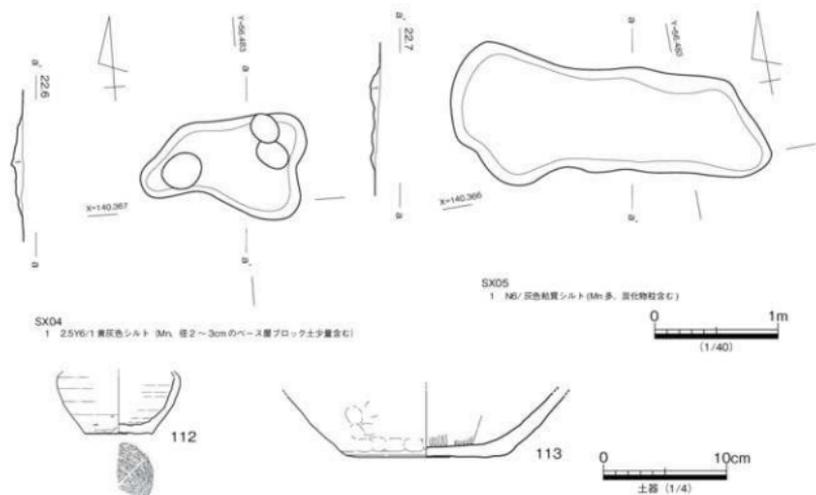
I区南東隅B3グリッドで検出した浅い落ち込みである。平面形は、長軸1.30m、短軸0.82mの歪な楕円形を呈する。また残存深は0.08mと浅く、断面形は皿状を呈する。底面にはやや起伏が認められ、また数基の柱穴が掘り込まれていた。

埋土は、黄灰色シルトの単層である。既述したSX02・03同様平・断面形状は不定形であり、当初土坑として開削されたが、雨水等により浸食されつつ自然埋没したものと考えられる。

遺物は、備前系焼締陶器壺(112)以外には、器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。遺構の内容よりSX02・03と同時期、17世紀前半代に位置付ける。出土遺物も大きな矛盾はないと思われる。

#### SX05 (第32図)

I区南東隅B3グリッドで検出した浅い落ち込みである。平面形は、長軸2.58m、短軸0.84～1.12mの歪な長方形を呈する。また残存深は0.06mと浅く、断面形は皿状を呈する。底面には起伏が顕著に認められ、数基の柱穴を検出した。埋土は、灰色シルトの単層である。埋土は異なるが、遺構の内容



第32図 SX04・SX05 平・断面・出土遺物実測図

は上述した新SX04と近似し、同様な性格が想定される。

遺物は、土師質土器擂鉢(113)以外には、器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。113は、被熱により器表面が剥離し、部分的に煤が付着する。また同一個体の破片がSX04より出土しており、17世紀前半代の遺構と考える。

## 第4節 II区の遺構・遺物

### 1 弥生時代

#### 土坑

#### SK05 (第34図)

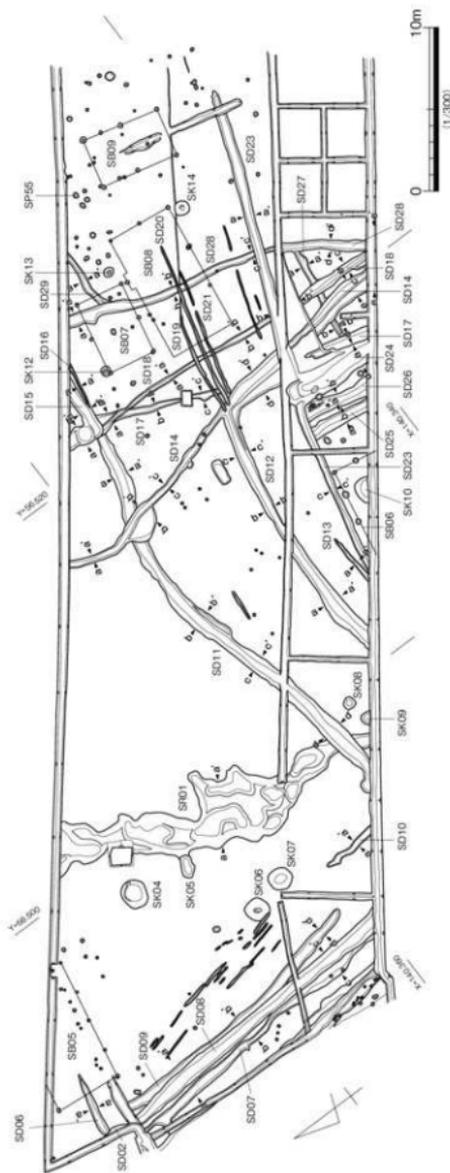
II区西平B3グリッドで検出した土坑で、SR01上面より穿たれる。平面形は、長軸140m、短軸074mの東西に長いやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.26m、断面形はU字状を呈する。埋土は2層に細分された。いずれも土坑開削後の自然堆積層と考える。

遺物は、上層より器種不詳の弥生土器小片が1点出土したのみである。出土遺物が乏しく詳細な時期を特定しがいたが、埋土の特徴や後出する遺物が出土していないことをもって、当該時期に位置付ける。

#### SK08 (第34図)

II区南西部B3グリッド、包含層下面で検出した土坑である。平面形は、一辺0.7mの略隅丸方形を呈する。残存深は0.42m、断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。

埋土は3層に細分された。中・下層は、ベース層ブロック土を含み、南東へ傾斜して堆積していることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。上層は、埋め戻し後の窪地を充填する堆積層で、弥生土器小片が大量に出土した。



第33図 II区遺構配置図

遺物は、弥生土器甕(114)のほか、同一個体と考えられる弥生土器小片等とサヌカイト剥片1点が出土している。出土遺物より、弥生時代中期中葉の遺構と考える。

#### SK09 (第34図)

II区中央南端B3グリッドで検出した土坑で、南半部は調査区外へ延長する。平面形は、東西0.78m、南北0.55m以上の楕円形を呈するとみられる。残存深は0.27m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は2層に細分された。下層中にはブロック土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片が1点出土したのみである。出土遺物が乏しく詳細な時期を特定し難いが、埋土の特徴や後出土する遺物が出土していないことをもって、当該時期に位置付ける。

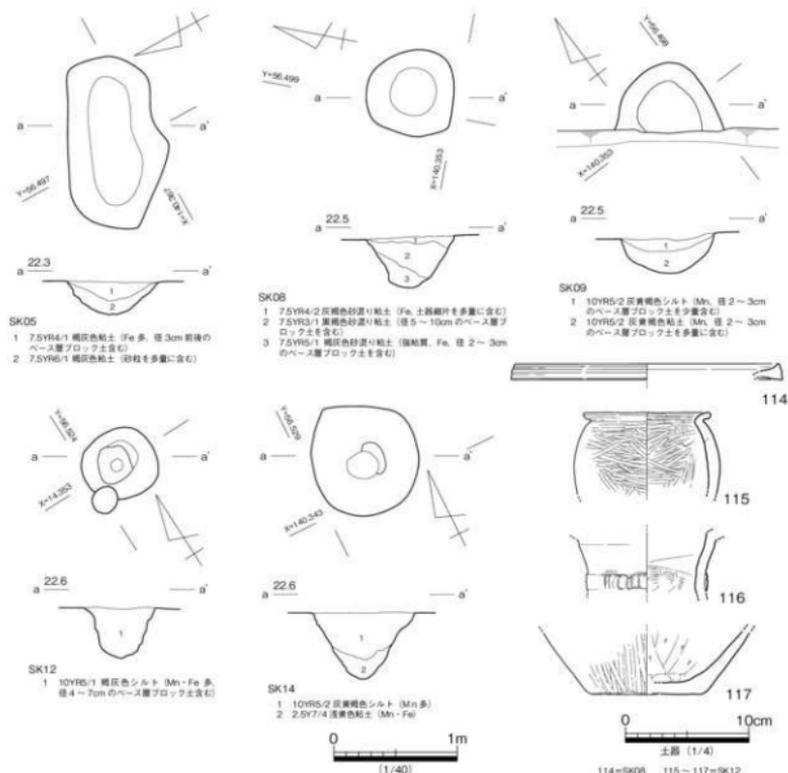
#### SK12 (第34図)

II区北東部B5グリッドで検出した土坑である。南肩部をSB01に伴う柱穴に切られる。平面形は、径0.6mの略円形を呈する。残存深は0.40m、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐色シルトの単層で、ベース層ブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器甕(115)、同壺(116・117)以外には、器種不詳の弥生土器小片等が少量出土したのみである。116は広口壺の頸部小片である。出土遺物より、弥生時代中期中葉の遺構と考える。

#### SK14 (第34図)

II区東端C5グリッドで検出した土



第 34 図 SK05・SK08・SK09・SK12・SK14 平・断面・SK08・SK12 出土遺物実測図

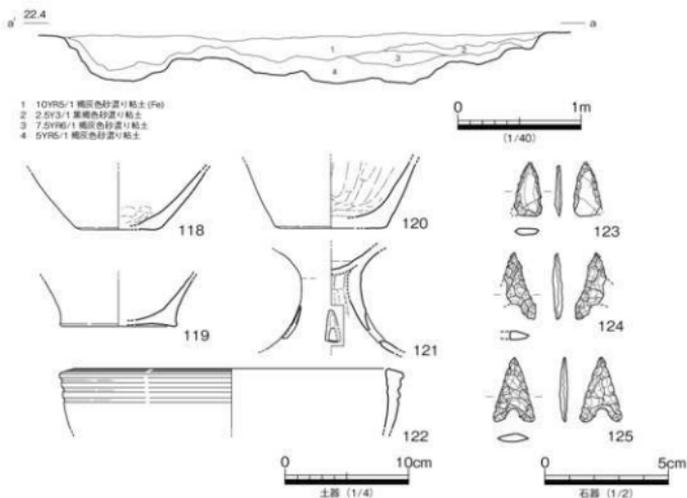
坑である。平面形は、径 0.84 m の略円形を呈する。残存深は 0.54 m で、底面径は 0.15 m と小さく、断面形は V 字形に近い逆台形状を呈する。埋土は 2 層に細分された。下層はベース層に近似した浅黄色粘土で、ベース層の流入土と考えられ、開削後一定期間オープンな状態で放置された可能性がある。

遺物は、器種不詳の弥生土器小片が 1 点出土したのみである。出土遺物が乏しく詳細な時期を特定しがいがいたが、埋土の特徴や古墳時代以降に下る遺物が出土していないことをもって、当該時期に位置付ける。

#### 自然河川・低地帯

#### SR01 (第 35 図)

Ⅱ区中央部、A4・B3・B4 グリッドで検出した旧河道であるが、後述するように明瞭な流水堆積を認めないことから低地帯として報告する。僅かに蛇行しながら北西方向に配され、南北両端は調査区外へ延長する。流路は、残存深 0.4 m 前後を測り、断面形は概ね皿状を呈し、底面には凹凸がやや顕著に認



第35図 SR01断面・出土遺物実測図

められた。埋土は2～4層に細分され、上下2層に大別して遺物の取り上げを行った。基本的に褐色系砂混り粘土層が堆積し、下層に砂粒の混入がやや多量に認められた。上層（第35図1～3層）は、南半部西肩付近を中心に数層に細分され、上位層は流路上面を含め東西に広く層厚0.1m程度の包含層状に堆積していた。水流の乏しい条件下で、低湿地状を呈して徐々に埋没したことが想像される。

遺物は、流路南半部下層を中心にコンテナ半箱程度出土している。弥生土器壺（118）・同甕（119・120）・同高杯（121）・同台付鉢（122）・サヌカイト裂石鏃（123～125）以外には、弥生土器広口壺等の小片、サヌカイト剥片・碎片等がある。出土遺物より、弥生時代中期中葉には埋没したと考える。

## 2 中世

### 掘立柱建物

#### SB05（第36図）

Ⅱ区北西隅A3グリッドで検出した。北半部は調査区外へ延長し、桁行4間以上、梁間1間以上、主軸方向N79.6°Wの東西棟の棚柱建物として復元した。梁間中央部にSD06が位置し、中央穴はSD06により削奪された可能性が高いと思われる。桁行7.74m以上、梁間4.15m以上、床面積32.12㎡以上を測り、平面プランはやや歪んだ矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、1.8～2.06mとやや不均等である。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.14～0.26mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.12～0.24m、底面の標高22.08～22.10mであった。

遺物は、出土しておらず時期は特定できない。SD06より先行することや遺構の内容等より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

#### SB06（第37図）

Ⅱ区C4グリッドで検出した。南半部の大半が調査区外へ延長するため、建物方向は不明。東西2間

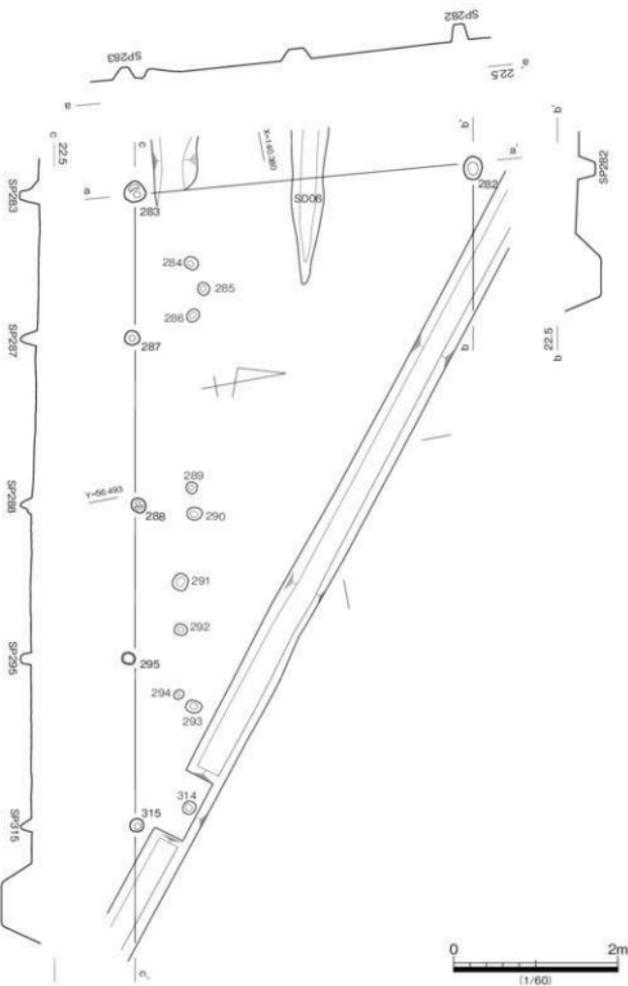
以上、南北1間以上、主軸方向N78.74°Wの側柱建物として復元した。SK10と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。東西列3.38m以上、南北列15m以上、床面積5.07㎡以上を測り、平面プランはやや整った矩形を呈する。東西列の柱間寸法は、1.55～1.83mとやや不均等である。柱穴の掘り方は、径もしくはは長軸0.25～0.45mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.17～0.32m、底面の標高22.37～22.52mであった。

遺物は、SP375より器種不詳の土師質土器小片が1点出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。遺構

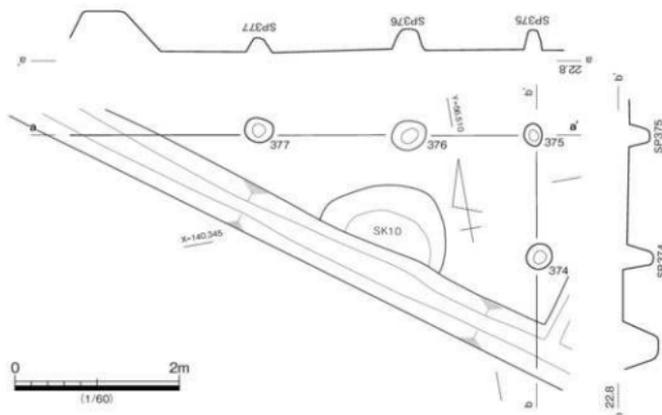
内容や近世以降に下る遺物が出土していないこと等より、当該時期に位置付けられるものとする。

#### SB07 (第38図)

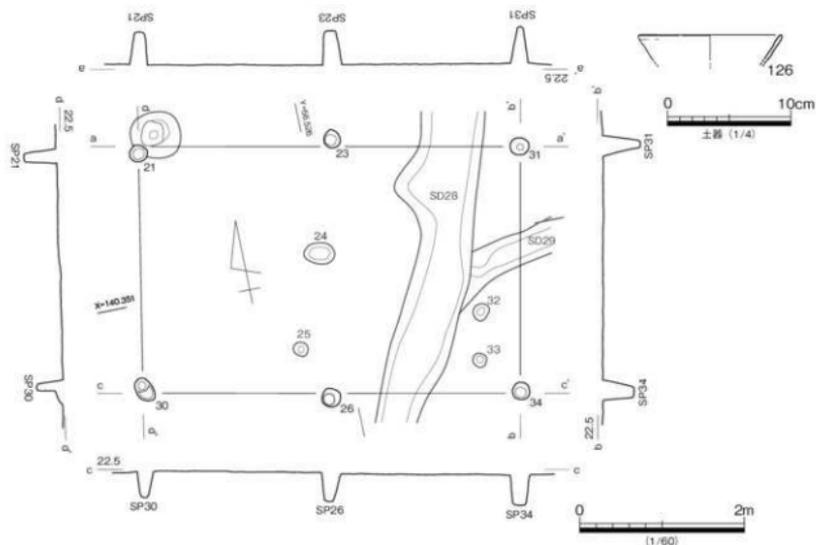
Ⅱ区B5・C5グリッドで検出した。桁行3間、梁間1間、主軸方向N77.75°Wの東西棟の側柱建物として復元した。御溝により、北東隅柱を欠く。SK12、SD28・29と重複し、SK12より後出するが、その他の遺構とは柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。桁行は北列で4.55m以上、南列



第36図 SB05平・断面図



第37図 SB06 平・断面図



第38図 SB07 平・断面・出土遺物実測図

で6.65 m、梁間は西列で2.93 m、床面積19.48㎡を測り、平面プランはやや整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.07～2.3 mとやや不均等である。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.12～0.3 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.16～0.42 m、底面の標高22.01～22.27 mであった。

遺物は、SP30より出土した土師質土器杯(126)以外に、土師質土器小皿、黒色土器碗、瓦質土器等の小片が少量出土したのみである。出土遺物より本建物は、13世紀中葉から14世紀前葉の時期と考

えられる。

**SB08 (第39図)**

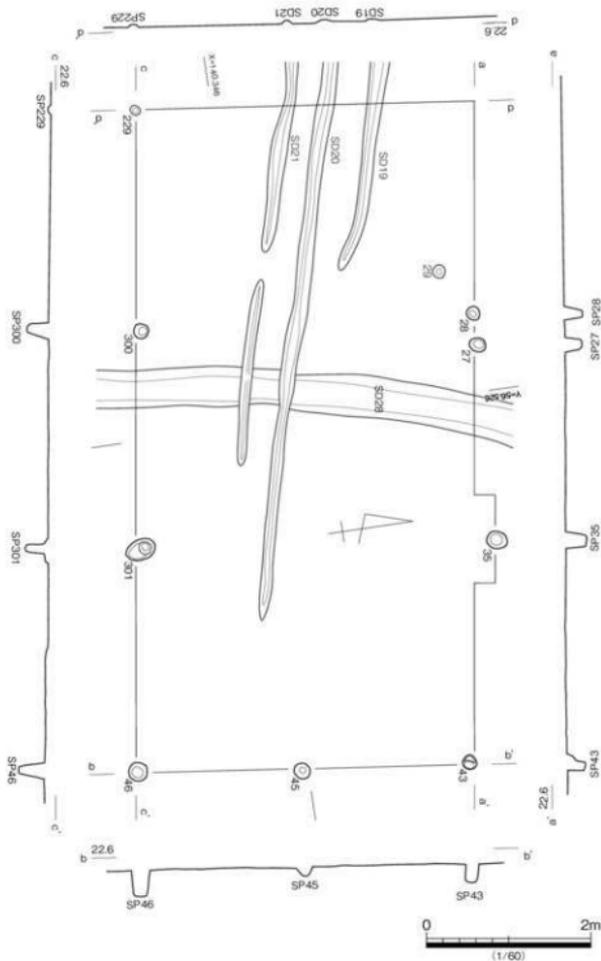
Ⅱ区C5グリッドで検出した。桁行3間、梁間2間、主軸方向N 81.84°Wの東西棟の側柱建物として復元した。北西隅柱と西列中央穴を欠く。SD28と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明。桁行は北列で5.55m以上、南列で8.13m、梁間は東列で4.0m、床面積32.52㎡を測り、平面プランはやや整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.7～2.8mとほぼ均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.13～0.35mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.04～0.31m、底面の標高22.13～22.49mであった。

遺物は、SP301より器種不詳の土器小片1点が出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。

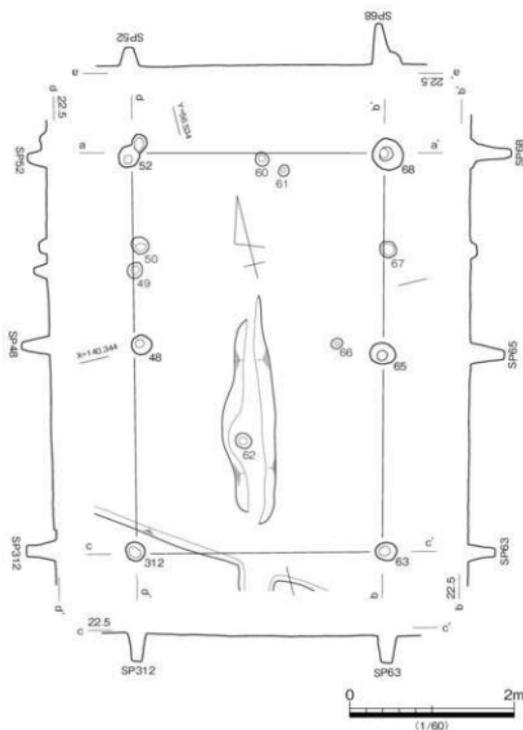
遺構内容や近世以降に下る遺物が出土していないこと等より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

**SB09 (第40図)**

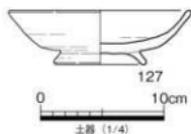
Ⅱ区C5グリッドで検出した。桁行2間、梁間2間、主軸方向N 13.83°Eの南北棟の側柱建物として復元した。南列中央穴を欠く。桁行は東列で4.86m、西列で4.81m、梁間は北列で3.08m、南列で3.02m、床面積14.75㎡を測り、平面プランはやや整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.42～2.54m



第39図 SB08 平・断面図



第40図 SB09平・断面図



第41図 SP55出土遺物実測図 出土遺物は乏しいが、遺構内容や後述するSK07と形状が近似していること等より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

#### SK06 (第42図)

Ⅱ区西南部B3グリットで検出した土坑である。平面形は、南北158m、東西145mの楕円形を呈し、残存深さ0.44m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は3層に細分された。中位層にはベース層ブロック土が大量に含まれ、下位層堆積後人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、土師質土器杯小片1点のほか、器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。出土遺物は乏しいが、遺構内容や後述するSK07と埋土や形状が近似すること等より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

とやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.22～0.40mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.08～0.34m、底面の標高22.06～22.32mであった。

遺物は、SP48とSP68より、器種不詳の土師質土器や瓦質土器の小片が数点出土したのみである。出土遺物や遺構内容等より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

#### 柱穴

##### SP55 (第41図)

127は、Ⅱ区北東隅C5グリットSP55より出土した土師質土器碗で、12世紀前葉頃に位置付けられる。

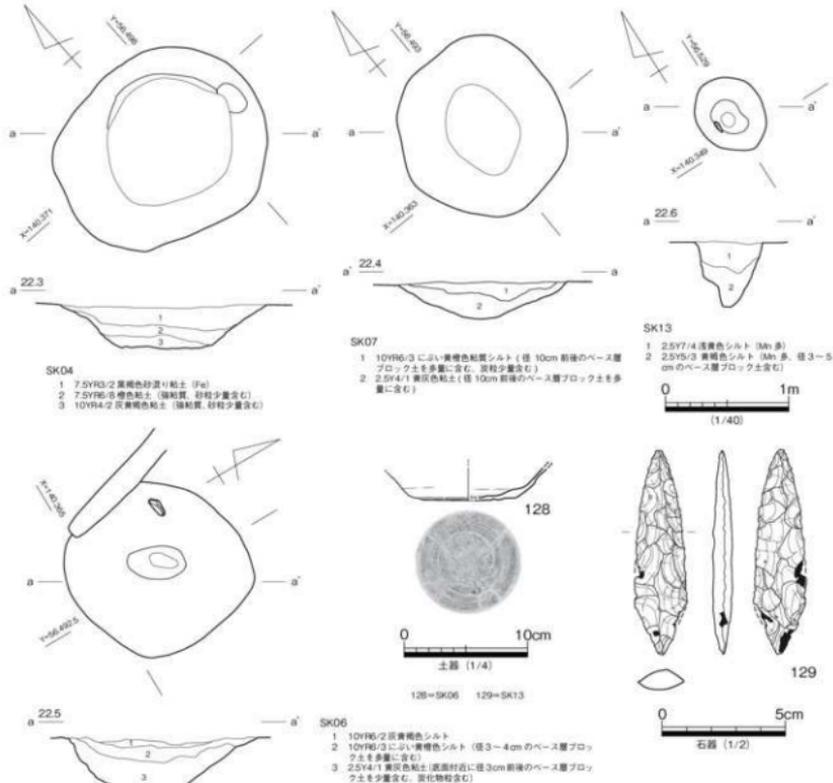
#### 土坑

##### SK04 (第42図)

Ⅱ区北西部A3グリッドで検出した土坑である。平面形は、東西1.70m、南北1.70mの楕円形を呈し、残存深は0.33m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は3層に細分された。中位層は、

ベース層の流入土と考えられ、開削後一定期間オープンな状況であったと考えられる。

遺物は中・下位層より、土師質土器小片が数点出土したのみである。



第42図 SK04・SK06・SK07・SK13平・断面・SK06・SK13出土遺物実測図

#### SK07 (第42図)

Ⅱ区南西部B3グリッドで検出した土坑である。平面形は、南北1.45m、東西1.35mの楕円形を呈し、残存深は0.36m、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に細分された。上・下位層とも、径10cm前後のベース層ブロック土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。また、埋土は上述したSK15と近似し、近接した時期に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物は、土師質土器杯(128)以外に、器種不詳の土師質土器小片と瓦質土器小片がそれぞれ1点出土したのみである。出土遺物より、14世紀前半を上限とする時期に埋め戻されたと考える。

#### SK13 (第42図)

Ⅱ区北東隅部C5グリッドで検出した土坑である。平面形は、長軸0.6m、短軸0.55mの南北にやや長い楕円形を呈する。残存深は0.53mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は2層に細分された。上層はベース層に近似した浅黄色シルトで、ベース層の流入土と考えられる。下層は黄褐色シルト

で、底面近くに壁面の崩落と考えられる粒径3～5cmのベース層のブロック土が堆積していたことから、開削後一定期間オープンな状況であったと考えられる。

遺物は、西壁際上面より0.27m下がった下層中より、有舌尖頭器(129)が1点のみ出土した。調査時に一部破損したが、ほぼ完形品で、全長8.3cmを測る大型品である。他に同時期の遺物が出土した遺構が皆無であることや埋土等より混入資料と考える。したがって時期を特定することは困難だが、埋土等遺構の内容より当該時期の遺構と考える。

## 溝

### SD06 (第43図)

Ⅱ区北西隅A3グリットで検出した東西直線溝である。西端はSD02に切られ、東端は調査区内で途切れ、延長約4.0mを検出したにとどまる。流路方向N77.42°Wと、ほぼ条里型地割に合致して配され、検出面幅0.45～0.5m、残存深0.11m、断面形は皿状を呈する。埋土は黄灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は、器種不詳の須恵器と土師質土器小片が数点出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。遺構の内容や近世以降に下る遺物が出土していないこと等から、当該時期に位置付けられるものとする。

### SD07 (第43図)

Ⅱ区西端A3～B3グリットで検出した南北溝で、北端は近世区画溝SD02に切られ、南端は調査区外へ延長する。またSD04・28と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも先行する。検出面幅0.4～0.6m、残存深0.06～0.14m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色粘土の単層であった。

遺物は、土師質土器皿・鍋、十瓶山周辺産須恵器碗、東播系須恵器捏鉢等の小片が少量出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。出土遺物や既述したSD08との重複関係等より、当該時期に位置付けられるものとする。

### SD08 (第43図)

Ⅱ区西端A3～B3グリットで検出した溝で、SD09・07と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。本溝周辺に同規模かつ概ね方向を同じくする溝が繰り返し開削されていることは、本溝西側屋敷地の東辺に限る区画線が、屋敷地経営期間を通じて永らく維持されたことを意味している。

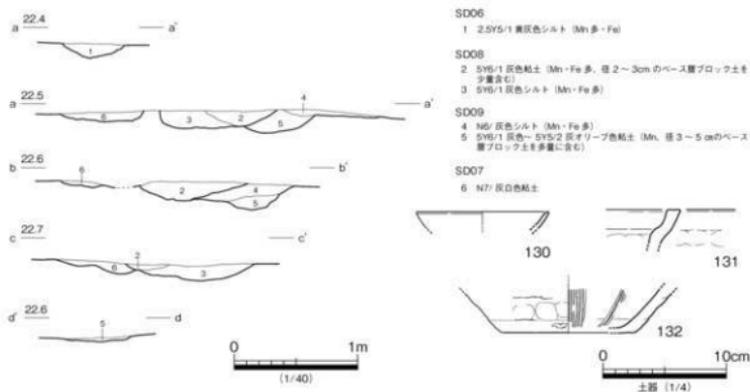
さて本溝は、検出面幅0.88～0.93m、残存深0.12～0.13m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は1～2層に細分され、灰色系粘土ないシルトが堆積し、いずれも自然堆積層と考えられる。

遺物は、コンテナ半箱程度出土した。図示した以外に、土師質土器杯・足釜、東播系須恵器捏鉢、備前焼播鉢、龍泉窯系青磁碗等の小片、サヌカイト剥片が出土している。土師質土器皿(130)は、12世紀代に遡り混入資料であろう。土師質土器鍋(131)や備前焼播鉢(132)等より、本溝は14世紀末～15世紀前葉を中心とした時期と考える。

### SD09 (第43図)

Ⅱ区西端A3～B3グリットで検出した南北溝で、南北両端は調査区内で途切れる。延長約17.6mを検出した。既述したようにSD08より先行する。検出面幅0.65～0.8m、残存深0.18～0.22m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は2層に細分され、灰色系シルトない粘土が堆積する。また、上層は下層を掘り込むように堆積しており、改修の可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の須恵器、土師質土器、黒色土器、瓦質土器等の小片が少量出土したのみであり、



第43図 SD06～SD09 断面・SD08 出土遺物実測図

詳細な時期を特定することは困難である。出土遺物や既述したSD08との重複関係等より、当該時期に位置付けられるものとする。

#### SD11 (第44図)

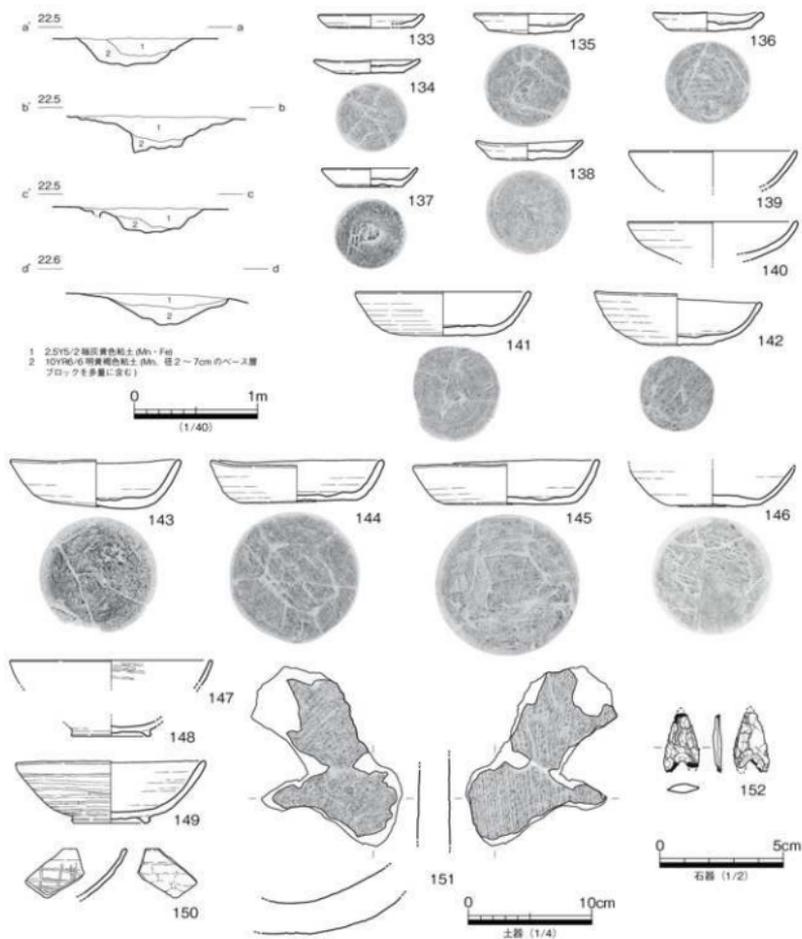
Ⅱ区中央B4～B5グリッドで検出した溝である。緩く弧を描いて北東方向に配され、両端は調査区外へ延長する。またSD14・15・18、SR01と重複し、切り合い関係よりSR01より後出し、その他いずれの溝よりも先行する。検出面幅0.6～0.95m、残存深0.2～0.29m、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。なお、底面には水流に起因するとみられる起伏が認められた。流路底面の標高は、検出範囲で22.1～22.2m前後で一定し、流下方向は特定できなかった。埋土は2層に細分され、下層にはベース層ブロック土が多量に混入し、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。また、上層は下層を掘り込むように堆積していることから、下層埋め戻し後に再度開削された改修溝の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質土器皿(133～138)、同杯(139～146)、同碗(148)、黒色土器B類碗(147)、須恵器碗(149)、和泉型瓦器碗(150)、布目平瓦(151)、サヌカイト製石鏃(152)等がコンテナ1箱程度出土した。図示した遺物のうち、黒色土器類は12世紀前葉とやや古く、本溝開削時期を示す可能性はあるが、既述した埋土の内容より断定はできない。上層より出土した、ほぼ完形に近く復元される土師質土器杯や同皿、須恵器碗などより、改修溝については12世紀末から13世紀前葉頃に位置付けられるものとする。

#### SD13 (第45図)

Ⅱ区中央南端C4グリッドで検出した東西走する小溝である。流路方向N 85.73° Eと概ね正方位に配され、西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れ、約3.2mを確認した。検出面幅0.27m、残存深0.03m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は灰色粘土の単層であった。

遺物は、土師質土器挿鏃小片が1点出土したのみである。出土遺物より14世紀代を中心とした時期と考えておく。



第44図 SD11 断面・出土遺物実測図

### 3 近世

#### 土坑

#### SK10 (第46図)

Ⅱ区東南部C4グリッドで検出した土坑で、南半は調査区外へ延長する。平面形は、東西1.57m、南北0.8m以上の楕円形を呈するとみられる。残存深0.22m、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に細分された。上層はベース層ブロック土を多量に含み、下層はベース層の再堆積土とみられ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、土師質土器足釜小片、肥前系陶器碗小片、瓦小片がそれぞれ1点のほか、器種不詳の土師質土器小片が数点出土したのみである。出土遺物より18世紀代の遺構と考えられる。

溝

#### SD12・14・17 (第47図)

Ⅱ区中央部南半B4～C4グリッドで検出した区画溝群である。結論から先に示すと、埋土の堆積状況や出土遺物より、SD12・17が当初平面L字状の区画溝として開削され、その後SD17は廃されて、SD12・14の平面T字状の溝へと改修されたと考える。しかし、調査段階でSD14とSD17の重複関係について、SD25により多くの部分が攪乱を蒙っていたこともあり、切り合い関係がわからないまま掘り下げってしまった。したがって両溝の重複部分で、遺物を分けて取り上げられなかったため、改修の時期については明確にはできていない。

さてSD12は、西端が調査区外へ延長し16.8mを検出した。流路方向N 84.09° W、検出面幅0.55～0.85m、残存深0.07～0.12mを測り、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は2層に細分されたが明瞭な流水痕跡は認められなかった。

南北溝SD17は、SD25南側で検出したが、流路方向や埋土より、SD14と重複しながらSD12へ接続するとみられる。検出面幅0.7m以上、残存深0.21mで、断面形は皿状を呈する。埋土は2層に細分され、下位層中には多量の砂粒が認められ、弱水流下での堆積の可能性が考えられた。

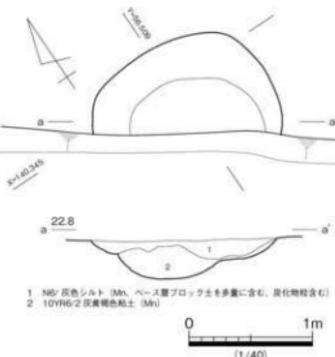
南北溝SD14は、北端部でやや東に屈曲するものの概ねN 10.43° Wに配され、検出面幅0.4～1.8m、残存深0.03～0.13m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は北半部で単層、南半部で2層に細分され、SD12と近似する。

各溝底面の標高は、SD19が西端2236m、東端2248m、SD14北端2238m、南端2240mをそれぞれ測り、SD19は西へ流下し、SD14は北へ流下するが、SD19とSD14合流部ではSD14がやや深く、底面の高低差から判断する限り、SD14の用水をSD12へ通水させるためには、堰等を設けなければならぬが、その痕跡は調査では捉えることはできていない。SD14はSD12との合流部の南北で溝幅は大きく異なり、おそらくはSD12とSD14南半部のL字溝が優先して配され、余剰水を北へ排水するためにSD14北構が追加して設置されたとも考えられよう。

上面を大きく削平されているためか、遺物量は乏しく総量でコンテナ1箱にも満たない。図示した以外に、須恵器、土師質土器足釜、亀山系瓦質土器、肥前系染付碗、同陶器刷毛目録、丸瓦等の小片やサヌカイト剥片が出土している。土師質土器鍋(153)は14世紀中葉～後半代に遡り、先行遺構からの混入資料と考える。SD17からは、図示していないが17世紀前半代までの遺物が出土しており、SD12より出土した土師質土器杯(154)や乗岡近世1～2期に位置付けられる備前系統締締陶器插鉢(155)・壺(156)より、L字状溝の開削時期を17世紀前葉頃と考えたい。初鋳1411年の永楽通寶(158)も、



第45図 SD13断面図



第46図 SK10平・断面図

国内での流通時期を考慮すると当該時期と考えてよいだろう。なお本銭は、裏面に摩耗が顕著に認められ、鑿等で切断しようとしたのか、波打つように歪んでいる。また、SD12・20からは図示していないが、18世紀後半代に下る肥前系染付碗や同陶器刷毛目鉢が出土しており、T字溝への改修・埋没時期の下限を示すと考える。さらに本溝の機能は、出土遺物や流路の方向等より、約3.5m南に位置するSD23・24へ付け替えられ、現在へと継承されたと考える。

#### SD15 (第48図)

Ⅱ区B5グリット、調査区北端部で検出したL字状に配された溝である。西側南北溝1.3m、東側東西溝2.95mを検出したのみであるが、整った矩形を呈することから、区画溝の可能性を考える。検出面幅0.75～1.24m、残存深0.18～0.22m、断面形は皿状を呈する。東西溝の流路方向N84.87°Wと、概ね正方位に配される。埋土は2層に細分された。下層はブロック土を多量に含み、人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。

遺物は、東西溝を中心に、土師質土器杯(160)、黒色土器碗、丸瓦(162)、輪羽口(161)、鉄滓(163)、石材不明の砥石(164)等が極少量出土したのみである。輪羽口は、端部とみられる小片で、外面に暗灰色のガラス状溶融物が厚く付着する。図示した遺物を含め出土遺物の多くは、年代的に重複するSD11の遺物の混入の可能性が高く、直接本溝の時期を特定できる遺物に恵まれていない。区画溝として、既述したSD12・17区画溝と規模や流路方向が近似し、重複する遺構との関係を来さないこと等より、17世紀前葉頃の遺構と考える。

#### SD18 (第48図)

Ⅱ区東半B5・C5グリットで検出した南北溝である。流路方向N4.79°Eと、やや蛇行するもののほぼ正方位に配される。SD12・15・17・23・28と重複し、切り合い関係よりSD17・27・28より後出し、SD11・12・15よりも先行する。検出面幅0.27～0.38m、残存深0.07～0.13mで、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層で、ブロック土を含むことから人為的に埋め戻された可能性が高いと判断された。その場合、調査区南端で重複し、ほぼ同方向へ配されたSD14へ改修された可能性も考えられる。その場合、流路方向がSD17と近似することも傍証とすることができよう。

遺物は、図示した以外に、須恵器、土師質土器小皿・土鍋、黒色土器等の小片が若干量出土した。出土遺物が乏しく時期決定は困難だが、既述したSD17との関係を踏まえるなら、17世紀前葉を前後する時期と考える。

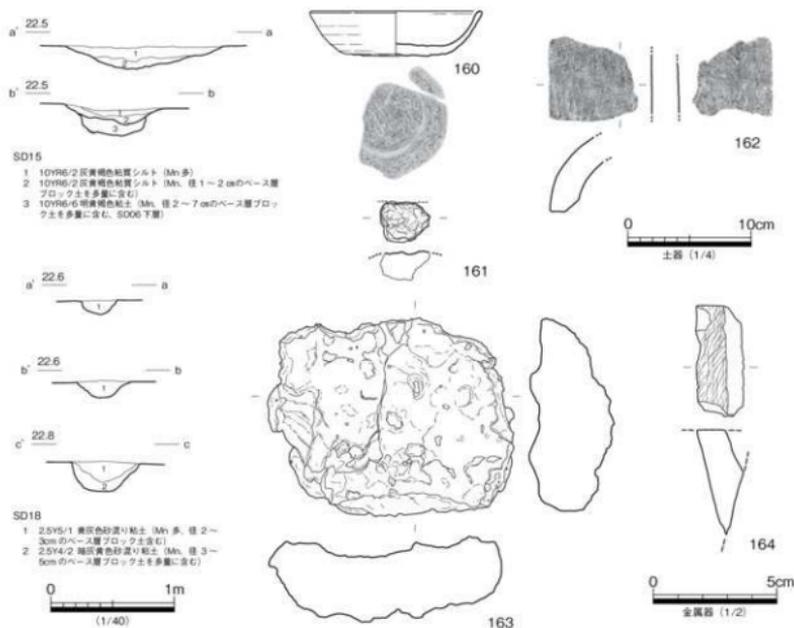
#### SD23・24 (第49・50図)

Ⅱ・Ⅲ区中央部南端C4～C5グリットで検出した。平面T字状に配され、既述したSD12・14に後続する区画溝と考えられる遺構である。SD12・17・18・26・25・28と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。東西溝SD23の西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内で途切れ、30.6mを検出した。検出面幅0.2～2.7m、残存深0.03～0.3m、断面形は概ね碗底状を呈する。南北溝との合流部の東西で、検出面幅に大きな相違が認められる。これは、後述する埋土下層が合流部以東にのみ認められることによる。

南北溝SD24は、SD23中央部より南へ概ね直交して配され、南端は調査区外へ延長し、5.1mを確認したにとどまる。流路方向N6.18°E、検出面幅1.4m、残存深0.34～0.65m、断面形は概ね碗底状を呈し、SD23との合流部底面は水流により抉れたためか、やや深く掘り込まれていた。

埋土は、SD23で5層、SD24で6層に細分された。SD24上位2層は、SD24とはほぼ重複して開削さ

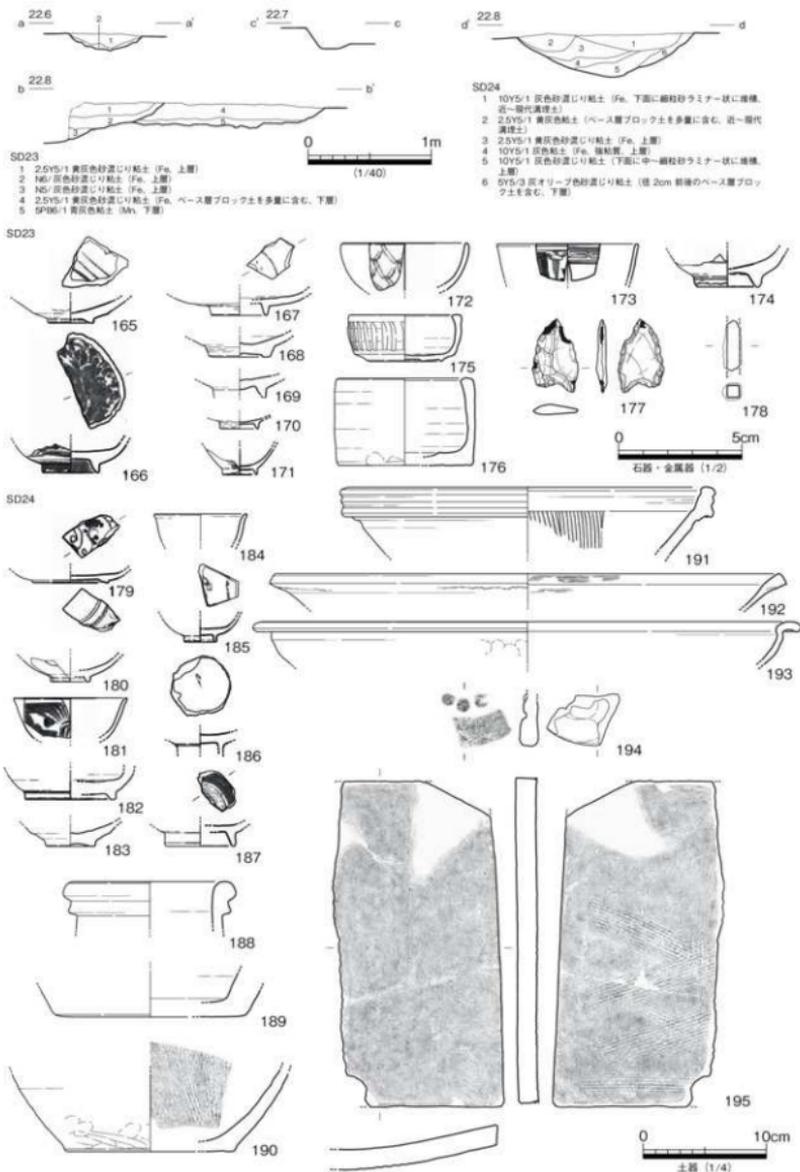




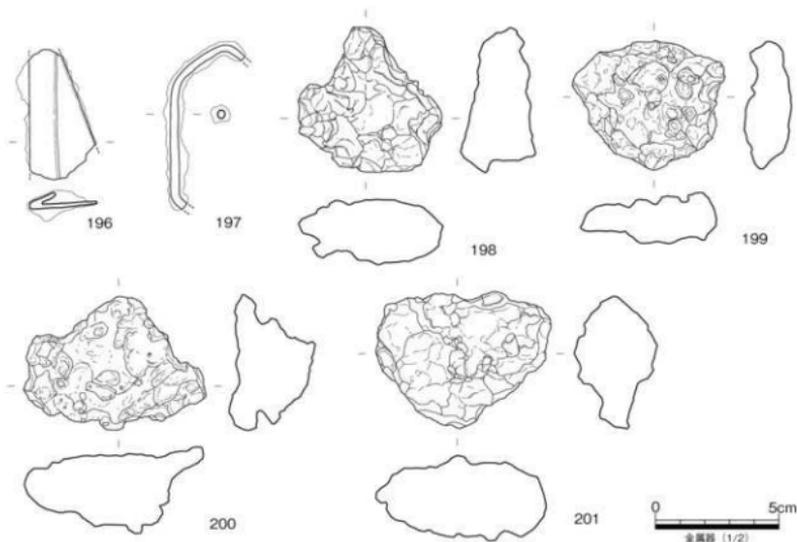
第48図 SD15・SD18 断面・SD15 出土遺物実測図

れた近～現代の水路埋土であり、これは除外して記述する。各溝埋土は、上下2層に大別され、上層は下層堆積後に上面より掘り込まれるように堆積しており、改修後の堆積層と考えられる。上層は3層に細分され、改修溝底面を中心に溝機能時の堆積層とみられる細～中粒砂のラミナ堆積が認められた。下層は1～2層に細分され、上位層にはベース層のブロック土が多量に含まれ、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。なお、下層は既述したようにSD23では、SD24合流部以東にのみ認められ、以西には認められないことから、改修前はSD24とSD23東溝の平面L字状に開削されていたものが、何らかの理由により埋め戻され、平面T字状の区画溝へと改修されたと考えられる。

遺物は、周辺の諸溝と比して多く、両溝よりコンテナ1箱程度出土した。須恵器、土師質土器足釜・甕・火鉢・壺・焙烙、御覧系瓦質土器焙烙 (192・193)、備前系焼締陶器搦鉢・壺? (189)・匣鉢 (176)、堺・明石産搦鉢 (190・191)、常滑焼、龍泉窯系青磁碗、肥前系陶器碗 (168)、灰釉皿 (183)、鉄絵皿 (165)・刷毛目碗 (166)・刷毛目鉢 (187)、同磁器染付碗 (173・184・186)・皿 (167)・瓶 (182)・紅猪口 (171)、同青磁染付碗、同青磁香炉 (175)、同陶胎染付碗 (169・174)、波佐見系くわわか碗 (172)、京・信楽系陶器丸碗 (170)・色絵丸碗 (180)、瀬戸美濃系腰緒輪碗・色絵磁器碗 (181)、磁器染付碗 (185)、同皿 (179)、施釉陶器壺? (188)、軒丸瓦 (194)・平瓦 (195)・丸瓦等の小片、鉄製品 (178・196・197)、鉄滓 (198～201)、サヌカイト剥片等が出土している。出土した遺物の時期幅は広く、先に18世紀後半としたSD12を切って穿たれていることから、165～168・172・180・183等18世紀以前に遡る資料は、溝の規模から考えても、混入資料とみてよいだろう。上層出土の遺物ながら、170・



第 49 図 SD23・SD24 断面・出土遺物実測図 1



第50図 SD23・SD24 出土遺物実測図2

171・173・180・184・190・191等の18世紀後葉～19世紀初頭の遺物が開削時期を示し、最終埋没は185より明治期以降に下る。なお、169は被熱により、器表面の軸が発泡変色している。178は鉄釘の小片、196は鉄製鋸・鋸先の基部片として図示した。197は径0.3cmの断面円形を呈する、針金状の鉄製品である。また鉄滓は、本遺構からは図示した4点、計461.66gが出土している。

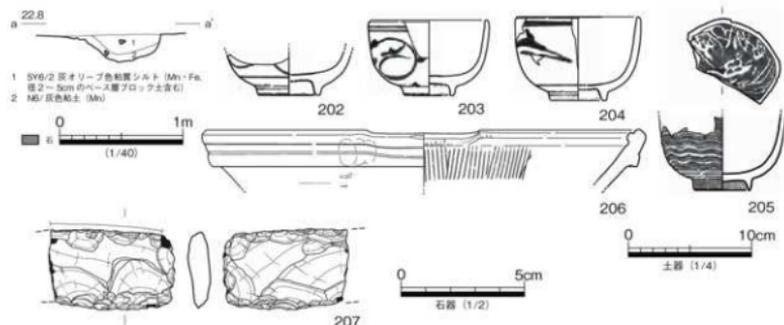
#### SD25 (第51図)

Ⅱ区中央南端C4グリットで検出した南北溝で、後述のSD26の西に隣接して配される。SD26同様に、北端はSD23に切られ、かつSD23以北で延長は確認されず、南端は調査区外へ延長する。SD26と有機的な関係にあることは明らかで、出土遺物よりSD26の後継溝の可能性がある。流路方向N 8.38° Eに配され、検出面幅0.75～0.8m、残存深0.22m、断面形は概ねU字状を呈する。埋土は2層に細分され、上層はベース層ブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。また、溝底より少量ながら長径0.1～0.2m程度の小礫が出土しており、SD26と同様な石積護岸施設を伴っていた可能性も考えられる。

遺物は、須恵器、土師質土器足釜・土鍋・播鉢、瓦質土器、東播系播鉢、肥前系陶胎朱付碗(202～204)・同刷毛目碗(205)、備前焼壺、堺・明石産焼締陶器播鉢(206)、平瓦等の小片のほか、打製石庖丁(207)等が若干量出土した。出土遺物より、19世紀前葉を中心とした時期に機能し、SD26の廃絶後に付け替えられた可能性が考えられる。

#### SD26 (第52図)

Ⅱ区中央部南端C4グリットで検出した南北溝である。北端は新SD23に切られ、SD23より北側では地下げによる削平のため延長部は確認されず、南端は調査区外へ延長し、約4.0mを検出したにとど



第51図 SD25断面・出土遺物実測図

まる。流路方向はN 130.6° Eで、ほぼ条里型地割の方向と合致する。検出面幅0.8～0.9m、残存深0.12m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は灰色系シルトの単層で、ベース層ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。

また、SD23との合流部南側、溝東肩部で集石を検出した。集石は、径または一辺0.1～0.2m程度の円～亜角礫を流路方向に沿って直線状に敷き並べていた。石材の隙間からは、少量だが肥前系陶磁器片等が出土している。石材は、砂岩系のものを中心に、花崗岩系のものが少量混じっており、一部に被熱により赤変したものも認められた。おそらくは生活空間で何らかの用途に使用していたものを転用したのであろう。検出状況より、溝護岸施設の基礎部分と思われるが、石材や溝の規模から、数段積み重ねた小規模なものであったと考えられる。また残存状況から、埋め戻しに際して、石材の再利用がはかられた可能性も想定される。

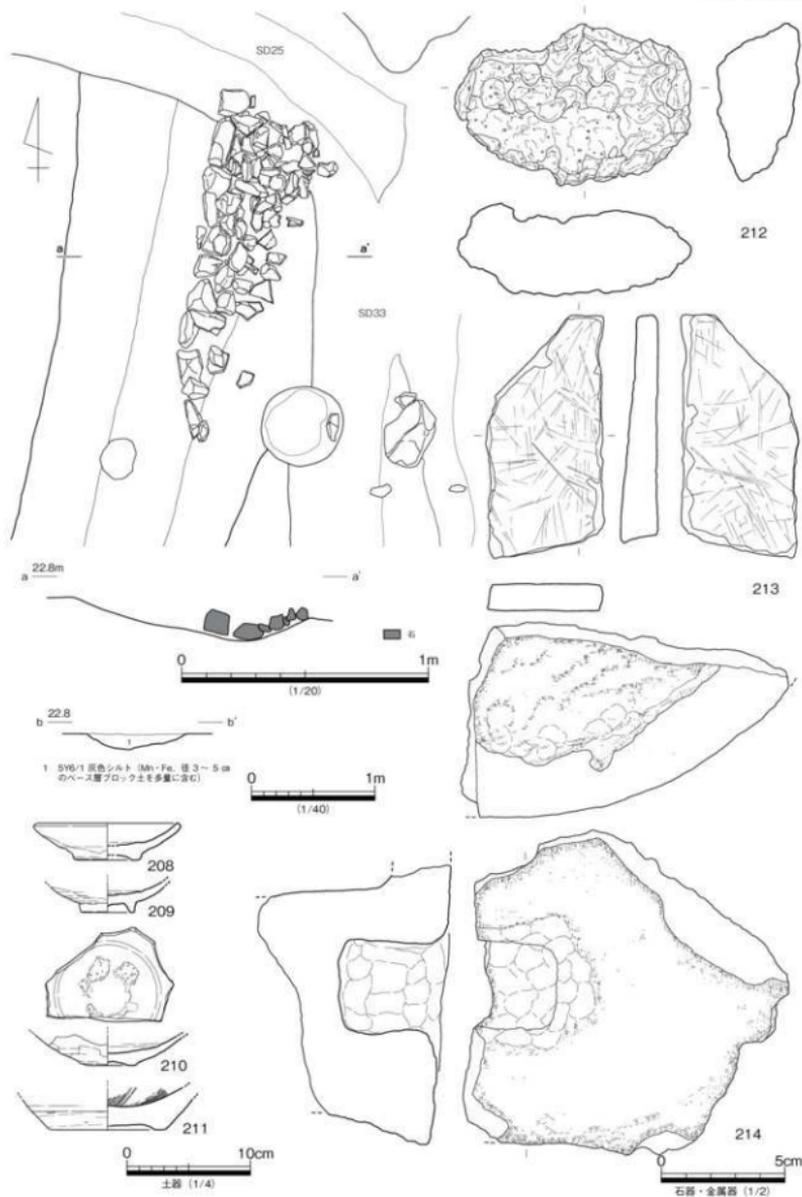
遺物は、器種不詳の須恵器、土師質土器足釜・土鍋、瓦質土器播鉢、常滑焼、肥前系陶器灰軸皿(208・210)、同磁器皿(209)、焼締陶器播鉢(211)、平瓦等の小片のほか、デイサイト製砥石(213)、角礫凝灰岩製石臼(214)、鉄滓(212)等が若干量出土した。211の内外面や破断面の一部には煤が付着していた。208・210等17世紀前葉に遡る資料は混入であろう。出土遺物より、18世紀後半を中心とした時期に機能していた可能性が想定される。

#### SD27・28(第53図)

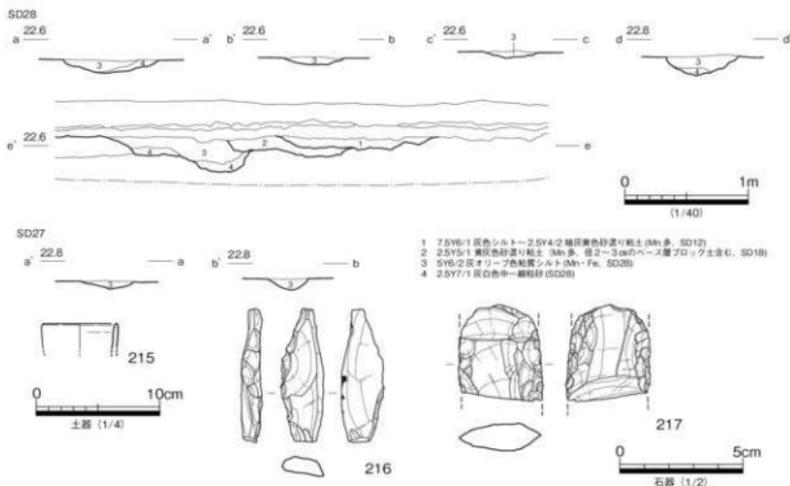
SD28は、Ⅱ区東半部B5・C5グリッドで検出した溝である。調査区中央部付近で緩やかに屈曲して、概ね北東方向に配される。南端付近でSD27が西に派生する。SD18・29・23と重複し、切り合い関係よりSD29より後出し、SD18・20・23より先行する。検出面幅0.45m～0.80m、残存深0.04～0.10m、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、南端部で23.45m、北端部で22.33mを測り、高低差より北東へ流下していたものと考えられる。埋土は1～2層に分層された。下層の灰白色細～中粒砂は溝機能時の堆積層と考えられる。なお、上層はSD18埋土に近似する。

SD27は、SD28より分岐して西へほぼ直線状に配される。西端はSD17に切られ、SD24以西で延長が確認されなかったことから、重複部分で南北どちらかへ屈曲する可能性が高い。流路方向N 81.39° W、検出面幅0.3～0.4m、残存深は0.07mで、断面形は皿状を呈する。埋土は、SD28上位層と共通する。

遺物は、主にSD28より出土した。図示した以外には、土師質土器小片とサヌカイト砕片等が数点出



第52図 SD26平・断面・出土遺物実測図



第53図 SD27・SD28 断面・出土遺物実測図

土したのみである。215は備前系統締陶器鉢か杯類の小型品である。本来は本遺構に伴うものではなく、上位層からの混入の可能性がある。217は石槍の可能性を考える。216は南半部より出土したナイフ形石器で、いずれも混入資料である。遺物が乏しく時期決定の根拠に乏しいが、SD18との切り合い関係より、下限を17世紀前葉とする近接した時期に位置付けられるものとする。

#### SD29 (第54図)

Ⅱ区北東部B5グリットで検出した東西溝である。西端はSD28に切られ、東端は調査区外へ延長する。SD28以西で延長部が確認できなかったことや、SD28との合流部付近でやや南へ屈曲することから、本来はSD28より分岐していた可能性も考えられる。流路方向は、概ねN89.33°Eと正方位に配される。検出面幅0.3～0.4m、残存深0.07m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層で、自然堆積層と思われる。

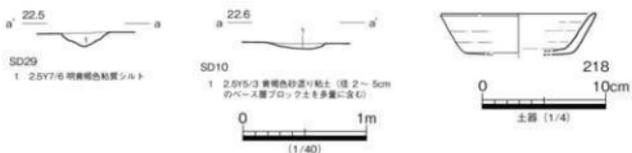
遺物は、土器小片が2点出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。既述したSD28との関係より、当該時期に位置付けられるものとする。

#### 耕作痕跡

##### Ⅱ区西部スキ溝群 (第54図)

Ⅱ区西部A3～B3グリットで検出した、一定の間隔をおいて南北に併走する小溝群で、耕作痕と考え一括して報告する。概ね6条を確認したが、ほぼ接するようなものもあり、複数時期のものが混在している可能性がある。流路方向N11.71°Wに配され、Ⅰ区SD08の方向と概ね一致する。埋土は灰白色シルトの単層であった。

遺物は、9世紀代の須志器杯(218)が出土したが、本遺構の時期を直接示すものではない。主軸方向がⅠ区屋敷地区溝溝の方向と概ね一致することなどから、18世紀以降の時期と考えられる。



第54図 SD29・SD10断面・スキ溝群出土遺物実測図

## Ⅱ区中央部耕作痕群

Ⅱ区中央部C4～C5グリットで検出した、東西走るスキ溝群である。各溝は芯々間で最短約0.3m離れて配され、5条を確認した。後世の削平等により、残存条数は限られる。SD08・10・13・20と重複し、そのいずれよりも後出する。流路方向N 75.7°Wに配され、概ね条里型地割の方向に合致する。検出面幅0.16～0.20m、残存深0.02～0.03m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色シルトの単層であった。

遺物は、土師質土器小片が数点出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。主軸方向が概ねSD23と一致し、SD23より北側でのみ検出されていることから、SD23と同時期かそれ以降の可能性が考えられる。

## 4 時期不詳

### 溝

#### SD10 (第54図)

Ⅱ区西南部B3グリットで検出した南北走る小溝である。北端は調査区内で途切れ、南端は調査区外へ延長し、約3.5mを確認した。やや蛇行しつつも流路方向N 3.69°Wと、ほぼ正方位に配される。検出面幅0.4～0.47m、残存深0.03m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土中にはベース層ブロック土が多量に含まれることから、廃絶時に人為的に埋め戻された可能性が想定される。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片2点が出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。埋土等の特徴等より中世に位置付けられる可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

## 第5節 Ⅲ区の遺構・遺物

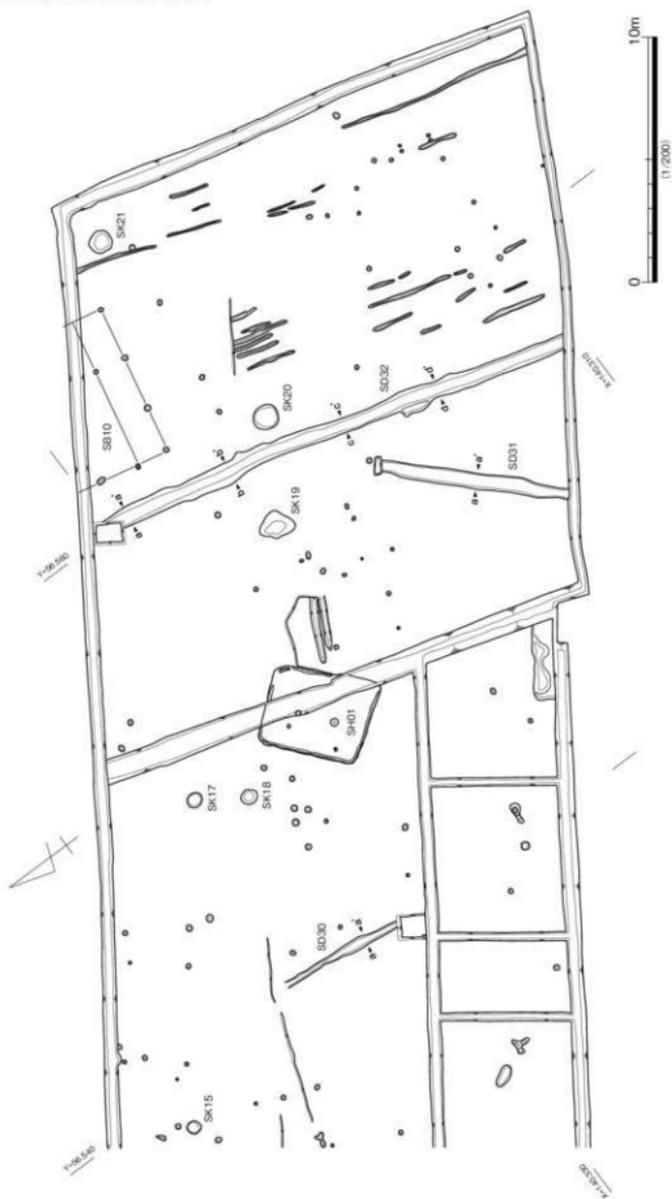
### 1 弥生時代

#### 竪穴建物

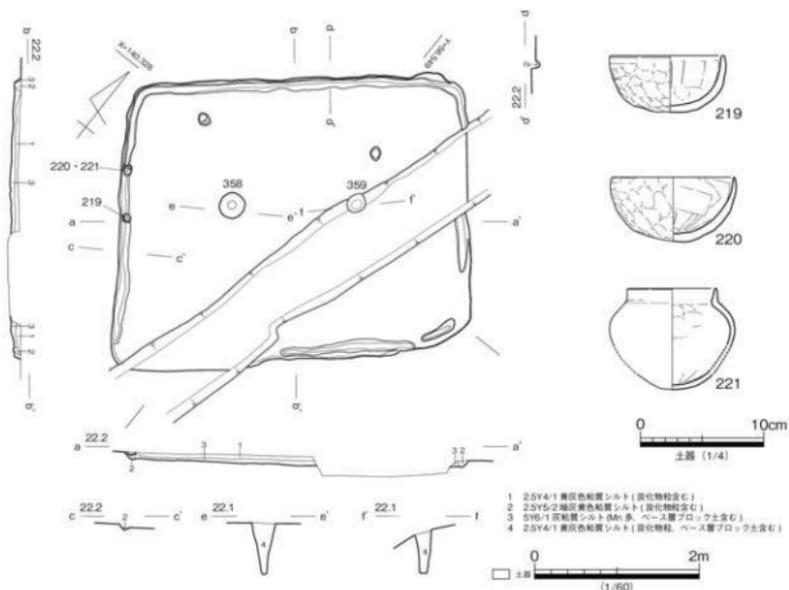
#### SH01 (第56図)

Ⅲ区D5グリット、微高地のやや東寄りで検出した竪穴建物である。建物ほぼ中央を南北に幅0.9mの攪乱が縦走り、上面は床面まで削平を蒙る。平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、長軸4.3m、短軸3.4m、長軸方向はN 51.02°Eを測り、等高線の方向と概ね一致する。

埋土は2層に細分された。下層(3層)はベース層ブロック土を含む堅くしまった土壌で、壁溝が上面より掘り込まれていること、遺物の出土が乏しいことなどから、貼り床層と考えられる。壁溝は、検出面幅約0.15m、残存深約0.1m、攪乱部分を中心に一部途切れるものの、建物四周をほぼ全周する。主柱穴は2穴を確認した。柱穴は、径0.25～0.3m、残存深0.51～0.62m、平面円形を呈する。柱間間隔は約1.5mであった。本建物に関する施設は、精査したものの他に確認できなかった。



第55図 Ⅲ区遺構配置図



第56図 SH01 平・断面・出土遺物実測図

遺物は、埋土上層より弥生土器小片やササカイト剥片が少量出土したほか、南西辺の壁溝上面より、ほぼ完形で復元される小型鉢2点(219・220)と小型の甕1点(221)が出土した。うち、220と221は重なり合うように出土した。鉢はいずれも丸底のボール状を呈する。221は取り上げ時に小片化してしまい、図上で復元した。丸底の底部に、直立気味に立ち上がる小さな口縁部を有する。出土遺物より、古墳時代前期初頭に位置付けられる。

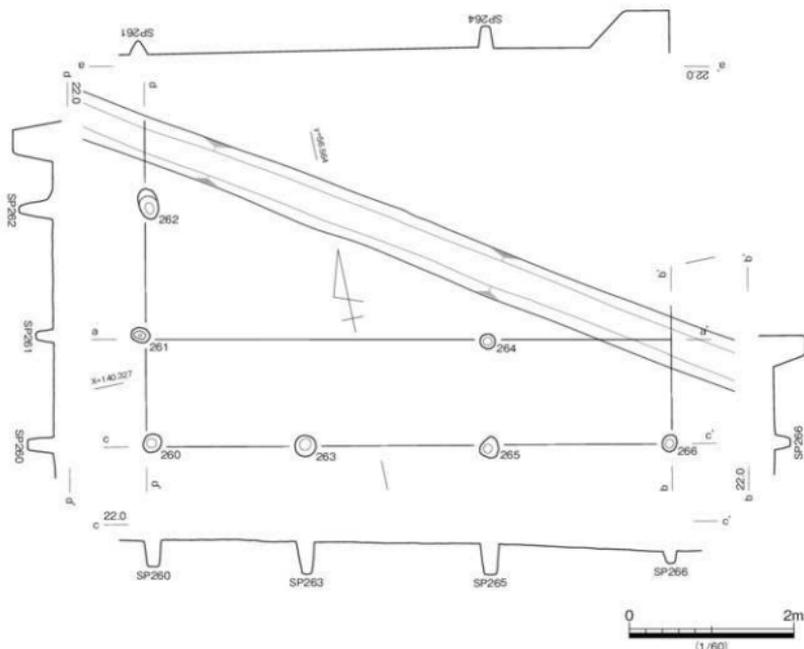
## 2 中世

### 掘立柱建物

#### SB10 (第57図)

Ⅲ区北東隅D7グリッドで検出した。北半部の大半が調査区外へ延長するため、全形は不明。桁行3間、梁間1間以上、主軸方向N 78.14° W、南に庇が付す東西棟の側柱建物として復元した。南東隅柱と南列西より2穴目の柱穴を欠く。桁行6.34 m、梁間1.54 m以上、床面積9.76㎡以上を測り、平面プランはやや整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、庇部分で1.88～2.22 mとやや誤差がある。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.18～0.37 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.16～0.40 m、底面の標高22.06～22.32 mであった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は特定できない。遺構の内容と主軸方向が後述するSD32と近似することから、当該時期に位置付けられるものと考えられる。



第 57 図 SB10 平・断面図

### 土坑

#### SK20 (第 58 図)

Ⅲ区中央 D5・D6 グリッドで検出した土坑である。平面形は、長軸 1.03 m、短軸 0.96 m の南北にやや長い楕円形を呈し、残存深は 0.05 m で、断面形は浅い皿状を呈する。底面に起伏は認めず、ほぼ平坦であった。埋土は、黄褐色粘質シルトの単層で、SD32 埋土に近似する。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片が 1 点出土したのみであり、時期を特定することは困難である。遺構の内容や近世以降の遺物が出土していないこと等より、当該時期に位置付けられるものとする。

### 溝

#### SD30 (第 59 図)

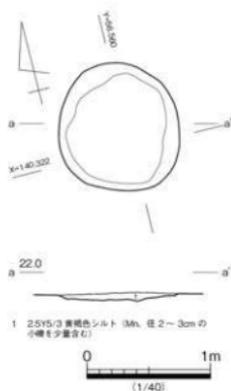
Ⅲ区 C6 グリッドで検出した南北直線溝である。上面の著しい削平のため、南北両端は調査区内で途切れ、延長約 5.1 m を検出したにとどまる。流路方向 N 7.93° E、検出面幅 0.25 ~ 0.5 m、残存深 0.04 m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は、器種不詳の土師質土器と瓦質土器小片が数点出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。埋土等遺構の内容や近世以降の遺物が出土していないこと等より、当該時期に位置付けられるものとする。

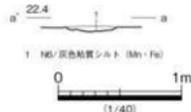
## SD32 (第60図)

Ⅲ区中央D6グリットで検出した直線溝で、南北両端は調査区外へ延長する。流路方向N14.878°Eに配され、周辺地域の条里型地割の方向と合致する。検出面幅0.5～0.8m、残存深0.2～0.26m、断面形は逆台形ないし箱状を呈する。埋土は2～3層に細分され、上層(1層)と下層(2・3層)で色調等に差が認められた。また、上層は下層を掘り込むように堆積しており、これらのことから下層堆積後に改修がなされた可能性が高いと判断された。また底面の標高は、南端部で21.75m、北端部で21.58mを測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。しかし埋土等に、明瞭な流水痕跡は認められなかった。

遺物は、土師質土器皿(222・223)、同碗(226)、同鍋(227)、吉備系土師器碗(224)、黒色土器B類碗(225)、和泉型瓦器碗、常滑焼等の小片が若干量出土した。222・225・226等、一部12世紀前半～前半に遡る資料もあるが、223・227より13世紀後半頃の埋没の可能性を考える。228は平基式石鏃で、混入資料である。



第58図 SK20平・断面図



第59図 SD30断面図

## 3 近世

## 耕作痕跡

## Ⅲ区東端スキ溝群

Ⅲ区東端D7グリットを中心に検出した南北に走行する小溝群である。一定の間隔において10条以上を確認したが、ほぼ接するようなものもあり、複数時期のものが混在している可能性がある。主軸方向N14.3°Eに配され、概ね周辺地域の条里型地割の方向と概ね一致する。各溝の検出面幅0.15m前後、残存深0.03m前後、断面形は皿状を呈する。埋土は灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。他の調査区での同様の遺構例や埋土の特徴等より、近世以降に位置付けられるものとする。

## 時期不詳

## 土坑

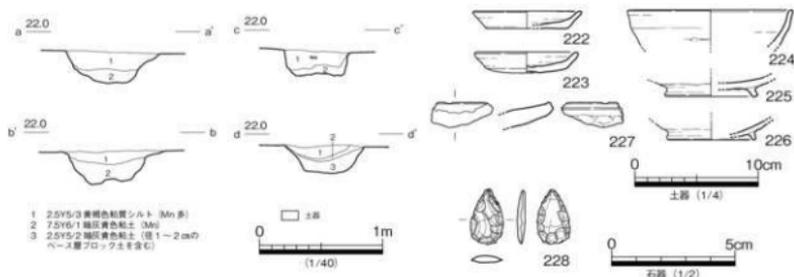
## SK15 (第61図)

Ⅲ区西半C5グリットで検出した土坑である。平面形は、径約0.55mの略円形を呈する。残存深0.05m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色粘土の単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より近世に下る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

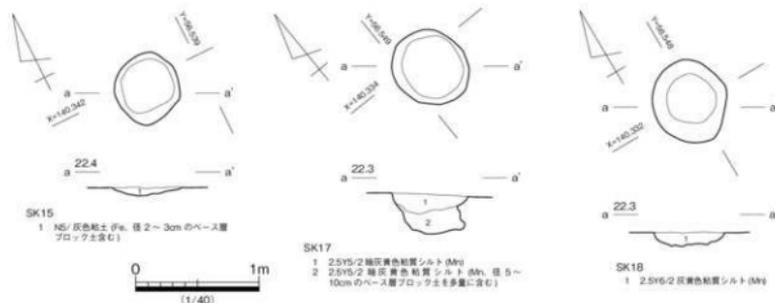
## SK17 (第61図)

Ⅲ区中央C6グリットで検出した土坑である。平面形は、径約0.62mのやや歪な略円形を呈する。残存深は0.33mあり、断面形は概ね逆台形状を呈するが、東肩付近は直に近く掘り込まれ、底面近くで挟れて一部袋状を呈する。埋土は2層に細分された。下位層中には多量のブロック土が含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。



- 1 2.5Y5-2黄褐色粘質シルト (Mn多)  
2 7.5Y6/1 褐色黄色粘土 (Mn)  
3 2.5Y5-2 褐色黄色粘土 (柱 1~2cmの  
ベース層ブロックを多数含む)

第60図 SD32 断面・出土遺物実測図



- SK15  
1 N5/ 灰黄色粘土 (Fe, 柱 2~3cmのベース層  
ブロック土を含む)

- SK17  
1 2.5Y5-2 褐色黄色粘質シルト (Mn)  
2 2.5Y5-2 褐色黄色粘質シルト (Mn, 柱 5~  
10cmのベース層ブロックを多数含む)

- SK18  
1 2.5Y6-2 灰黄色粘質シルト (Mn)

第61図 SK15・SK17・SK18 平・断面図

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より中世に遡る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

#### SK18 (第61図)

Ⅲ区中央C6グリットで検出した土坑である。平面形は、南北約0.63m、東西約0.57mの楕円形を呈する。残存深は0.13mあり、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より中世に遡る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

#### SK19 (第62図)

Ⅲ区中央D6グリットで検出した土坑である。平面形は、南北約1.43m、東西約1.13mの歪な楕円形を呈する。残存深は約0.50mあり、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は2層に細分された。下位層は、ややグライ化した灰色粘土で、滞水下の堆積の可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より中世に遡る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

#### SK21 (第63図)

Ⅲ区北東隅D7グリットで検出した土坑である。平面形は、径約0.9mの略円形を呈する。残存深0.14m、断面形は皿状を呈し、底面はほぼ平坦であった。埋土はややグライ化した灰色粘質シルトの単層で、滞水下の堆積の可能性が考えられた。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より近世に下る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

## 溝

### SD31 (第64図)

Ⅲ区中央南半D6グリットで検出した南北直線溝である。北端は調査区内で途切れ、南端は調査区外へ延長する。約7.7mを検出した。流路方向N 45.99° E、検出面幅0.6～0.7m、残存深0.02～0.04m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色砂質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より近世に下る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

## 第6節 IV区の遺構・遺物

### 1 弥生時代

#### 土坑

#### SK22

Ⅳ区中央E8グリットSR03西肩斜面で検出した土坑である。平面形は、南北0.84m、東西0.49mのやや歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.17mで、北端部が柱穴状にやや深く掘り込まれる。

遺物は、器種不詳の土器小片が1点出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。SR03底面で検出したことから、当該時期に位置付けられるものと考ええる。

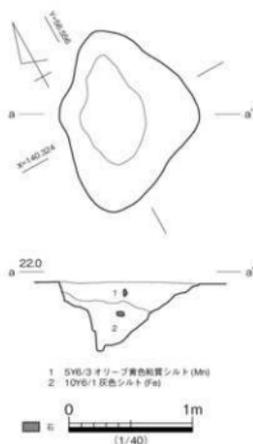
#### SK23 (第66図)

Ⅳ区中央北半E8グリットで検出した土坑である。SR03東肩の緩やかな斜面部に位置し、SR03上層を掘り下げて検出したが、本来は上層上面より穿たれていた可能性も否定できない。平面形は、東西0.70m、南北0.75mのやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.18mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は、暗灰色粘土の単層で、ベース層ブロック土が混入し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

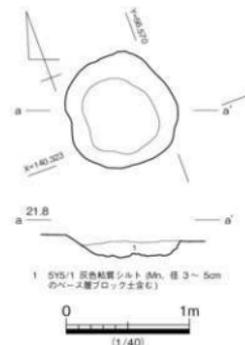
遺物として、弥生土器細頸壺(229)のほか、甕とみられる体部小片等が出土したが、劣化が著しく取り上げられなかった遺物も多い。いずれも、土坑底面よりやや浮いた位置で出土した。出土遺物より、弥生時代中期中葉の遺構と考える。

#### SK24 (第66図)

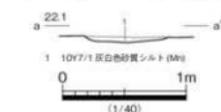
Ⅳ区中央E8グリットで検出した土坑である。SR03上層下面で掘り方上面を検出した。平面形は徑



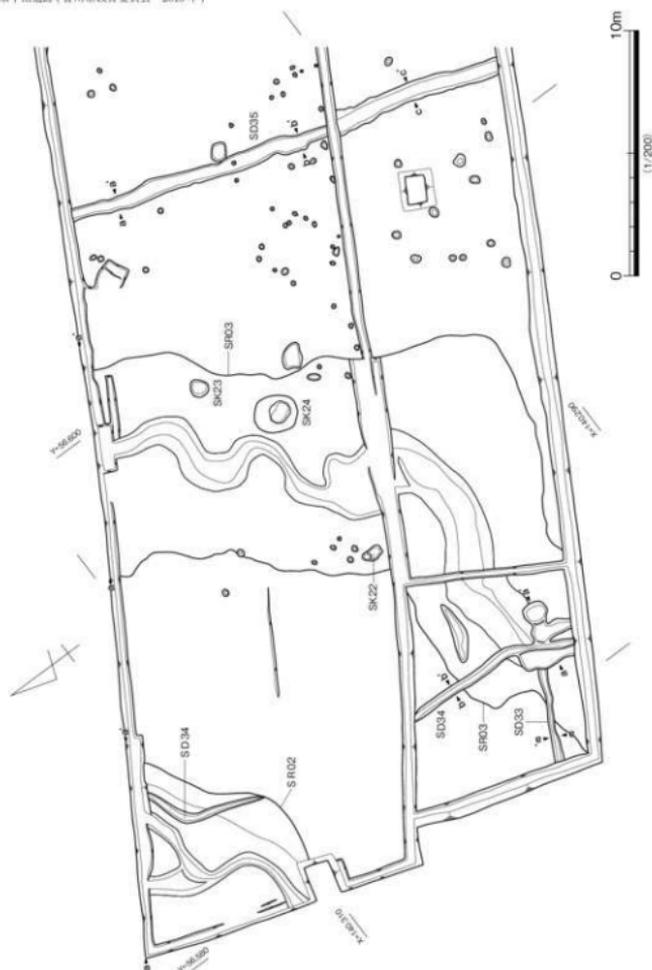
第62図 SK19 平・断面図



第63図 SK21 平・断面図



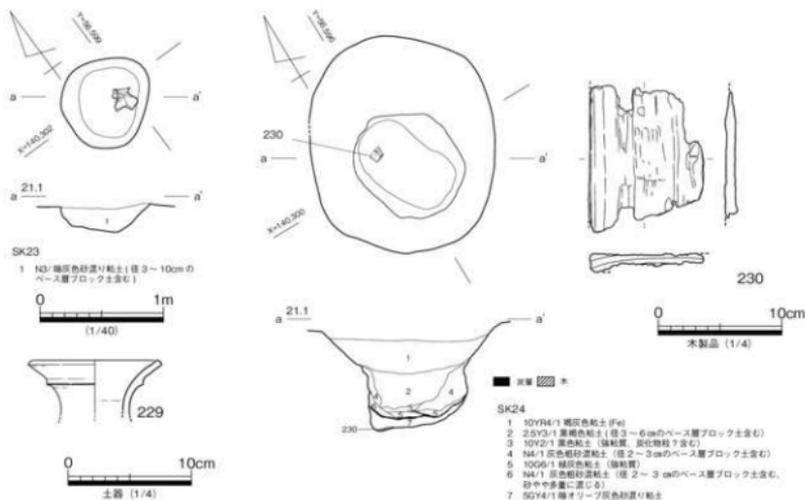
第64図 SD31 断面図



第65図 IV区遺構配置図

約15mの略円形を呈し、残存深は0.9mを測る。検出面下0.4mまでは緩やかに掘り込まれ、それ以下はほぼ垂直に近く、一部は壁面が崩落したためか、挟れて袋状を呈する部分もあった。底面は概ね平坦で、やや西に傾斜していた。

埋土は7層に細分され、3層に大別して遺物の取り上げをおこなった。上層(1・2層)はブロック土の混入を認め、遺構廃絶後の人為的な埋戻し土であろう。また、中層(3～6層)を掘り込むように堆積しており、埋戻し前に改修された可能性も考えられる。中層は灰色系粘土を中心とする堆積層で、粗砂をやや含むことから、滞水下の自然堆積層と考えられる。上位層(3層)は、ベース層と近似して



第66図 SK23・SK24 平・断面・出土遺物実測図

おり、ベース層の流入土の可能性がある。また中位層（4層）は、掘り方壁面に沿って堆積したベース層ブロック土を含む堆積層で、周壁上半部の崩落に起因する堆積層と考えられ、上層による改修前に一定期間オープンな状況であったとみられる。同様の堆積は下位層（6層）にも認められ、本遺構は比較的長期にわたり使用された可能性がある。下層上面には、ほぼ全面に層厚1cm程度の炭層が堆積していた。炭層下面や掘り方壁面に被熱痕は認められなかったことから、周辺より投棄されたものと考えられる。下層（7層）もグライ化した灰色粘土の単層で、滞水下の堆積の可能性が考えられ、土坑機能時の堆積層と考えられる。

遺物は、埋土上層を中心に、弥生土器高杯等の小片が少量出土したほか、下層底面に接して、コナラ属アカガシ亜属製の板材（230）1点が出土した。230は図上下右端を欠損した、厚さ1.5cm程度の板目材で、器表面の腐食が著しく加工痕等は不明瞭である。出土遺物より弥生時代中期中葉と考えられる。

さて本遺構は、概要報告書作成時には井戸として報告した。通常利用の見込まれにくい低地帯縁辺部に位置し、掘削深度は周辺遺構よりもやや深く透水層まで達し、調査時にも湧水が認められ、木製遺物が出土したことがその根拠である。しかし、遺構廃棄時において、他の遺跡で認められるような完形を含む豊富な土器の投棄行為は存在せず、やや違和感を覚える。時期的な点もあろうかと思われるが、本地域では井戸の検出例は乏しく、本遺構の性格については、今後類例の増加を待って判断したい。

## 自然河川

### SR02（第67図）

Ⅳ区北西隅部D8グリット周辺で検出した低地帯で、北東方向へ流下する。調査区北西隅部で検出したため、流路北肩部は調査区外に延び、延長約6.5mを検出したにとどまる。流路幅6.75m以上、残存深0.65m、断面形は概ね皿状ないし碗底状を呈し、底面には流水によるとみられる幅0.2m、残存深0.08

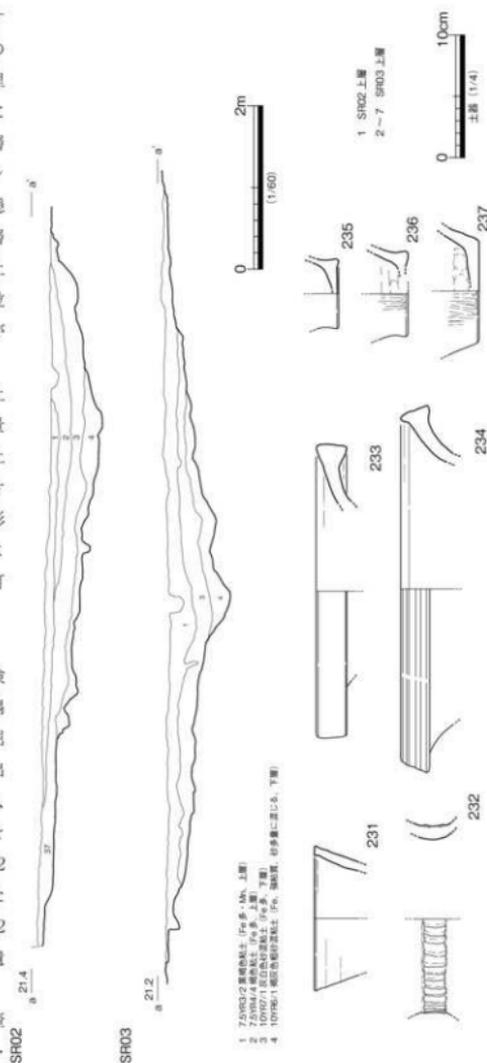
m程度の小溝が認められた。後述するSR03と近接し、埋土も酷似することから、調査区南方で2つの流路に分岐した可能性は高い。埋土は4層に細分され、上下2層に大別して遺物を取り上げた。上層(1・2層)は、褐色系粘土がレンズ状堆積し、低湿地状を呈して穏やかに堆積したとみられる。下層(3・4層)は、灰色系砂混り粘土層で、下位層にはラミナ状に砂粒が混入し、微弱な水流を伴いながら堆積したとみられる。

遺物は、上層を中心に、弥生土器小片やサヌカイト風化礫が少量出土したのみである。231は弥生土器短頸壺として図化した。小片で器表面の剥落も著しく別の器形となる可能性もある。出土遺物より、弥生時代中期中葉の埋没の可能性が考えられる。

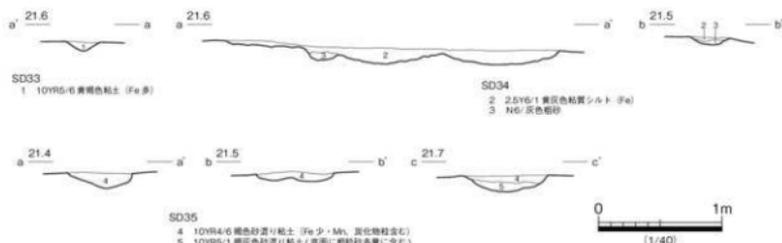
### SR03 (第67図)

IV区西端部E8グリット周辺で検出した低地帯である。調査区南西隅より東へ延び、南半部で大きく屈曲して北東方向へ流下する。検出面幅6.75～8.9m、残存深0.75mで、断面形は概ね皿状ないし碗底状を呈し、底面にはSR02と同様に幅0.2m、残存深0.1m程度の小溝が穿たれる。埋土は既述したようにSR02と酷似し、上下2層に大別して遺物を取り上げた。

遺物は、上層より弥生土器大口壺(232～234)・甕(235～237)・高杯等の小片やサヌカイト風化礫が、コンテナ半箱程度出土した。232は弥生土器大口壺の頸部として



第67図 SR02・SR03断面・出土遺物実測図



第68図 SD33～SD35断面図

図化した。出土遺物より SR02 同様、弥生時代中期中葉の埋没の可能性が考えられる。

## 2 中世

### 溝

#### SD33 (第68図)

IV区南西隅 E7・8グリット SR03 上面で検出した東西直線溝で、東端は SD34 に切られ、西端は調査区外へ延長する。流路方向は概ね N 63.21°W に配され、検出面幅 0.2～0.3 m、残存深 0.04～0.07 m、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、西端部で 21.4 m 前後、東端部で 21.2 m 前後を測り、標高差より東へ流下していたと考える。埋土は、黄褐色粘土の単層であった。埋土は SD34 と異なるものの、SD34 以東で延長が検出されず、SD34 南端部の流路方向と概ね直交して配されることから、開削当初は SD34 に合流していた可能性が高いと思われる。

遺物は、器種不詳の土器小片が 1 点出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。SR03 との切り合い関係より、当該時期に位置付けられるものと考ええる。

#### SD34 (第68図)

IV区東端 D8・E8グリット SR02・03 上面で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長する。中央部で一部途切れるが、流路方向や埋土が近似していることから、同一溝と判断した。調査区内で 2 度程度屈曲して南北方向に配され、中央部の流路方向は緩やかに湾曲するものの N 9.7°E と、概ね周囲の条里型地割の方向とはほぼ合致する。また南端部で、上位層が東西幅約 2.7 m と不定形に幅を広げる。別遺構の重複の可能性も考えられたが、明瞭な土層の差異は認められなかった。この部分を除いて、検出面幅 0.3～0.4 m、残存深 0.06～0.1 m で、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、南端で 21.3 m 前後、北端で 20.1 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下するとみられる。埋土は 2 層に細分され、下位層は粗粒砂が堆積し、流水下堆積の可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。既述した SD33 との関係より、当該時期に位置付けられるものと考ええる。

## 3 時期不詳

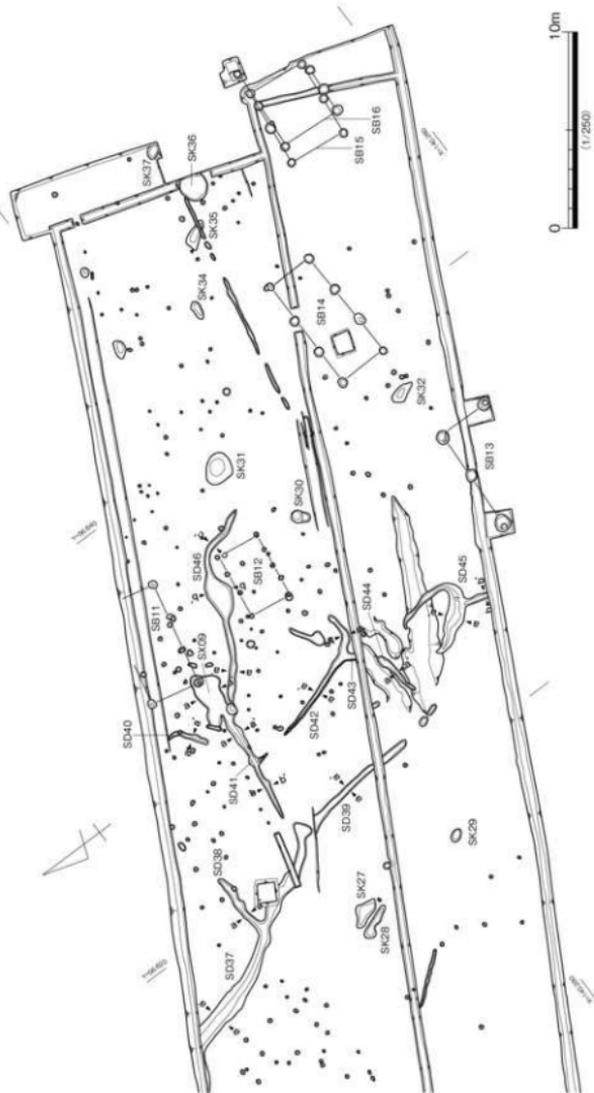
### 溝

#### SD35 (第68図)

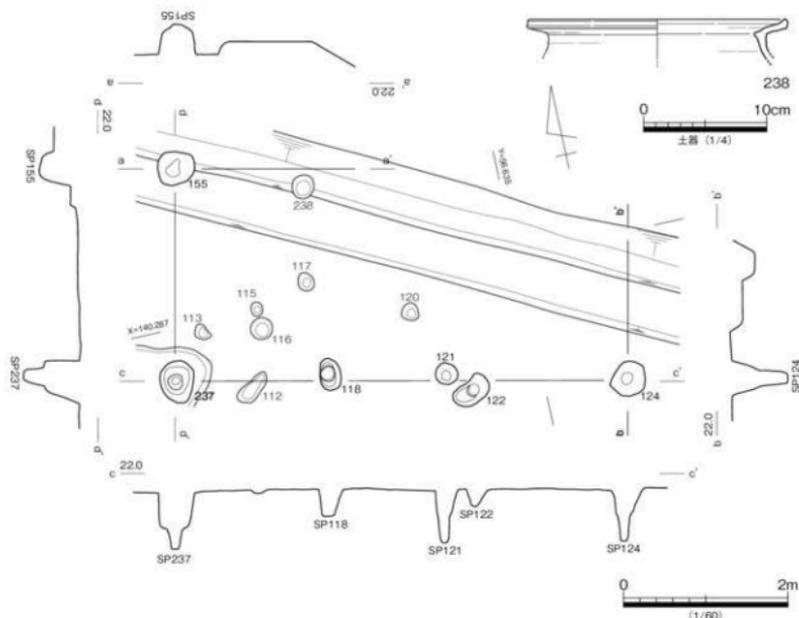
IV区東端で検出した南北直線溝である。南北両端は調査区外へ延長する。流路方向は N 16.94°E で、

周辺の条里型地割の方向と概ね合致する。検出面幅0.7～0.8 m、残存深0.08～0.13 mで、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、南端で21.50 m前後、北端で21.20 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下するとみられる。埋土は2層に細分され、下位層には砂粒がやや多量に含まれ、弱い流水下堆積の可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。Ⅲ区SD32と規模・流路方向が近似し、また埋土の特徴等より、中世に位置付けられる可能性も考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。



第69図 V区遺構配置図



第70図 SB11 平・断面・出土遺物実測図

## 第7節 V区の遺構・遺物

### 1 弥生時代

#### 掘立柱建物

#### SB11 (第70図)

V区中央北端F10グリットで検出した。北半部の大半が調査区外へ延長するため、全形は不明。桁行3間(5.48m)、梁間1間(2.58m)、床面積14.14㎡、主軸方向N78.9°W、平面プランは整った矩形を呈する東西棟の側柱建物として復元した。SX09と重複し、切り合い関係よりSX09に先行する。桁行の柱間寸法は、1.8～1.86mとほぼ均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.38～0.50mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.22～0.7m、底面の標高21.06～21.60mであった。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の弥生土器壺等の小片や焼土塊、サヌカイト剥片が少量出土した。238はSP124より出土した甕で、口縁端面は著しくマメツするが、かろうじて凹線文を確認できる。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

#### SB12 (第71図)

V区中央F10グリットで検出した。桁行3間、梁間1間、主軸方向N82.78°Wの東西棟の側柱建物として復元した。北～東辺をSD46が圍繞し、雨落ち溝の可能性が考えられる。桁行は北列で3.46m、南列で3.44m、梁間は東列で2.26m、西列で2.16m、床面積7.62㎡を測り、平面プランは整った矩形

を呈する。桁行の柱間寸法は0.88～1.68 mと、とくに南列で不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.2～0.42 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.06～0.42 m、底面の標高21.48～21.83 mであった。

遺物は、SP134とSP137より、器種不詳の弥生土器小片が数点出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。

周辺には当該期の建物遺構が集中し、SD46との関係や、明瞭に弥生時代以降に下る遺物も出土していないこと等より、当該期に位置付けられるものとする。

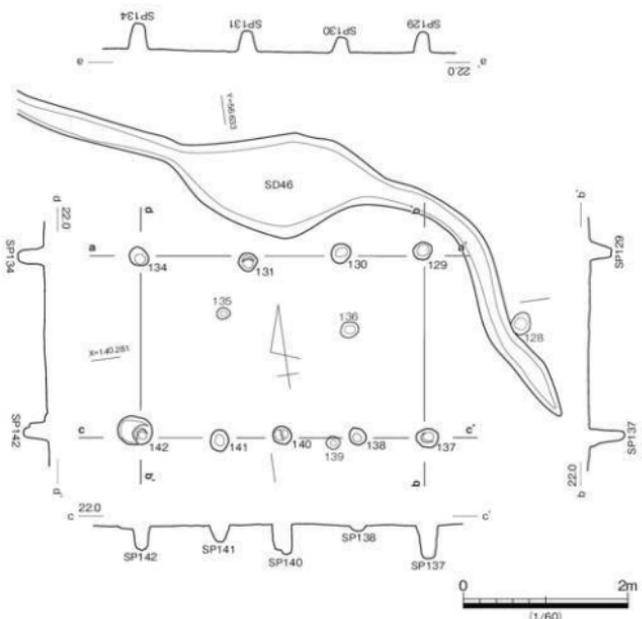
**SB13 (第72図)**

V区中央南端G10グリッドで検出した。南半部の大半は調査区外へ延長するため、建物方向等全形は不明。東西列2間(5.54 m)以上、南北列1間(2.76 m)以上、床面積15.29㎡以上、東西軸方向N88.0°W、平面プランは整った矩形を呈する側柱建物として復元した。東西列の柱間寸法は、2.52～3.02 mと不均等である。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.62～0.09 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.84～0.87 m、底面の標高21.08～21.18 mであった。

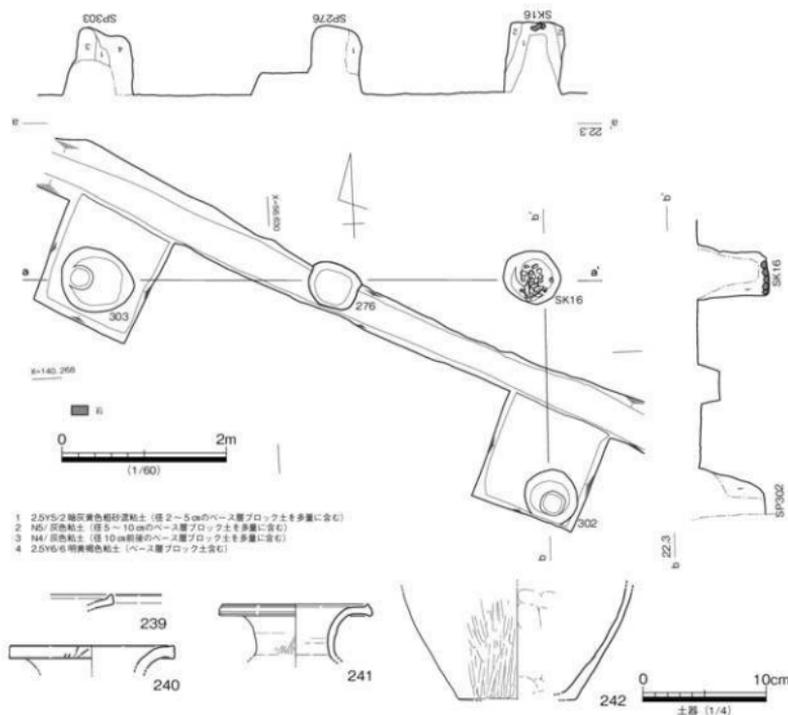
遺物は、SK16より弥生土器甕(239)、広口壺(240)、壺(242)が、SP302より広口壺(241)が出土した以外には、器種不詳の土器小片やサヌカイト礫が若干量出土したのみである。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

**SB14 (第73図)**

V区東南部F11・G11グリッドで検出した。桁行3間、梁間1間、主軸方向N88.74°Wの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北列で6.17 m、南列で6.06 m、梁間は東列で2.44 m、西列で2.62 m、床面積15.47㎡を測り、平面プランはやや歪な矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、1.97～2.21 mと北列でやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.41～0.64 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.48～0.61 m、底面の標高21.33～21.57 mであった。



第71図 SB12平・断面図



第72図 SB13平・断面・出土遺物実測図

遺物は、SP203とSP206よりそれぞれ器種不詳の土器小片1点が出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。柱穴規模や建物規模が近接するSB11・13と近似し、明確に中世以降に下る遺物も出土していないことから、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

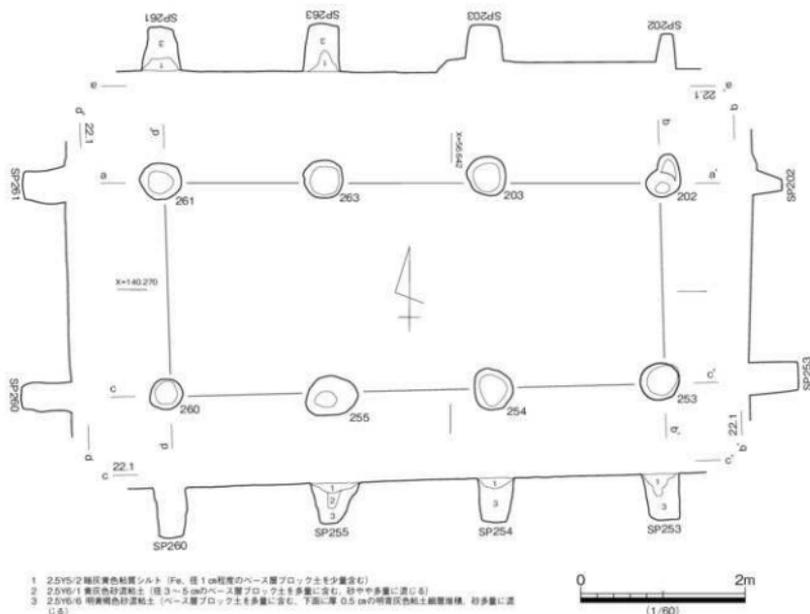
#### SB15 (第74図)

V区南東隅G11グリッドで検出した。東半部は調査区外へ延長する可能性がある。桁行2間以上、梁間1間、主軸方向N 83.85° Wの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は南北両列とも4.16m以上、梁間は西列で3.02m、床面積12.56㎡以上を測り、平面プランは整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.06～2.10mとはほぼ均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.4～0.42mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.54～0.72m、底面の標高21.18～21.40mであった。

遺物は、SP242を中心に器種不詳の弥生土器小片やササカイト剥片が若干量出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。後述するSB16との重複関係より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

#### SB16 (第75図)

V区南東隅G11グリッドで検出した。東半部は調査区外へ延長する可能性がある。またSB15と重複し、



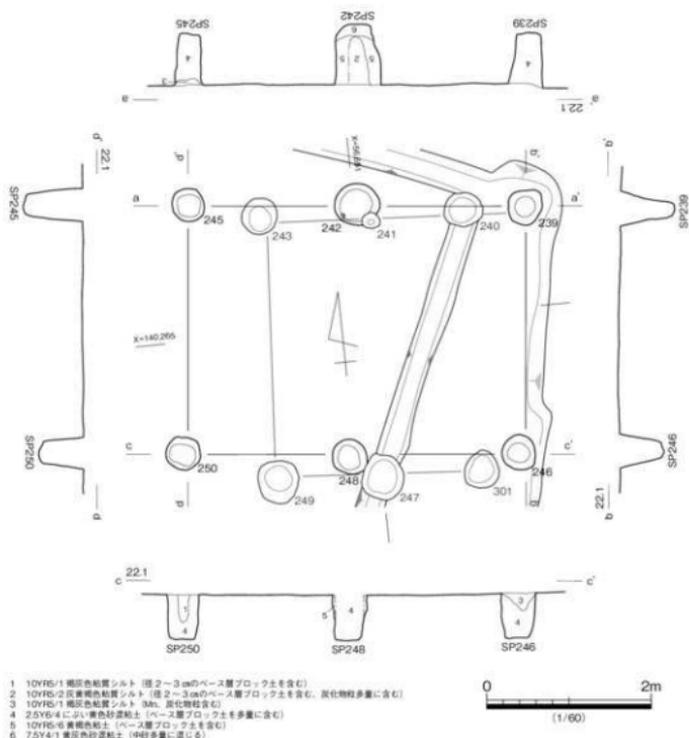
第73図 SB14平・断面

切り合い関係よりSB15より後出し、主軸方向や柱穴規模等が近似することから、ほぼ同位置に建替えられたものと考えられる。桁行3間（北列で4.42m）以上、梁間1間（西列で3.24m）、床面積14.32㎡以上、主軸方向N 85.6° W、平面プランは整った矩形を呈する東西棟の側柱建物として復元した。桁行の柱間寸法は、1.14～1.90mとやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.24～0.58mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.44～0.92m、底面の標高21.00～21.46mであった。

遺物は、図示した以外にも弥生土器片が若干量出土した。とくにSP247よりまとまった量の遺物が出土しており、弥生土器壺(243・244)2点を図示した。243は広口壺とみられる口縁部小片で、端面にろうじて凹線文3条を認める。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

#### 柱穴(第76図)

245・247は、V区中央北半SP156より出土した。245は弥生土器広口壺、247は千枚岩ないし泥質片岩製片刃石斧である。本来は図上方を刃部とする片刃石斧であったが、使用中に石理に沿って薄く剥離したため、図下端に剥離面を中心に剥離と研磨を加え片刃石斧に再利用しようとしたとみられるが、途中で放棄して廃棄したものであろう。同柱穴からは他に、甕等の土器小片が少量出土している。246は、SP122より出土した弥生土器壺である。



第74図 SB15平・断面図

## 土坑

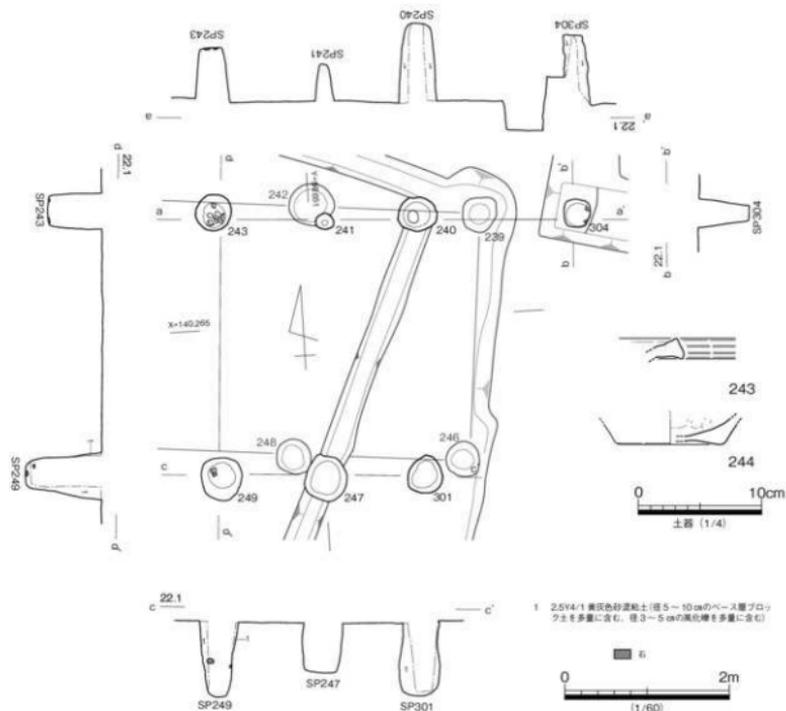
## SK29 (第77図)

V区西半F9グリットで検出した土坑である。平面形は、南北0.68m、東西0.43mの楕円形を呈する。残存深は0.28mで、断面形は壁面に直に近く掘り込まれ、底面はほぼ平坦な箱状を呈する。埋土は灰色粘質シルトの単層で、底面近くにベース層ブロック土がやや多量に包含されていた。

遺物は、埋土中位より弥生土器小片が少量出土したのみで、時期を特定することは困難である。埋土の特徴や弥生時代以降に下る遺物が出土していないこと等より、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

## SK30 (第77図)

V区中央部F10グリットで検出した土坑である。平面形は、東西0.58m、南北0.94mの南北に長い隅丸方形を呈する。残存深は0.38mで、断面形は碗底状を呈する。埋土は灰色系粘質シルトが堆積し、2層に細分された。下位層には、ブロック土の混入が認められたが量的に乏しく、壁面の崩落に起因するものであろう。この点で、土坑は開削後一定期間オープンな状況で放置されたと考えられる。遺物は、底



第75図 SB16平・断面・出土遺物実測図

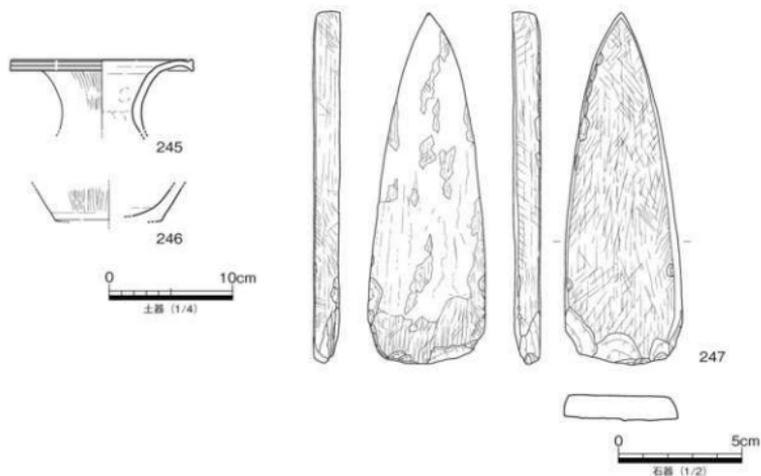
面よりやや浮いた位置より出土しており、この点も上述の想定と矛盾するものではない。

遺物は、弥生土器壺(248・249)・甕、焼土塊が少量出土した。248は、口縁部内面に斜格子文と刺突文で飾る広口壺小片で、端部付近を内面側から外面側へ小円孔を4孔以上穿つ。出土遺物より弥生時代中期中葉に位置付けられるものと考えられる。

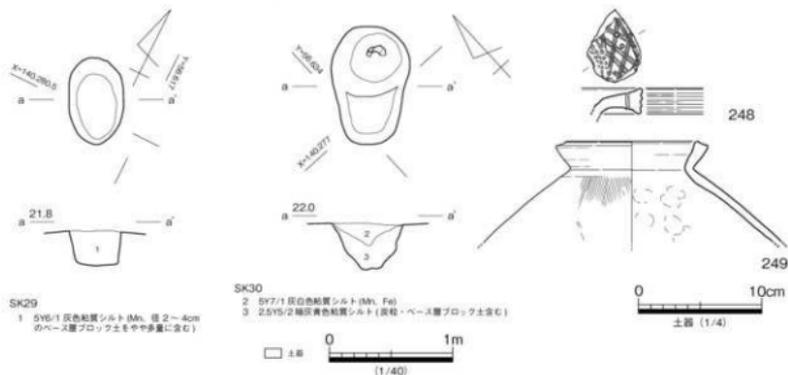
#### SK31 (第78図)

V区中央部F10グリットで検出した土坑で、後述するように多量の土器や炭化物粒、石礫等が出土し、生活残滓を捨てた廃棄土坑と考えられる。平面形は、東西1.6m、南北1.3mの歪な楕円形を呈する。残存深は0.51mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は4層に細分された。上位2層(1・2層)は、ベース層の流入土を含む土坑廃絶後の自然堆積層と考えられる。中層(3層)は炭化物粒を多量に含む土坑機能時の堆積層で、下層(4層)とともに遺物も多量に出土した。下層は、ややグライ化した黄灰色粘土層で潜水下の堆積の可能性があり、開削後オープンな状態で放置されていたと考えられる。

遺物は、コンテナ1箱程度出土しており、周辺遺構の中では量的に多い。弥生土器壺(250・251・253・254・266)・甕(252・255～262)・台付鉢(264・265)、サスカイト製楔形石器(267)や剥片等が出土した。263は、壺もしくは甕の体部片で、外面最大径やや上位に、橈原体による刺突文を施す。



第76図 V区柱穴出土遺物実測図



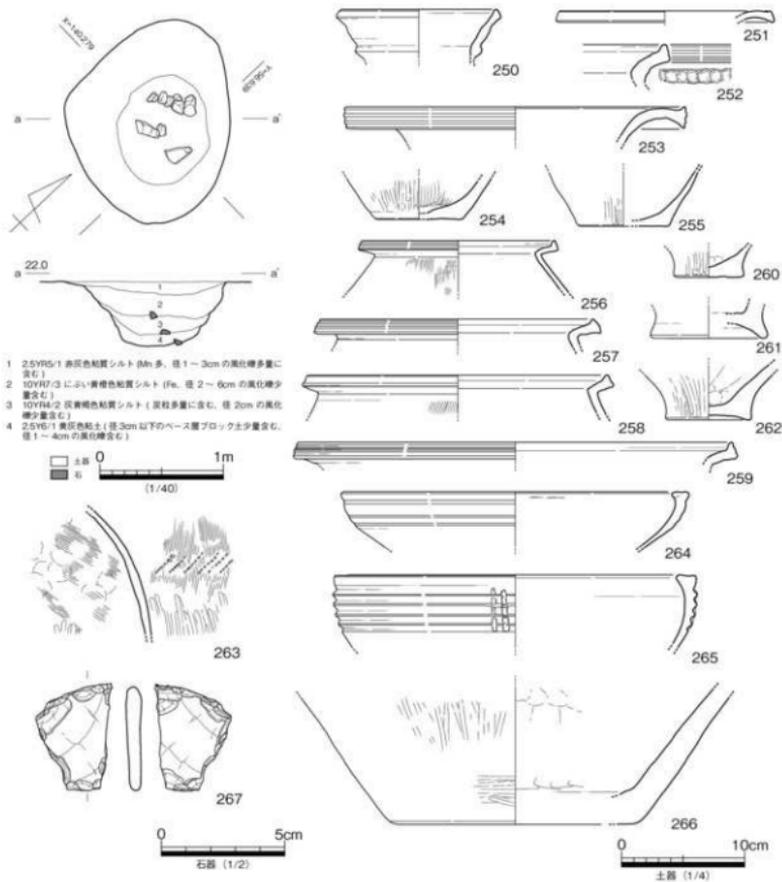
第77図 SK29・SK30平・断面・出土遺物実測図

267は、上下両端に顕著な潰れが確認できる。出土遺物より弥生時代中期中葉に位置付けられるものと考えられる。

#### SK36 (第79図)

V区東端F11グリットで検出した土坑で、東端部は調査区外へ延長するが、概ね全形は確認された。平面形は、東西1.24m以上、南北1.38mの略円形を呈するとみられる。残存深は0.31mで、断面形はやや歪な箱状を呈する。埋土は2層に細分された。いずれも褐色系粘質シルトが堆積し、ベース層ブロック土を含む。人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺(268・269)・甕(271～273)・鉢(270)・広口壺等の小片、サヌカイト剥片が少量出土している。268は細頸壺の体・底部片で、図示部分の半分程度が残存する。出土遺物より弥



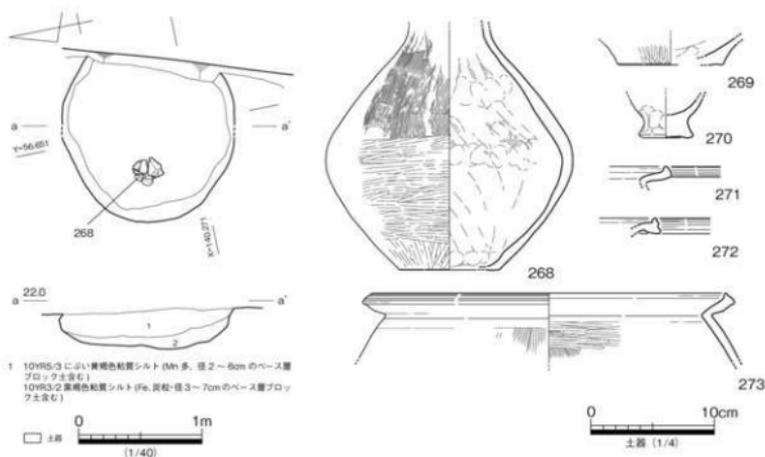
第 78 図 SK31 平・断面・出土遺物実測図

生時代中期中葉に位置付けられる。

### SK37 (第 80 図)

V区東端拡張区 F11 グリッドで検出した土坑で、南半部は調査区外へ延長するため、全形は不明である。長軸 0.82 m 以上、短軸 0.47 m、平面形は南北に長い楕円形を呈するとみられる。残存深は 0.24 m を測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。掘り方北端部、検出面下 0.1 m の位置に幅約 0.2 m のテラスが伴う。埋土は褐灰色粘質シルトの単層で、少量のブロック土を伴う。調査時には、埋土や周辺遺構との関係より、建物遺構の柱穴の可能性を考えたが、未調査部分が多く断定はできなかった。

遺物は、器種不詳の土器小片、サヌカイト剥片が極少量出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴や明確な弥生時代以降に下る遺物の出土がみられないこと



第79図 SK36平・断面・出土遺物実測図

から、当該時期の遺構と考える。

## 溝

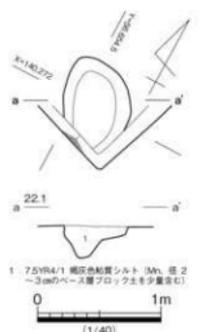
## SD37・SD38 (第81図)

V区北西部E9～F10グリットで検出した溝で、SD37南端は調査区内で途切れ、北端は調査区外へ延長する。検出長約125mを測り、やや蛇行するものの、概ねN27.55°Wに配される。検出面幅0.5～0.8m、残存深0.09～0.14m、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、南端部で21.58m、北端部で21.34mを測り、標高差より北へ流下していたようだ。SD38は、SD37の中位より北東方向へ派生する小溝で、延長約2.8mを確認し、調査区内で途切れる。流路方向N85.197°Eで、SD37とは斜交する。検出面幅0.3m前後、残存深約0.08m、断面形は皿状を呈する。埋土は、いずれも黄灰色粘質シルトの単層であった。

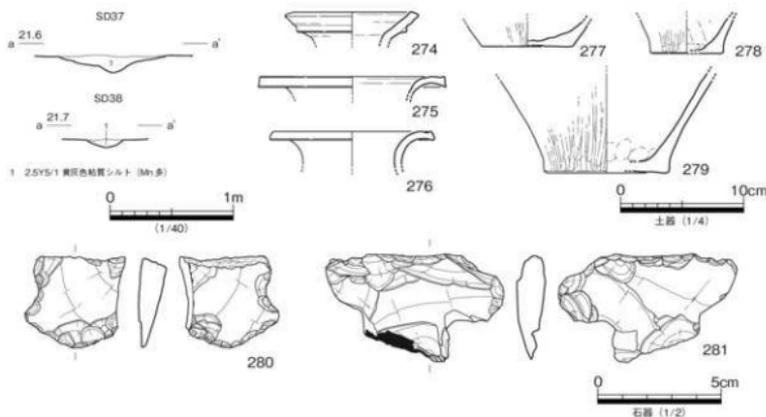
遺物は、SD37を中心に、弥生土器等の小片、サスカイト剥片が若干量出土した。大半は器種不詳の小片であり、図化可能な資料は少なく、図示した遺物はいずれもSD37より出土したものである。弥生土器細頸壺(274)、同広口壺(275・276)、同壺底部(277)、同甕(278・279)、楔形石器(280・281)がある。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

## SD39・SD41・SD42・SD43・SX09 (第82図)

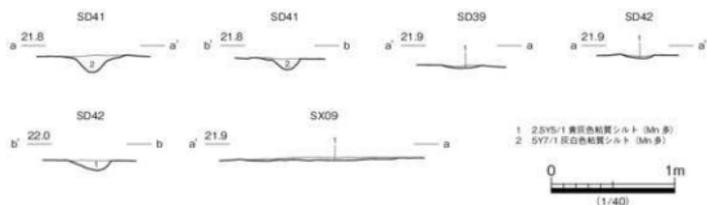
V区中央部F10グリットで検出した方形区画を構成する溝群である。SD41は、浅い皿状の落ち込みSX09より西へ直線状に約6.25m延長する。中位でSD42が南へ派生し、SD39、SD43とともに、東西4.3～5.2m、南北約7.8mの不整な方形区画を形成する。区画東方にも本溝は延長し、SD42南端にも東方へ延びる溝が接続することから、同様な区画が隣接して形成されていた可能性は高い。区画内部には、



第80図 SK37平・断面図



第81図 SD37・SD38 断面・出土遺物実測図



第82図 SD39・SD41～SD43・SX09 断面図

同時期とみられる明確な遺構は認められず、区画の用途は不詳。流路方向N 82.2°W、検出面幅0.2～0.35m、残存深0.06～0.14m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は灰白色粘質シルトの単層であった。

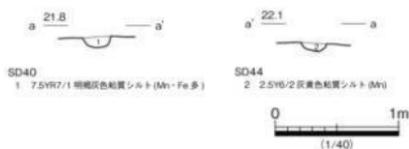
SX09は、埋土や底面の標高にSD41と明瞭な差が認められなかったことから、一連の遺構と考えた。上面よりSB11の南西隅柱が掘り込まれる。

SD39は、SD41西方に配された直線溝で、区画西縁を形成する。延長約6.25mを確認した。流路方向N 29.375°W、検出面幅0.25～0.3m、残存深0.02mで、断面形は浅い皿状を呈する。

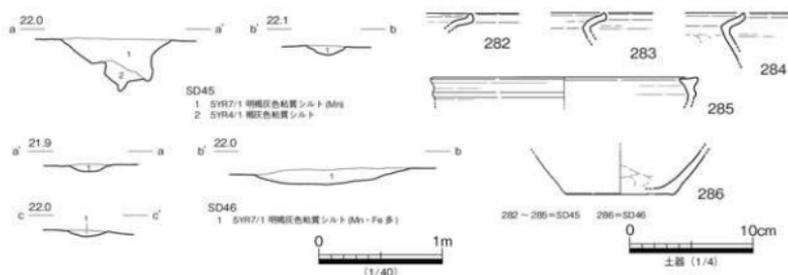
SD42は、SD41南方に配された直線溝で、一部後世の削奪により途切れるものの、位置や埋土より同一の溝と判断した。東西2区画を分割する溝である。延長は約7.0mで、南端で東西溝SD43に合流する。流路方向N 39.58°W、検出面幅0.2～0.25m、残存深0.02mで、断面形は浅い皿状を呈する。

SD43は、SD42南端で東西走る溝であるが、西端は攪乱により途切れ、延長約0.5mを検出したのみである。検出面幅0.36m前後、残存深0.02mで、断面形は浅い皿状を呈する。

遺物は、各溝より器種不詳の弥生土器小片、サヌカイト剥片が少量出土したのみであり、出土遺物よ



第83図 SD40・SD44 断面図



第84図 SD45・SD46断面・出土遺物実測図

り詳細な時期を特定することは困難である。既述したSD37・38と規模・形状が近似し、埋土も比較的似通っていること、明瞭な弥生時代以降の遺物が出土していないことから、本期に位置付けられるものと考えられる。

#### SD40 (第83図)

V区中央北端部F10グリットで検出した小溝である。く字状に屈曲し、延長2.25mを検出したにとどまる。検出面幅0.2m、残存深0.08m、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は明褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は、弥生土器小片が2点出土したのみであり、出土遺物より時期を特定することは困難である。近接して、SD41等同規模の溝が集中し、埋土もこれら溝と近似すること等から、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

#### SD44 (第83図)

V区西半F10グリットで検出した東西溝である。東西両端は攪乱により途切れ、延長約2.5mを検出したにとどまる。検出面幅0.28～0.44m、残存深0.02～0.04m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は、灰黄色粘質シルトの単層であった。

遺物は、器種不詳の土器小片が2点出土したのみであり、詳細な時期を特定することは困難である。溝の規模や埋土の特徴等が、近接するSD42等と近似することから、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

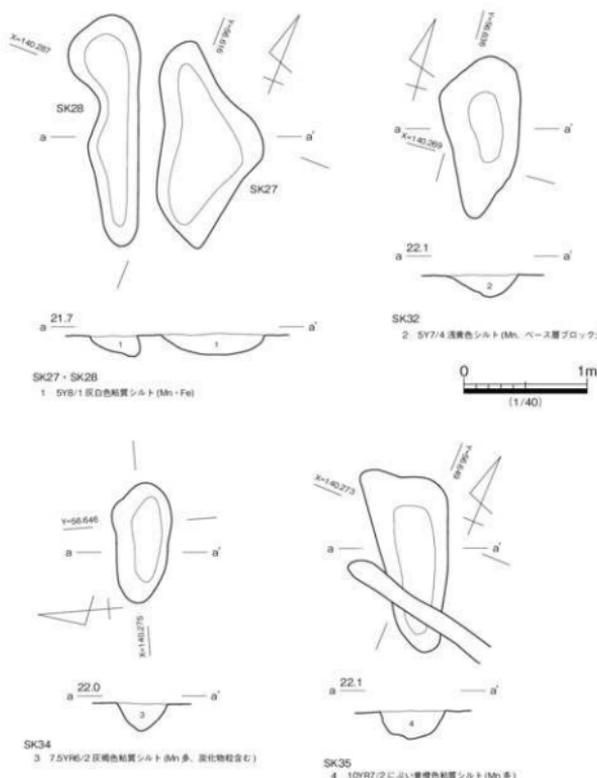
#### SD45 (第84図)

V区中央南半F10グリットで検出した溝である。平面U字状を呈し、南端部より直線溝が南へ延びる。直線溝の流路方向は、N153°Eとはは周辺の条里型地割の方向と合致し、溝底面のレベルもU字溝部と異なることから、別遺構の可能性が考えられる。U字溝については、南北長約3.5mを検出したのみで、北端は調査区内で途切れる。溝検出面の幅や底面の標高は、東溝と西溝で異なり、断面形状も安定しないことから、水路としての機能は想定しがたく、性格については不詳である。埋土は褐色系シルト層が堆積し、流水痕跡は認められない。

遺物は、西溝下位層を中心に、弥生土器片(282～284)、同付針(285)等の土器片が若干量出土した。出土遺物より弥生時代中期中葉に位置付けられる。

#### SD46 (第84図)

V区中央北半F10グリットで検出した溝である。SD41より分岐して東へ延びるとみられるが、分岐



第 85 図 SK27・SK28・SK32・SK34・SK35 平・断面図

部に小ビットが掘られており断定はできない。中位で他の遺構と重複したためか溝幅をやや広げ、若干深く掘り込まれているが、調査段階で遺構の重複は確認できなかった。検出面幅 0.28 ~ 0.35 m、残存深 0.04 m、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層で、炭化物粒をやや多量に含む。SB12 と概ね整った位置関係にあり、SB12 の雨落ち溝の可能性がある。

遺物は、弥生土器壺(286)のほか、器種不詳の弥生土器小片や焼土塊等が若干量出土した。出土遺物より弥生時代中期中葉に位置付けられる。

## 2 時期不詳

### 土坑

#### SK27・28 (第 85 図)

V区西半部 F9 グリットで検出した不定形土坑で、2基並列して検出された。SK27 平面形は、南北 1.67 m、東西 0.8 m の歪な楕円形を呈する。残存深は 0.15 m で、断面形は概ね皿状を呈する。SK28 平面形は、南北 1.86 m、東西 0.3 ~ 0.6 m の歪な隅丸長方形を呈する。残存深は 0.12 ~ 0.16 m で、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は、いずれも灰白色粘質シルトの単層であった。平・断面形状より、風倒木痕の可能性を考える。

遺物は出土しておらず、また遺構の内容からも時期を特定することは困難であり、時期不詳の遺構として報告する。

**SK32 (第85図)**

V区東半F10グリットで検出した土坑である。平面形は、南北1.26 m、東西0.6 mの歪な楕円形を呈する。残存深は0.17 mで、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は浅黄色シルトの単層で、ベース層ブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より、中世に遡る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

**SK34 (第85図)**

V区東半F11グリットで検出した土坑である。平面形は、東西0.98 m、南北0.41 mの長楕円形を呈する。残存深は0.21 mで、断面形は碗底状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より、弥生時代に遡る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

**SK35 (第85図)**

V区東端F11グリットで検出した土坑で、SD47に切られる。平面形は、南北1.46 m、東西0.5 mの歪な隅丸長方形を呈する。残存深は0.23 mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土はにぶい黄橙色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。埋土の特徴等より、中世に遡る可能性が考えられたが、断定するまでには至らず、時期不詳の遺構として報告する。

**第8節 VI区の遺構・遺物****1 縄文時代以前****サヌカイトブロック (第87・88図)**

VI区北半部G12グリットの遺構を調査中に、弥生時代以降の遺構が掘り込まれたベース層中に、サヌカイト礫が含まれているのを確認した。そこで遺構検出時等において、サヌカイト礫が一定量確認されたVI区北西部を中心にトレンチ調査を実施した。調査はまず、国土座標に沿って2 m四方のトレンチを調査区北西隅に4箇所設定した。そこで17点のサヌカイト類が出土したことから、順に東にトレンチを延長して、結果10箇所のトレンチを設定し、掘り下げを行った。出土したサヌカイト類は、それぞれ出土位置を記録し、必要に応じて写真撮影を行い取り上げた。また、掘り下げ時に注意深く観察したが、細かなチップ類の出土は認められなかったため、土壌の水洗選別は実施していない。こうした調査によって、VI区より51点のサヌカイト類が出土した。本来であれば、調査区全面について掘り下げを進めるべきではあったが、後述するように出土したサヌカイト類は原石とみられるものが大半で、石器はおろか人為的な加工痕をとどめたものがほぼ皆無という状況であったこと、調査工程の点を踏まえ、これ以上の掘り下げは断念した。

出土したサヌカイトは、器表面の風化度の相違等により、白色風化が著しく進んだものとあまり顕著ではないもの、風化が進んだ安山岩質のもの3者に分類が可能である。なお、かろうじて人為的な加工の可能性のある資料2点を図示した。287は石核、288は剥片と考える。また、出土したサヌカイト類には土器が伴わず、考古学的に詳細な時期を特定することは困難である。



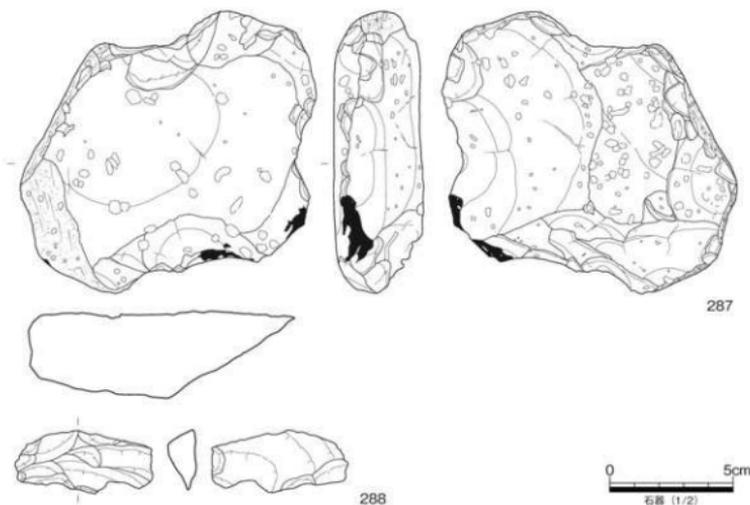
第 86 区 VI 区遺構配置図

## 2 弥生時代

### 竪穴建物

#### SH02 (第 89 図)

VI区G 12グリッドで検出した竪穴建物である。床面まで削平が及んでおり、壁溝の一部と主柱穴5基、中央土坑1基を検出したにとどまる。平面形は、後述する壁溝の配置より径約6.4mの円形に復元される。



第 87 図 サナカイトブロック出土遺物実測図

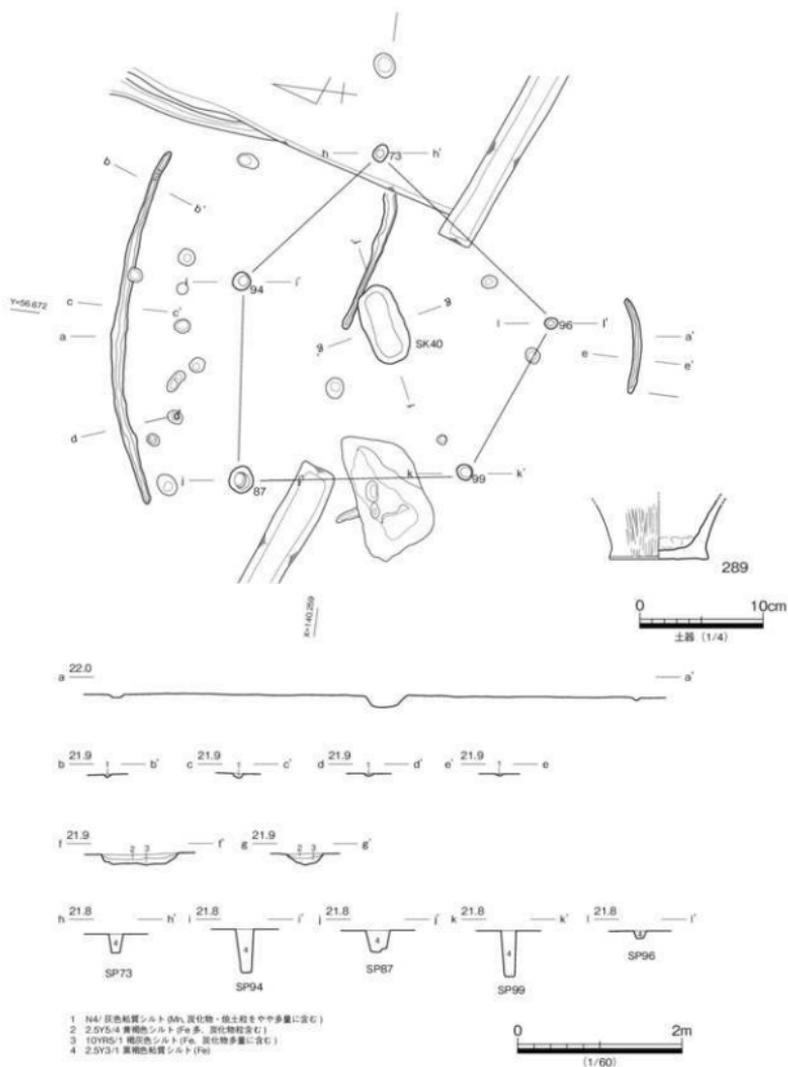
番号	分類	最大径 (cm)	最小径 (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	残存	備考
S11	埴輪片	7.9	6.2	3.5	207.75	完全	
S12	埴輪片	4.7	2.0	1.3	13.59	完全	
S13	瓦山割片	5.1	2.7	0.7	6.83	断片	
S15	瓦山割片	15.1	7.1	7.9	993.33	完全	
S17	埴輪片	2.0	2.4	0.3	3.62	断片	
S18	瓦山割片	14.6	6.8	3.4	672.84	完全	
S19	埴輪片	5.0	3.9	1.8	39.25	1/2片	
S20	埴輪片	8.2	7.6	3.5	200.24	完全	
S21	瓦山割片	10.5	5.9	5.2	352.48	完全	分形試料
S22	瓦山割片	5.8	3.9	2.2	49.63	完全	分形試料
S23	埴輪片	7.7	5.5	2.4	139.38	断片	
S24	瓦山割片	4.0	3.8	1.4	17.36	完全	
S25	瓦山割片	4.7	3.1	3.4	33.24	完全	
S26	瓦山割片	2.6	5.5	1.1	12.90	完全	計1/280
S27	瓦山割片	6.1	3.3	2.4	36.09	完全	分形試料
S28	瓦山割片	6.5	2.5	2.3	33.31	断片	
S29	瓦山割片	5.4	3.1	1.4	14.66	完全	
S29	瓦山割片	5.1	3.4	2.2	44.35	完全	
S28	瓦山割片	6.0	4.3	2.7	29.03	完全	
S27	埴輪片	3.0	5.4	2.3	11.82	完全	
S29	埴輪片	8.0	5.8	1.9	97.51	最大径	分形試料
S30	埴輪片	4.4	3.8	2.3	24.49	完全	
S21	瓦山割片	10.5	7.6	5.6	274.00	完全	
S32	埴輪片	3.3	2.6	1.6	17.18	完全	
S33	瓦山割片	10.7	6.3	5.2	234.66	完全	

S14	埴輪片	14.7	9.2	7.3	982.77	完全	
S25	瓦山割片	8.5	5.5	4.1	199.32	完全	
S38	埴輪片	11.9	4.7	3.6	205.13	完全	
S39	埴輪片	6.4	4.1	2.1	51.39	断片	
S39	埴輪片	6.1	3.7	1.7	36.12	断片	
S40	瓦山割片	15.1	8.1	3.1	354.69	完全	
S42	埴輪片	9.8	6.2	3.1	139.91	完全	
S43	瓦山割片	13.1	8.0	2.9	291.73	完全	
S45	埴輪片	4.3	3.9	3.2	42.44	完全	
S46	瓦山割片	6.8	3.4	2.9	58.93	完全	
S47	瓦山割片	10.5	7.0	2.8	204.05	完全	
S48	瓦山割片	11.2	8.0	2.5	225.49	完全	
S49	瓦山割片	9.9	6.4	2.8	242.69	完全	
S50	瓦山割片	10.6	4.9	4.0	149.68	完全	
S51	瓦山割片	5.4	3.9	2.6	43.34	完全	
S52	瓦山割片	4.2	3.3	1.4	14.42	完全	
S53	瓦山割片	9.1	5.2	3.8	164.28	完全	
S58	瓦山割片	4.1	3.8	3.2	23.29	完全	
S61	埴輪片	7.9	4.1	1.9	68.41	最大径	分形試料
S62	瓦山割片	12.6	5.0	4.2	231.36	完全	
S63	埴輪片	10.9	4.1	4.9	499.86	完全	
S64	瓦山割片	9.2	2.2	1.9	180.4	完全	
S65	瓦山割片	4.2	2.4	1.9	16.03	完全	
S66	埴輪片	12.0	5.7	4.2	320.66	完全	分形試料
S67	埴輪片	8.9	5.7	3.8	281.25	完全	分形試料
S68	埴輪片	12.0	11.4	5.5	576.54	断片	計1/287

第 1 表 ブロック出土サナカイト一覧表

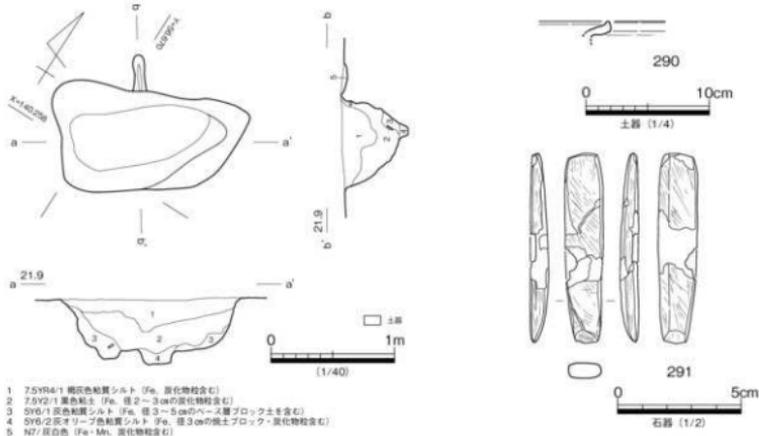
主柱穴の掘り方は、径0.15～0.21mの平面円ないし楕円形を呈し、残存深0.09～0.55m、底面の標高21.21～21.67mであった。主柱穴の配置は、不整五角形を呈し、残存深の浅いSP96は主柱穴とはならない可能性もある。壁溝は全周せず、北と南側に部分的に確認され、検出面幅0.1～0.15m、残存深0.02～0.06mである。埋土は、灰色粘質シルトの単層で、多量の炭化物や焼土粒を含んでいた。建物には中央部で、土坑1基（SK40）を確認した。位置や埋土、出土遺物より、本建物に伴う中央土坑と考えられる。土坑は、長軸0.95m、短軸0.50m、残存深0.14m、底面標高21.63mを測り、平面形は整った隅丸形状を、断面形は逆台形状をそれぞれ呈する。埋土は2層に細分され、とくに下位層より多量





第89図 SH02平・断面・出土遺物実測図

度の焼土塊やサヌカイト剥片が、少量出土したにとどまる。289は、中央土坑下層より出土した弥生土器である。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられるものとする。



第90図 SK39 平・断面・出土遺物実測図

土坑

SK39 (第90図)

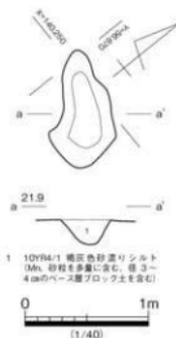
Ⅵ区中央G12グリットで検出した土坑である。長軸1.68m、短軸0.8m、平面形は東西にやや長い不整な隅丸方形形状を呈する。残存深は0.52mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈しつつ、底面には起伏が顕著に認められた。埋土は灰～黒色系粘土～粘質シルトが堆積し、5層に細分した。堆積状況より2層に大別され、上層(1・2層)は下層を掘り込むように堆積しており、埋没後再掘削された可能性が考えられた。堅穴建物SH02の屋内に位置し、出土遺物に顕著な時期差は認められず、堅穴建物に係る遺構の可能性も考えられる。

遺物は、少量しか出土していない。290は、端部を上方向へ摘み上げる弥生土器甕の口縁部小片。291は珪質泥岩製の壑状片刃石斧。出土時に破損したが、本来は完形品であった。図示した以外に、弥生土器高杯等の小片やサヌカイト剥片がある。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

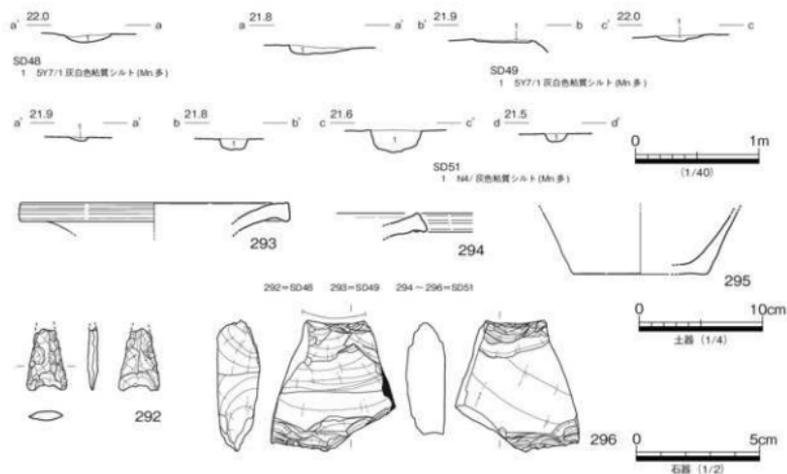
SK44 (第91図)

Ⅵ区中央南端H12グリットで検出した土坑である。長軸0.95m、短軸0.38m、平面形は東西に長い不定形ないし重な長楕円形を呈する。残存深は0.2mを測り、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂混じりシルトの単層で、底面に壁面の崩落に起因するとみられるベース層ブロック土が堆積していた。一定期間オープンな状況下で放置され、自然埋没したと考えられる。

遺物は、弥生時代中期と考えられる土器小片が4点出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、埋土の特徴や弥生時代以降に下る遺物の出土がみられないこと等より、当該時期に位置付けられるものとする。



第91図 SK44 平・断面図



第92図 SD48・SD49・SD51 断面・出土遺物実測図

## 溝

## SD48 (第92図)

Ⅵ区西端 E9・F9 グリットで検出した溝で、南北両端は調査区内で途切れ、延長約 12.5 m を確認した。中位より SD49 が北東方向へ派生し、その北側でやや蛇行する。流路方向は概ね N 13.28° W に配され、検出面幅 0.7～0.8 m、残存深 0.13 m、断面形は皿状を呈する。底面の標高は、南端部で 21.93 m、北端部で 21.83 m をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたものとする。埋土は 2 層に細分され、底面には粗砂の薄い堆積が認められ、溝機能時の堆積層とみられる。

遺物は石礫 (292) 以外に、少量の弥生土器小片とサヌカイト剥片が出土している。出土遺物より、弥生時代中期に位置付けられる。

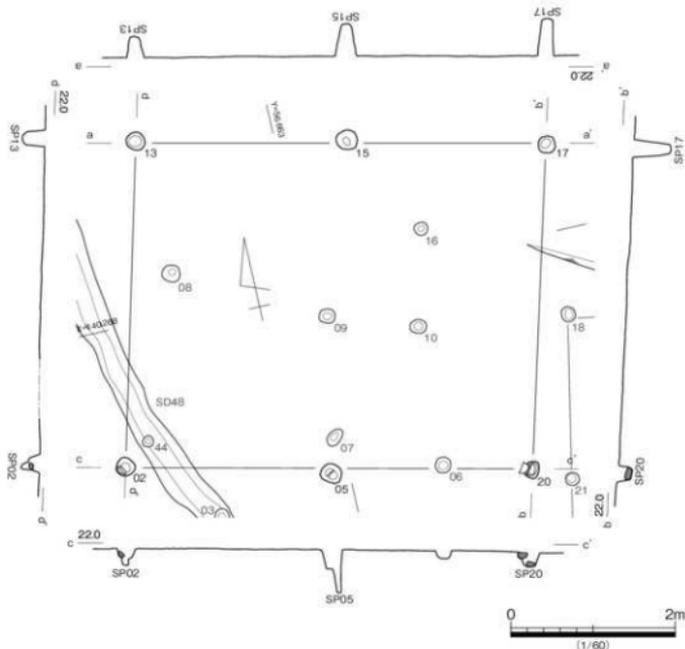
## SD49 (第92図)

既述したように SD48 より派生して、断続的に東へ緩やかに弧を描いて延びる。東端は調査区内で途切れ、延長約 19.2 m を検出した。検出面幅 0.4 m 前後、残存深 0.03 m で、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は SD48 と同一である。

遺物は、弥生土器広口壺 (293) 以外には、器種不詳の土器小片が数点出土したのみである。293 は外反して大きく開く広口壺口縁部小片で、端面に凹線文 3 条を認める。出土遺物や既述した竪穴建物との関係より、弥生時代中期中葉に機能していたものとする。

## SD51 (第92図)

Ⅵ区東半 G12～G13 グリットで検出した溝で、西端は既述した SH02 の中央付近よりやや屈曲しながら東へ延び、東端は調査区内で途切れ、延長約 12.3 m を確認した。途中 SH02 東側で、遺構面にまで及ぶ後世の削奪により 2.2 m ほど途切れるが、流路方向や埋土が近似することから同一溝と考えた。検出面幅 0.14～0.37 m、残存深 0.02～0.17 m を測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。底面の標高は、西端部付近で 21.76 m、東端部付近で 21.35 m を測り、底面の標高差より東へ流下すると思われる。



第93図 SB17平・断面図

埋土は灰色粘質シルトの単層で、SH02壁溝埋土と近似する。SH02の中央土坑との重複部分では、中央土坑が溝上面より切り込むが、土坑周辺の溝埋土中には炭化物粒がやや多量に混入し、この炭化物が中央土坑に起因するものだとすれば、堅穴建物と本溝が同時併存していた可能性は高く、堅穴建物の排水溝として開削された可能性が考えられる。

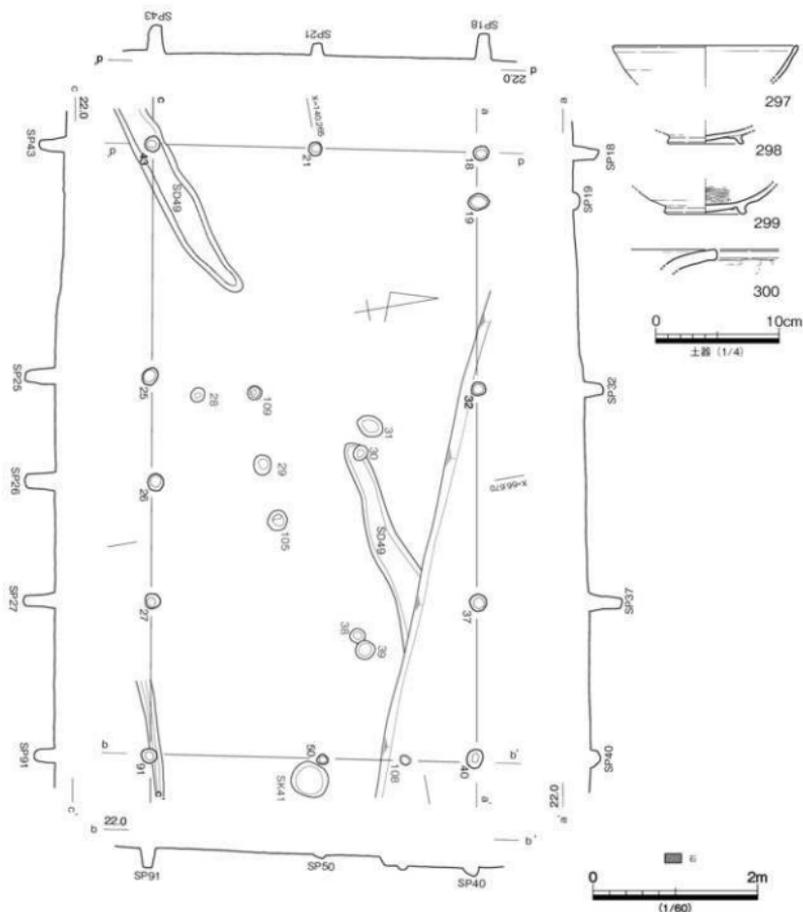
遺物は、弥生土器壺(294・295)のほか、器種不詳の土器小片やササカイト製楔形石器(296)等が若干量出土している。294は弥生土器広口壺の口縁部小片、295は壺の底部小片である。出土遺物より、弥生時代中期中葉に位置付けられる。

### 3 中世

#### 掘立柱建物

#### SB17(第93図)

Ⅵ区北西部G12グリットで検出した。SD48と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。桁行2間、梁間1間、主軸方向N 77.19°Wの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北列で5.06m、南列で4.94m、梁間は東列で3.94m、西側で4.00m、床面積19.85㎡を測り、平面プランはやや歪な矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.40～2.58mとやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.22～0.24mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.16～0.52m、底面の標高21.41～



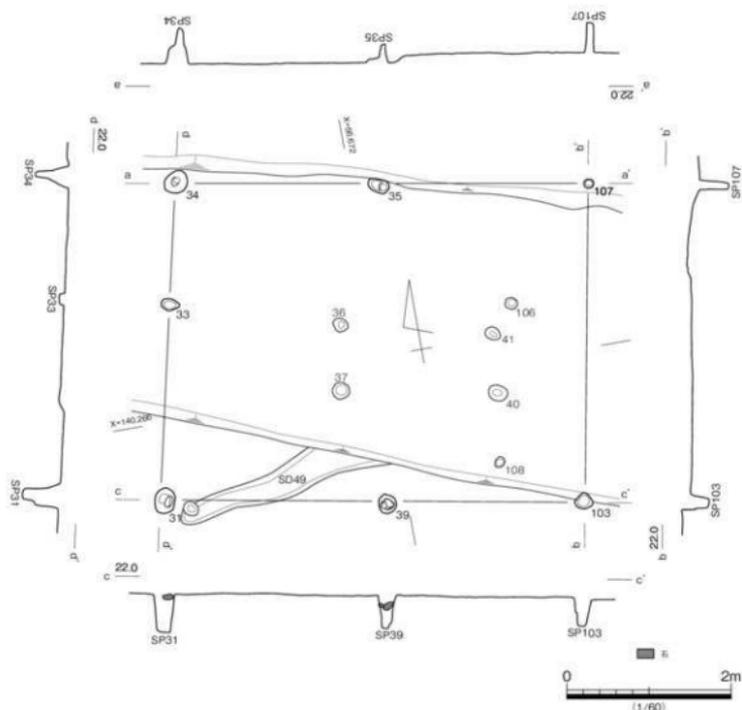
第94図 SB18平・断面・出土遺物実測図

21.72 mであった。

遺物は、SP15とSP02より土師質土器碗等の小片が各1点出土したのみである。出土した遺物より、13世紀中葉から後半以降の時期と考えられる。

#### SB18（第94図）

VI区西半G12グリットで検出した。SH02・SB19・SD49と重複し、切り合い関係よりSH02・SD49より後出し、SB19とは先後関係は不明である。桁行3間、梁間2間、主軸方向N 79.78° Wの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北側で7.38 m、南側で7.48 m、梁間は東側で3.92 m、西側で3.96 m、床面積 29.27㎡を測り、平面プランはやや歪な矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、1.88～2.90 mと南北



第95図 SB19平・断面図

両列とも東端1間が狭く配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.13～0.23mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.04～0.40m、底面の標高21.29～21.74mであった。

遺物は、SP37を中心に土師質土器や黒色土器の破片が出土した。300は、SP37より出土した土師器甕、297はSP37より、298はSP43より、299はSP40よりそれぞれ出土した黒色土器碗である。出土遺物より、12世紀後半に位置付けられる。

#### SB19 (第95図)

Ⅵ区中央北半G12グリッドで検出した。SD49と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。桁行2間、梁間2間、主軸方向N79.27°Wの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北列で5.00m、南列で5.08m、梁間は東西両列とも3.88m、床面積19.56㎡を測り、平面プランはほぼ整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、2.38～2.70mとやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.13～0.31mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.22～0.46m、底面の標高21.30～21.67mであった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期は特定できない。しかし近接するSB17と規模・方向が近似し、より新しくする積極的な根拠もないことから、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

## SB20 (第96図)

VI区西半G12グリットで検出した。桁行2間、梁間2間、主軸方向N77.05°W、北面に庇を付す東西棟の総柱建物として復元した。桁行は北列で3.88m、中央列で4.02m、南列で3.92m、梁間は東列で2.50m、西列で2.38m、床面積9.52㎡を測り、平面プランはやや歪な矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、1.80～2.14mとやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.16～0.30mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.13～0.28m、底面の標高21.64～21.76mであった。

遺物は、SP120より器種不詳の土師質土器の小片が、SP132より器種不

詳の須恵器小片がそれぞれ1点出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、規模や構造、周辺建物との関係を考慮すると、当該時期に位置付けられるものとする。

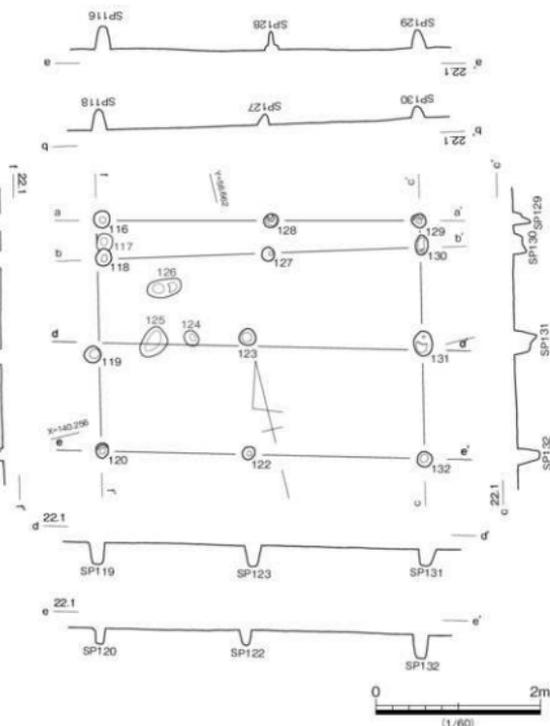
## SB21 (第97図)

VI区東半G12・13グリットで検出した。SB22・SX10と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。桁行3間(南列で5.68m)、梁間1間(東列で3.0m)、床面積17.03㎡、主軸方向N82.28°W、平面プランは整った矩形を呈する東西棟の側柱建物として復元した。桁行の柱間寸法は、1.45～2.0mとやや誤差がある。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.13～0.42mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.03～0.38m、底面の標高21.04～21.59mであった。

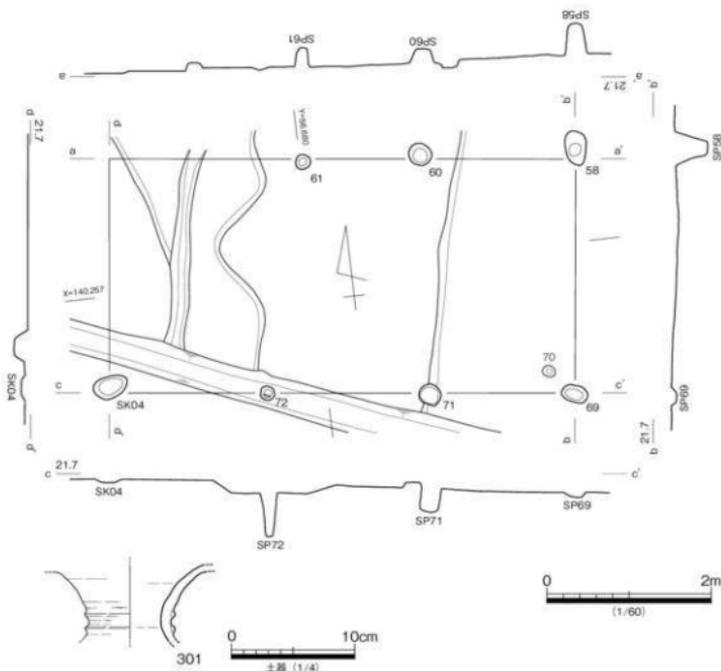
遺物は、SP71とSP72より弥生土器小片が少量出土した。301は、SP71より出土した弥生土器広口壺である。出土遺物は弥生土器に限られるが、建物規模や構造、周辺建物との関係を考慮すると、当該時期に位置付けられるものとする。

## SB22 (第98図)

VI区東半G13グリットで検出した。SB21と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不



第96図 SB20平・断面図



第97図 SB21 平・断面・出土遺物実測図

明である。桁行2間、梁間1間、主軸方向N 82.02° Wの東西棟の側柱建物として復元した。桁行は北列で280 m、南列で292 m、梁間は東西両列とも273 m、床面積781㎡を測り、平面プランはほぼ整った矩形を呈する。桁行の柱間寸法は、1.38～1.48 mとやや不均等に配される。柱穴の掘り方は、径もしくは長軸0.13～0.21 mの円ないし楕円形を呈し、残存深0.07～0.24 m、底面の標高21.19～21.28 mであった。

遺物は、SP56より焼土塊小片1点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、建物規模や構造、周辺建物との関係を考慮すると、当該時期に位置付けられるものと考えられる。

#### 土坑

#### SK38 (第99図)

VI区西端G11グリッドで検出した土坑である。平面形は、南北0.95 m、東西0.58 mのやや歪な隅丸方形を呈する。残存深は0.35 mで、断面形は碗底状を呈する。

遺物は、底面よりやや浮いて十瓶山窯産須恵器碗(303)が出土したほか、土師質土器杯(302)や器種不詳の弥生土器、土師質土器の小片が少量出土している。出土遺物より、13世紀前葉に位置付け

られる。

### 溝

#### SD52 (第100図)

Ⅵ区南東隅H12～H13グリットで検出した東西直線溝である。東西両端は調査区外へ延長し、約10.8mを確認した。流路方向N 80.69°W、検出面幅0.6m～0.7m、残存深0.12～0.21m、断面形は概ね箱形を呈する。流路底面の標高は、西端部で21.58m、東端部で21.14mを測り、底面の高低差より東へ流下していたと考えられる。また、Ⅶ区で延長部が確認されなかったことから、Ⅶ区との間で南北溝へ合流していた可能性が高い。埋土は3層に細分され、下層には溝機能時の堆積層とみられる褐色細～中砂を認める。

遺物は、弥生土器甕、土師器甕(305)、土師質土器皿(304)・碗、黒色土器、和泉型瓦器碗等の小片やササカイト裂石鏃(306)等が若干量出土した。305は古代的な土師器甕の最終形態とされる。出土遺物より、12世紀中葉を中心とした時期と考ええる。

### 性格不明遺構

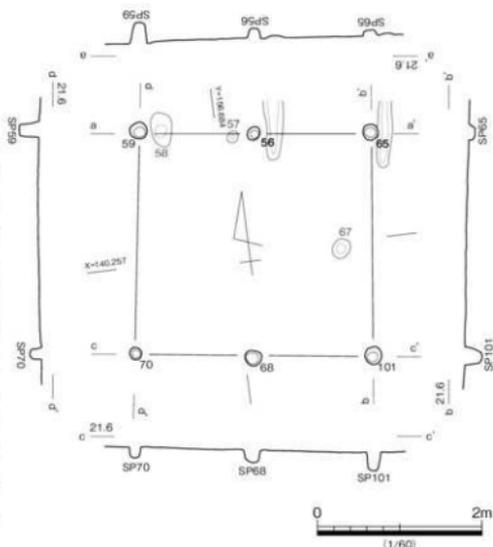
#### SX10 (第101図)

Ⅵ区東半G12グリットで検出した溝状の落ち込みである。南北両端は調査区内で途切れ、延長約7.25mを確認した。SD51と重複し、切り合い関係よりSD51より後出する。主軸方向N 1.74°Eとはほぼ正方位に配され、検出面幅2.25m前後、残存深0.06m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色粘質シルトの単層であった。

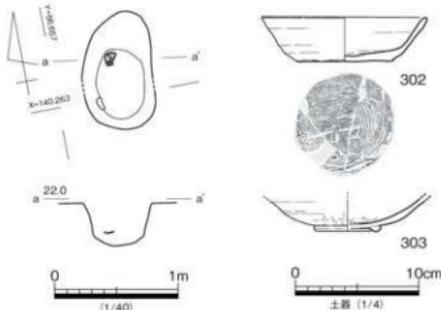
遺物は、須恵器、土師質土器碗・足釜・鍋、黒色土器等の小片、ササカイト剥片等が少量出土した。307は土師質土器鍋。308はササカイト裂石鏃脚部片とした。出土遺物より14世紀中葉を中心とした時期と考ええる。

#### SX11 (第101図)

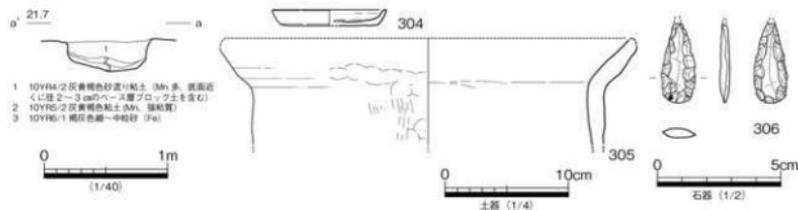
Ⅵ区東半G12～G13グリットで検出した落ち込みである。主軸方向N 89.37°Wと、既述したSX10



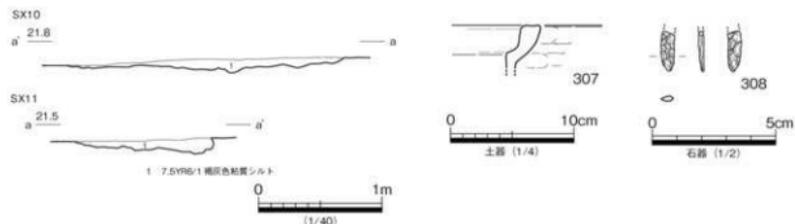
第98図 SB22平・断面図



第99図 SK38平・断面・出土遺物実測図

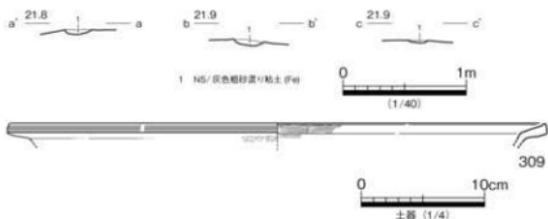


第100図 SD52平・断面・出土遺物実測図



第101図 SX10・SX11 断面・SX10 出土遺物実測図

とはほぼ直交して配される。平面形は、長軸2.50m以上、短軸1.10mの東西に長い不整な隅丸長方形を呈し、東端部立ち上がりは削平により消失していた。残存深0.12mで、断面形は概ね浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色



第102図 SD50 断面・出土遺物実測図

粘質シルトの単層で、SX10埋土に近似する。平面プランや埋土の状況より、本来は土坑として開削されたものが、埋没の過程で上面プランが不整形となった可能性が考えられる。

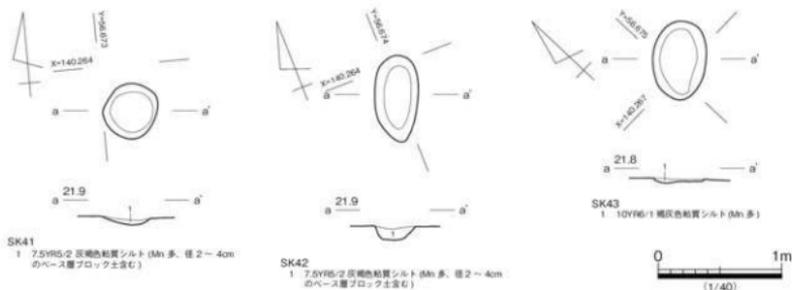
遺物は、弥生土器小片とサヌカイト剥片等が少量出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。既述したSX10と近接しかつほぼ直交して配され、また埋土も近似すること等より、SX10と近接した時期の遺構と考える。

#### 4 近世

溝

##### SD50 (第102図)

VI区中央部G12～H12グリッドで検出した南北直線溝である。上面の著しい削平のため一部途切れるものの、埋土や流路方向等より同一溝と判断した。流路方向N1328°Eに配され、ほぼ周辺地域の条里型地割の方向と合致する。検出面幅0.2～0.25m、残存深0.02～0.04m、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色粘土の単層であった。



第 103 図 SK41 ~ SK43 断面図

遺物は、土師質土器鍋 (309)・焙烙、須恵器碗、和泉型瓦器碗等の小片、ササカイト剥片等が少量出土したのみである。309 は 13 世紀前葉に遡る混入資料で、南半部より出土した焙烙片より、上限を 18 世紀後半代に位置付けられると考える。

## 5 時期不詳

### 土坑

#### SK41 (第 103 図)

Ⅵ区中央北半 G12 グリッドで検出した土坑である。平面形は、径 0.35 ~ 0.4 m の略円形を呈し、残存深は 0.04 m で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。周辺の遺構配置や埋土の特徴等より、中世に遡る可能性が考えられたが、断定することはできないため、時期不詳の遺構として報告する。

#### SK42 (第 103 図)

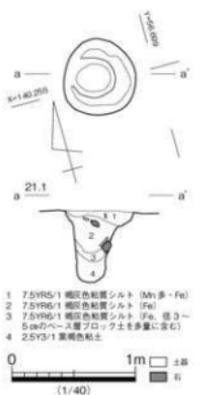
Ⅵ区中央北半 G12 グリッドで検出した土坑である。平面形は、東西 0.31 m、南北 0.67 m の長楕円形を呈する。残存深は 0.10 m で、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトの単層で、SK41 と酷似する。

遺物は、器種不詳の土器小片 1 点が出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。既述した SK41 同様、中世に遡る可能性が考えられたが、断定することはできないため、時期不詳の遺構として報告する。

#### SK43 (第 103 図)

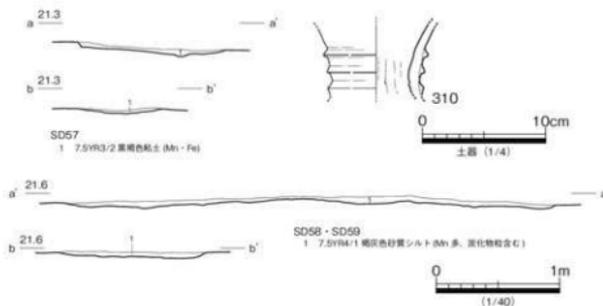
Ⅵ区中央北端 G12 グリッドで検出した土坑である。平面形は、東西 0.38 m、南北 0.68 m の長楕円形を呈する。残存深は 0.03 m と遺構上面は顕著な削平を蒙り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は、器種不詳の須恵器小片 1 点が出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。周辺の遺構配置や埋土の特徴等より、中世に遡る可能性が考えられたが、断定すること



第 104 図 SK45 平・断面図





第106図 SD57～SD59断面・SD57出土遺物実測図

## 第9節 VII区の遺構・遺物

### 1 弥生時代

#### 土坑

#### SK45 (第104図)

VII区西端G13グリット、第2面で検出した土坑である。平面形は、径約0.6mの楕円形を呈する。残存深0.58mを測り、断面形は検出面より約0.08m下位で、東～南部に幅0.02～0.03m程のテラス面を作り、それ以下は概ね直に近く掘り込まれている。

埋土は4層に細分された。上位3層は土坑廃棄後の自然堆積層とみられ、とくに3層中には壁面の崩落に起因するとみられるベース層ブロック土が多量に含まれる。おそらくは土坑廃棄後はオープンな状況のまま放置されたのであろう。平・断面形や埋土の状況より、井戸の可能性が考えられたが、調査の段階で断定することはできなかった。

遺物は、上位2層より弥生土器小片が少量出土した。出土遺物より弥生時代中期に位置付けられるものと考ええる。

#### 溝

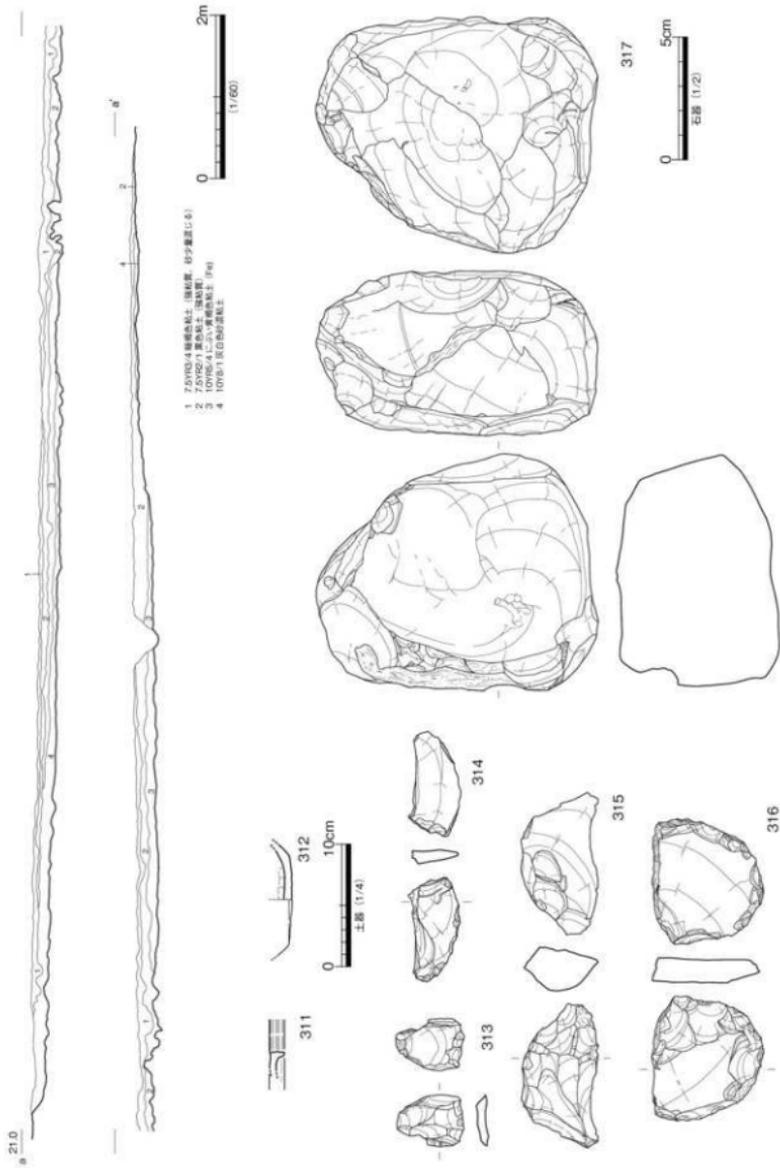
#### SD57 (第106図)

VII区南西隅部H13グリット、第2面で検出した溝である。SR04西岸部をく字状に屈曲して配され、調査区内で延長約5.0mを確認したのみにとどまる。隣接するVI区で西側延長部が確認できなかったことから、調査区間で南もしくは北へ屈曲するものと考ええる。検出面幅0.5～1.18m、残存深0.03～0.06m、上面は後世の著しい削平のため、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は黒褐色粘土の単層で、SR04上層と近似する。

遺物は、弥生土器広口壺(310)やサヌカイト剥片等が少量出土した。310は頸基部に3条の突帯を貼付する。出土遺物より弥生時代中期中葉に位置付ける。

#### SD58 (第106図)

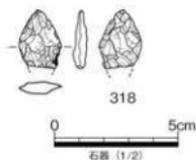
VII区南東隅I16グリット、第2面で検出した溝である。北西方向へ緩やかに弧を描いて流下するが、北半部は地下げにより削奪され延長約11.1mを検出したにとどまる。中央部でSD59が合流し、北半部



第107図 SR04断面・出土遺物実測図

は溝幅がやや広くなる。検出面幅 2.45～3.95 m、残存深 0.03～0.06 mで、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は単層で、炭化物粒を含む。

遺物は、弥生土器小片、ササカイト剥片、被熱の可能性がある安山岩礫等が少量出土した。出土遺物より当該時期に位置付けられるものとする。



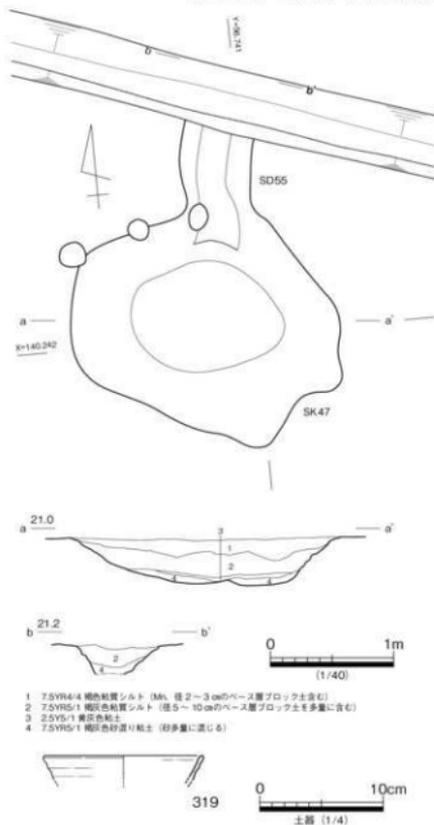
第108図 柱穴出土遺物実測図

## 自然河川

### SR04 (第107図)

Ⅶ区西端部H14グリット周辺で検出した低地帯である。ほぼ直線状に調査区を縦断し、北東方向へ流下する。検出面幅 19.75～21.0 m、残存深 0.42 m、断面形は皿状を呈する。埋土は7層に細分され、上・中・下の3層に大別し遺物の取上げをおこなった。いずれも粘土層が概ね水平堆積し、上・下層に中粒砂が若干量混入するが、明瞭な流水堆積は認められなかった。中層は水田耕土の可能性も考えられたが、残念ながら調査により畦畔等は検出できなかった。

遺物は、上・下層を中心に、弥生土器壺(311・312)やササカイト製楔形石器(316)、同碎片(313)、使用痕のある剥片(314)のほか、チャート製の石核(317)や剥片(315)等がコンテナ半箱程度出土している。大半の土器は、器壁の劣化が顕著で著しく小片化しており、図化可能な資料は少ない。311は弥生土器広口壺の口縁部小片。端部は主に下方へ拡張し、端面に2条の凹線文を施す。315と317は、同一の石材であるが接合関係にはない。周辺地域で弥生時代と同石材の使用例は乏しく、縄文時代以前の遺構等からの混入の可能性を考える。本遺構は出土遺物より、弥生時代中期中葉には上層まで埋没していたと考えられる。



第109図 SK47・SD55平・断面・出土遺物実測図

## 2 中世

### 柱穴 (第108図)

318は、Ⅶ区第1面SP422より出土した石織で、遺構面より当該期の遺構と考えられ、出土遺物は

混入資料である。

溝

SK47・SD55 (第109図)

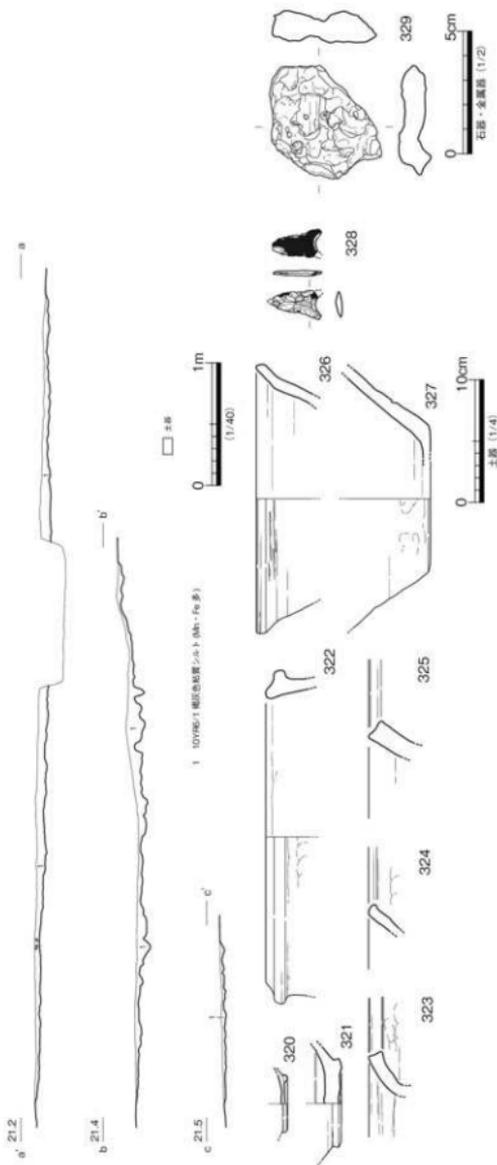
Ⅶ区中央北端H15～H16グリット、第2面で検出した土坑SK47とそれに付設された溝SD55である。SK47の平面形は、長軸2.18m、短軸1.35mの東西に長いやや歪な楕円形を呈し、北辺中央部に溝SD55が取り付けく。SK47の残存深は0.35mを測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。

SD55は土坑より北に配され、延長約0.6mを検出したに留まる。検出面幅0.66m、残存深0.28m、断面形は概ね逆台形状を呈する。

SK47の埋土は4層に細分された。最下層は埋土中に粗砂が多量に混じり、下層はグライ化した灰色系粘土の細層で、いずれも滞水下での堆積が想定される。また中・上層は、ベース層のブロック土を多量に含み、人為的な埋め戻しの可能性が想定される。SD55の埋土は2層に細分され、上層はSK47上層に、下層は同最下層にそれぞれ対応する。

埋土の特徴より、SK47は小規模な貯水池もしくは出水状機構であり、SD55はSK47の用水を北へ送る導水溝と考えられる。また、その廃絶にあたっては土坑及び溝を意図的に埋め戻しており、耕地の再編等を契機とするものであった可能性がある。

遺物は、SD55より土師質土器杯(319)と、同皿小片が1点出



第110図 SX12断面・出土遺物実測図

土したのみである。出土遺物より13世紀前半を中心とした時期に位置付けられる。

#### 性格不明遺構

##### SX12 (第110図)

Ⅶ区中央H14～16グリット、第1面で検出した溝状の落ち込みである。

西端は調査区外へ延長し、東端は調査区内と途切れ、約50.9mを検出した。検出面が必ずしも平坦ではなく、試掘トレンチによる攪乱もあり、平面的に

は蛇行や検出面幅の長短が認められるが、概ね主軸方向N78.2°Wと条里型地割の方向に合致して配されている。また、西延長上にはⅦ区SD52が位置するが、底面の標高や時期、埋土が大きく異なり、一連の遺構とは考えられない。しかし、後述するように12世紀代に遡る遺物も出土しており、SD52延長溝が本来開削されていた可能性までは否定できない。検出面幅1.3～6.6m、残存深0.03～0.15m、断面形は概ね浅い皿状を呈し、底面には部分的に顕著な起伏が認められた。埋土は、褐灰色粘質シルトの単層で、明瞭な流水痕跡は認められなかった。底面の標高は、東端で21.2m前後、西端で21.0m前後を測り、西へ傾斜する。

遺物は、コンテナ半箱程度出土している。十瓶山周辺窟産須恵器甕(323)、和泉型瓦器碗(320)、大宰府分類白磁Ⅳ-1類碗(321)、瓦質土器鉢(325・327)、同鍋(324)、須恵器鉢(326)、土師質土器足釜(322)、石鏝(328)、鉄滓(329)以外に、弥生土器、黒色土器、土師質土器皿・鉢、龍泉窯系青磁碗等の小片、サヌカイト剥片等が出土している。320・321・323・326は11世紀後半～13世紀初頭に遡り、混入資料であろう。325は瓦質土器鉢と考え図化した。小片のため別の器種となる可能性がある。322・324より、本遺構は15世紀後半～16世紀前葉頃に位置付けられる。

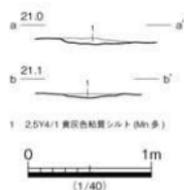
### 3 時期不詳

#### 溝

##### SD53 (第111図)

Ⅶ区西端部G13～H13グリットで検出した南北走る溝である。やや蛇行しつつN9.62°Eに配され、調査区内で延長約12mを検出した。検出面幅0.35～0.6m、残存深0.03～0.06m、断面形は浅い皿状を呈する。流路底面の標高は、北端部で20.8m前後、南端部で20.9m前後を測り、高低差より北へ流下していたとみられる。埋土は黄灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は、南端付近より器種不詳の土器小片が1点出土したのみであり、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難である。遺構検出面や埋土の特徴等より、中世に遡る可能性が考えられたが、断定することはできないため、時期不詳の遺構として報告する。



第111図 SD53断面図

## 第4章 自然科学的分析

### 第1節 十川東・平田遺跡出土木製品の樹種同定

文化財調査コンサルタント株式会社

#### 1. はじめに

十川東・平田遺跡は香川県高松市十川東町に所在する。本報告では、同遺跡SK24から出土した、木質遺物1試料の樹種同定結果を報告する。

#### 2. 試料と方法

香川県埋蔵文化財センターから提供を受けた1試料を対象に、樹種同定を行った。

顕微鏡観察用永久プレパラートは、第112図に示すフローチャートに従い作成した。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4～600倍の倍率で行った。

同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、3断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、記載を行った。また、同定に利用した永久プレパラートは、香川県埋蔵文化財センターに納品した。

#### 3. 樹種記載

分類群ごとに代表的な試料(下線)の記載を行うとともに、3断面の顕微鏡写真撮影を行い、図版に示した。国内での分布域は北村・村田(1982a, 1982b)を引用した。

(1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus sub. Cyclobalanopsis* sp.

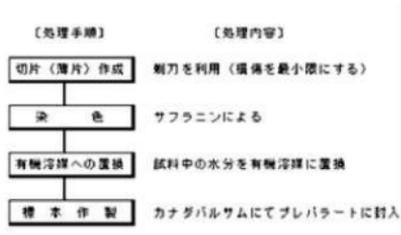
①試料No(報文番号): 110(230): 板材

②記載: 「中庸」から「小さい」円形ないし楕円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが非常によく発達し、周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は接線方向に1ないし2細胞幅で連続する独立帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織がある。更に道管放射組織壁孔は典型的な楕状を示す。以上の特徴から、コナラ属アカガシ亜属と同定した。アカガシ亜属は、イチイガシ、アカガシ、ハナカガシ、ツクバネガシ、アラカシ、シラカシ、ウラジログシ、オキナワウラジログシから成る。

③分布: イチイガシ: 暖帯南部: 本州(関東南部以西)・四国・九州 アカガシ: 暖帯: 本州(宮城県、新潟県以南)・四国・九州 ツクバネガシ: 暖帯: 本州(宮城県南部以南、富山県以西)・四国・九州 アラカシ: 暖帯: 本州(宮城県以南)・四国・九州・沖縄 シラカシ: 暖帯: 本州(福島県以南)・四国・九州 ウラジログシ: 暖帯: 本州(宮城県南部、新潟県以南)・四国・九州 オキナワウラジログシ: 亜熱帯: 九州(奄美大島、徳之島)・沖縄

#### 4. 引用文献

北村四郎・村田 源(1982a) 原色日本植物図鑑本編〔1〕改訂17刷。保育社。p.453。大阪。



第112図 樹種鑑定用プレパラート作製  
フローチャート

図版1 出土木製品の顕微鏡写真

ナラ属アカガシ亜属 *Quercus sub. Cyclobalanopsis* sp. : 試料(報文番号)No.110(230)(W14122918)



横断面



接線断面



細胞壁断面

## 第2節 動物遺存体の同定

広島大学総合博物館 石丸 恵理子

十川東・平田遺跡より出土した動物遺存体の同定結果は下表のとおりである

番号	調査区	遺構名	層位	種名	部位	部分	左右	その他	備考
1	I区	SD02		ウシもしくはウマ	不明				骨
2	I区	SD02	上層	ウシもしくはウマ	不明破片				下顎骨破片か?
3	I区	SX01		ウシ	流離歯	臼歯破片			
4	Ⅱ区	SX12		ウマ	流離歯	上顎臼歯		右?	
5	Ⅱ区	SX12		ウシ	流離歯	上顎臼歯	左		おそらく同一個体
6	Ⅱ区	SX12		ウシ	流離歯	上顎臼歯	左		
7	Ⅱ区	泓舎層	北壁30層	ウマ	流離歯	下顎臼歯 M <sub>1</sub>	左		

第2表 動物遺存体同定結果一覧

## 第3節 十川東・平田遺跡出土ササカイトの産地推定

竹原弘展・藤根 久(パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

高松市に所在する十川東・平田遺跡から出土したササカイトの自然礫について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

## 2. 試料と方法

分析対象は十川東・平田遺跡より出土したササカイト自然礫6点である(第2表)。試料は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 $\mu$ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法としては、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えば望月2004)を用い、分析対象をササカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、

試料番号	遺物取上げ番号	備考
1	S3	灰黄色風化礫
2	S12	灰黄色風化礫
3	S61	青灰色風化礫
4	S29	青灰色風化礫
5	S06-1	灰白色風化礫
6	S06-2	灰白色風化礫

第3表 分析対象

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)	
奈良	二上山	春日山	春日山みかん畑内(10)、我山(6)	
		国分台1	白鹿塚遺跡付宮(5)、神谷神社前(13)、高産堂神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)、神谷(17)、瀬光寺(36)、出雲神社裏手(8)	
香川	讃岐	国分台2		
		国分台3		
		赤子谷・法印谷	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10)	
		金山1	北峰道路脇(10)、金山南麓(31)、金山北東部(27)	
		金山2		
		城山	城山南側(5)、城山北側(5)	
		藤山・藤山	藤山(5)、藤山(5)	
		反子山	反子山南嶺(10)	

第4表 原石採取地と判別群名称

その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) とルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps : count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{Rb 分率} = \text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$2) \text{Sr 分率} = \text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$3) \text{Mn 強度} \times 100 / \text{Fe 強度}$$

$$4) \log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$$

そしてこれらの指標値を用いた 2 つの判別図 (横軸 Rb 分率 - 縦軸 Mn 強度  $\times$  100 / Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率 - 縦軸  $\log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$  の判別図) を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。原石試料も、採取原石を割って新鮮面を表出させた上で、分析対象の試料と同様の条件で測定した。第 3 表に各原石の採取地とそれぞれの試料点数を示す。

### 3. 分析結果

第 4 表に試料の測定値および算出された指標値を、第 113 図と第 114 図に、サヌカイト原石の判別図に試料の分析結果をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

測定した試料はいずれも合致する判別群がなく、不明であった。ただし、試料番号 3～6 は、両図とも互いに近い位置にプロットされており、同一産地である可能性がある。ここでは、仮に不明 1 とした。なお、試料番号 1 と 2 は斑晶が多くみられ、典型的なサヌカイトとは異なると考えられる。

No.	K 強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y 強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	Mn*100 Fe	Sr 分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア	No.
1	1530	1023	54691	3039	7195	1614	697.2	16.15	1.87	38.23	1.55	?	不明	1
2	1364	985	60102	2507	6245	1342	633.3	15.26	1.64	38.02	1.64	?	不明	2
3	2054	1160	54100	4970	9986	2328	1157.6	17.22	2.14	34.60	1.42	不明 1	不明	3
4	1994	1077	50671	4762	9606	2230	1131.6	17.06	2.13	34.41	1.40	不明 1	不明	4
5	1980	1041	50462	4400	8999	2104	1010.9	17.18	2.06	35.14	1.41	不明 1	不明	5
6	1487	725	34231	3413	6914	1658	800.3	17.08	2.12	34.59	1.36	不明 1	不明	6

第 5 表 分析値および産地推定結果

### 4. おわりに

十川東・平田遺跡より出土したサヌカイト自然礫 6 点について、蛍光 X 線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、いずれも合致する判別群がなく不明であった。ただし、試料番号 3～6 は同一産地である可能性がある。

### 引用・参考文献

望月明彦 (2004) 用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定。かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」:511-517。かながわ考古学財団。



## 第5章 まとめ

### 第1節 遺構の変遷

#### 縄文時代以前

本期の明確な遺構は検出されていない。Ⅵ区で検出されたサヌカイトブロックは、層位的に低位段丘の堆積層に含まれる可能性が高く、当該期のものとする。土器資料及び定型的な石器が出土しておらず、詳細な時期は不詳である。出土したサヌカイトの一部について、産地推定分析を実施した。得られた分析値について判別図法による推定の結果、全致する判別群がなく、未知の産地のサヌカイトである可能性が示された。遺跡周辺で、小規模なサヌカイト産地の所在を示唆する資料と考える。

#### 弥生時代中期

中期中葉の遺構はⅤ・Ⅵ区の微高地を中心に分布し、堅穴建物SH02、掘立柱建物6、土坑、溝を確認した。遺構上面の削平は顕著で、本来はさらに多数の遺構が存在した可能性も考えられる。堅穴建物に対して掘立柱建物の比率が高いが、これは遺構面の削平や集落内での位置関係も考慮しなければならない。また、両者がそれぞれ重複せず、東西に分節して配されていることが読み取れ、集落内での土地利用のあり方を考える資料とはなろう。

なお、Ⅱ・Ⅳ・Ⅷ区の各低地帯は、本期には埋没が進展しほぼ平準化するとみられる。これら低地帯は水田等に利用されていた可能性も考えられるが、既述した削平のため、水田畦畔等の遺構は確認できなかった。同時期の遺構はⅡ・Ⅲ区微高地でも少数の土坑を確認しており、本遺跡周辺が比較的広範囲に開発されていた可能性も考えられる。

#### 弥生時代終末期

本期の遺構は、Ⅱ・Ⅲ区微高地で堅穴建物SH01を検出した。遺構面が顕著な削平を蒙っていることを考慮しても、周辺に同時期の遺構は皆無であり、建物が何らかの特殊な用途に利用されたものであった可能性も考えられる。

#### 中世Ⅰ期

本期は、12世紀後半～13世紀前葉を想定する。本期に属する遺構としては、Ⅶ区で掘立柱建物SB18とⅧ区で出水状遺構(SD55・SK47)を確認した。検出された遺構数は乏しく、時期の特定が困難な遺構の一部は本期の遺構である可能性が想定される。いずれにしても、弥生時代以来断絶していた遺跡周辺の土地利用が、本期に再開されたことが伺える。

14世紀の妙法院文書等に、十川郷が蓮華王院領荘園として記載されており、その立荘の起点は本期に求められよう。永らく途絶していた遺跡周辺の開発行為が再開された背景に、こうし

た荘園化を契機とした可能性も考えられる。

#### 中世Ⅱ期

本期は、13世紀後半～14世紀前葉を想定する。本期に属する遺構として、Ⅱ区SB07・SK07・SD11・SD18、Ⅲ区SD32、Ⅵ区SB17・SB19・SD52がある。出土遺物が乏しく本期に属する証左に乏しいが、Ⅰ区SB02・SB04、Ⅱ区SB08・SB09、Ⅲ区SB10、Ⅵ区SB20・SB21・SB22も、建物の主軸方向や他の遺構との切り合い関係より、本期に属する可能性が高い。建物遺構はⅠ～Ⅲ区に拡大し、Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ区にも建物遺構は復元できなかったが、同時期とみられる柱穴群が存在し、中世Ⅰ期に再開された開発が、大きく進展したとみることができよう。

本期の掘立柱建物は、各々40～100m離れて点在し、散村的様相を認める。各建物群を区画する施設は不明瞭で、植栽等や横列等により各屋敷地が区画されていた可能性が考えられる。

#### 中世Ⅲ期

本期は、14世紀末～15世紀前半を想定する。中世Ⅱ期の建物群とは若干の時期差があり、中世Ⅰ期以来の遺跡周辺の開発は一時中断した可能性が考えられる。本期に属する遺構には、Ⅰ区SB03・SD08がある。調査範囲が限られるため断定は困難だが、SD08を区画溝とする方形屋敷地の存在が想定される。本期屋敷地の経営は安定せず、本期のみで断絶する。

#### 近世Ⅰ期

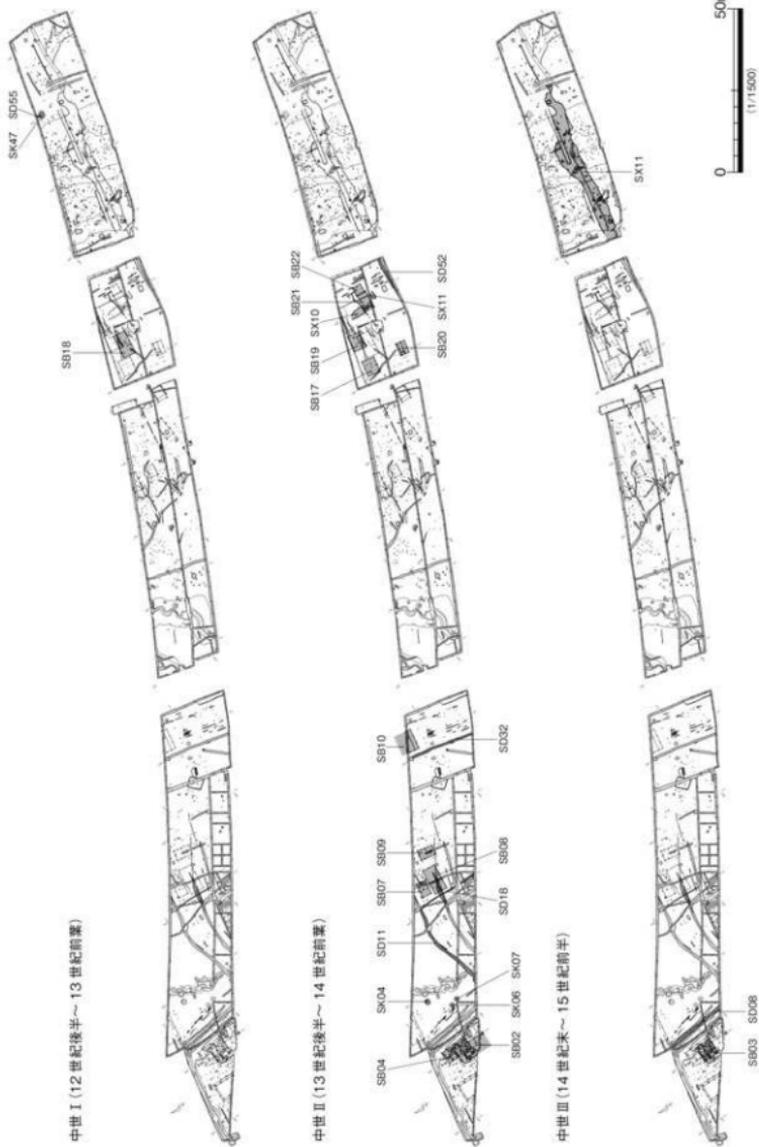
本期は、16世紀後半～17世紀前葉を想定する。本期に属する遺構には、Ⅰ区SB01・SD01、Ⅱ区SD15等がある。SD01を区画溝とする、方1/3町の方形屋敷地(屋敷地A)を想定する。既述したように、中世Ⅲ期屋敷地とは時期的に断絶を認めるため、位置は踏襲されるが、屋敷地がそのまま維持されたものではない。SD15は、SD01と類似した規模の矩形溝であり、屋敷地の区画溝となる可能性もあるが、大半が調査区外となるため断定はできない。

遺物には、肥前系の陶磁器や備前焼等の国産陶磁器は搬入されているが、貿易陶磁は出土しておらず、屋敷地の規模とも相關して、居住者の階層的位置を反映している可能性がある。

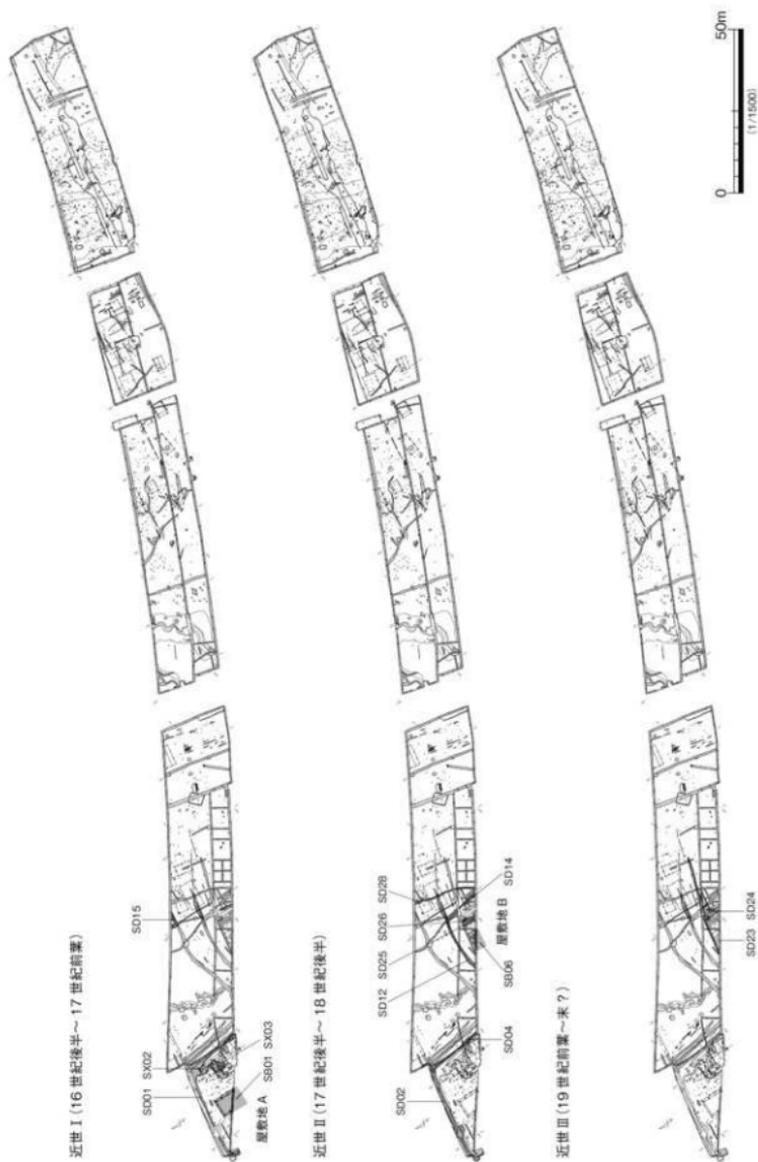
#### 近世Ⅱ期

本期は、17世紀後半～18世紀後半を想定する。本期に属する遺構には、Ⅰ区SD02・SD04、Ⅱ区SD12・SD14・SD25・SD26等があり、SB06も周辺溝との位置関係から本期に属する可能性がある。屋敷地Aは、区画溝を外側に2～3mほど拡大して踏襲される。区内に建物は復元できなかったが、区画溝内より当該期の遺物が多量に出土していることから、屋敷地は維持されているものとする。また瓦片も出土していることから、本期のうちに礎石建物に変更された可能性も考えられる。





第116図 遺構変遷図2



第117図 遺構変遷図3

また、屋敷地Aの東側に、Ⅱ区SD12・SD17等北・東辺区両溝とする屋敷地Bが成立する。屋敷地Bの成立時期は不詳だが、区画溝内より17世紀前半に遡る遺物も出土していることから、あるいは近世Ⅰ期に屋敷地Aと共に成立した可能性も考えられる。調査区内では屋敷地の北東隅部を確認したのみで不明な点は多いが、屋敷地Aとの位置関係からすれば、ほぼ同規模の屋敷地と考えられる。

### 近世Ⅲ期

本期は、19世紀前半～末頃を想定する。本期に属する遺構には、Ⅱ区SD23・SD24がある。近世屋敷地は、本期には継続しない。両溝は、現状の地割に合致し、おそらくは農地に伴う用排水路と考えられる。土層断面にみられる近世耕土層の広がりからも、調査前の景観が本期にまでは遡るものと考えられる。

## 第2節 香川県内出土の有舌（莖）尖頭器について

既述したように、本遺跡からはほぼ完形の有舌尖頭器1点129が出土した。供伴する土器資料はなく、後出する遺構からの混入資料であり、それ自体の位置付けは困難である。したがって、香川県内の出土資料を集成し、以下若干の比較検討をおこなうこととする。

香川県内からは、現在32遺跡・地点より39点が出土している。この中には、報告書では有舌尖頭器とされているものの基部が欠損して判断に迷う資料や、三条番ノ原遺跡や池下遺跡のように可能性はあるが断定できない資料は含めていない。また、東かがわ市五名各地区、さぬき市雨滝山西蔵、まんのう町長尾で出土が報告されているが、資料を実見しておらず、集計からは除外した。その他未確認の資料がある可能性も否定できず、実数はもう少し増えることと思われる。

出土資料は、表採資料が多く、調査により出土した資料も、後世の遺構や包含層等からの混入資料が大半で、年代的位置付けが困難である。こうした傾向は本県に限られたわけではなく、資料の性格に起因するという指摘もある（白石2010）。この中で、複数資料が出土した遺跡・地点は7箇所あり、いずれも2点が出土している。また、香西南西打遺跡と西打遺跡、川原遺跡と本郷遺跡、川津一ノ又遺跡と川津六反地遺跡、郡家一里原遺跡と郡家原遺跡等、近接した遺跡で出土する例が数例ある。これらの遺跡では、例えば川原遺跡と本郷遺跡のように、両遺跡ではほぼ同形態の資料が出土し、その製作時期が近似していることを示していることは、周辺に当時の集落等が所在した可能性を示唆するものと考えられる。

素材はササカイトが多数を占め、ほかに頁岩と泥岩が各1点ある。このうち泥岩とされた長砂古遺跡資料については、実見できておらず、その正否は不明である。おそらくは頁岩等の石材の可能性が考えられる。

集成した尖頭器は、大型16点（長さ8.3cm以上、幅2.2～3.3cm）、中型16点（長さ5.6～7.5cm、幅1.8～2.7cm）、小型6点（長さ4.2～4.7cm、幅1.5～2.7cm）の規格により大きく3類に分類され、大型と中型で8割以上を占める。

次に形態について分類を行う。分類の基準は鈴木氏の分類案（鈴木1986）に従い、主に肩部と基部の形状により細分を試みる。分類の詳細は第6表を参照されたい。分類の結果、基部は平基のものが、肩部は外彎形態がそれぞれ多数を占める傾向が指摘できる。また、大型と中型で、形態の酷似する資料があり（例えば、中型の城山、原中村と、大型の透田南、小山・南谷例等）、規格の相違は、狩猟対象に対する選択を示唆しているものと考えられる。

さて、鈴木氏は分類の結果、基部の形状に注目し、1～4段階の変遷を想定された。氏の変遷案は主に関東地方の出土資料をもとに組み立てられており、若干の地域差はあるだろうが、全体的な変化の方向性として普遍性を有すると考える。本地域の資料は、氏の変遷案で第3段階後半の様相を示すものが主体を占めるといえる。

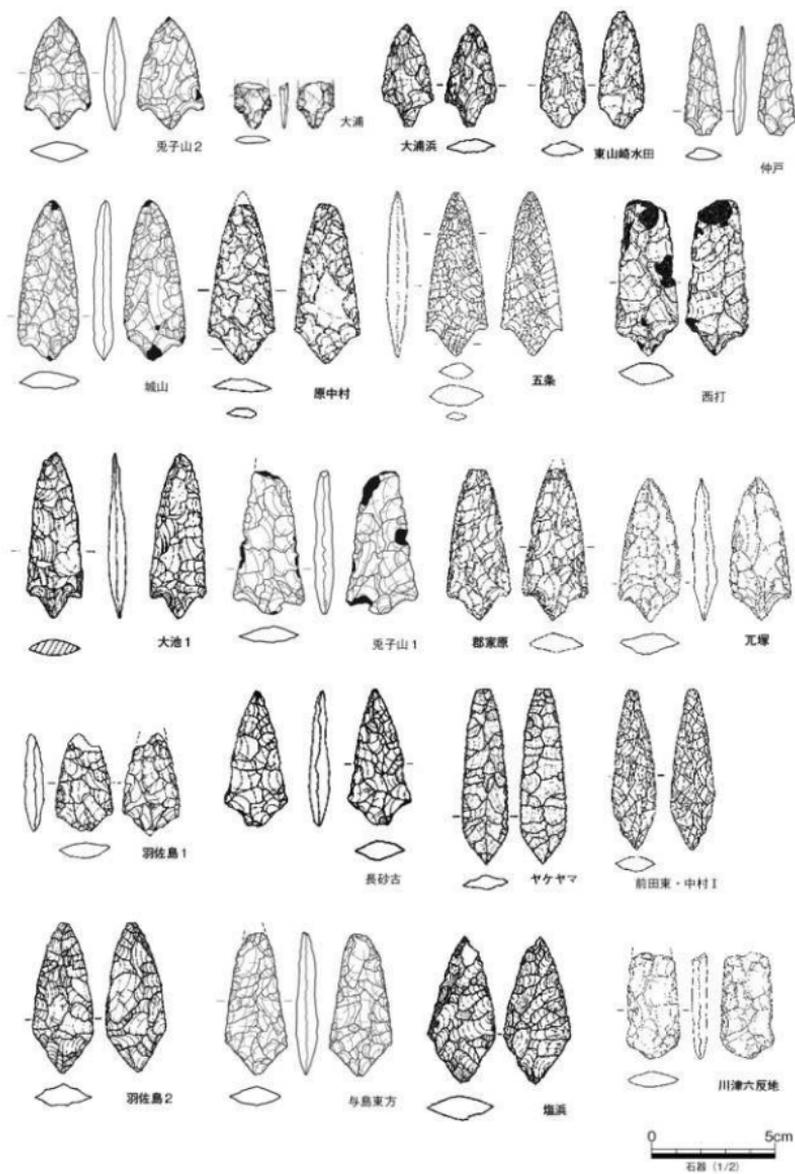
そうした中で、本遺跡出土の資料は、細身で大型・尖基・外彎形態を呈する本県では唯一の出土例であり、上記した資料群よりは古い様相（第2段階）を示している。尖基式のものは、本県では鳥嶋部や低位段丘上（前田東・中村遺跡、十川東・平田遺跡）を中心に出土しており、主体となる資料が多く出土した沖積扇状地の遺跡群とは立地において差が認められることも、上記想定と矛盾しないものと考えられる。

今後は資料の集成をさらに進めると共に、周辺地域の資料との比較検討などを進める必要があり、また土器資料と供伴した良好な資料の出土を期待したい。

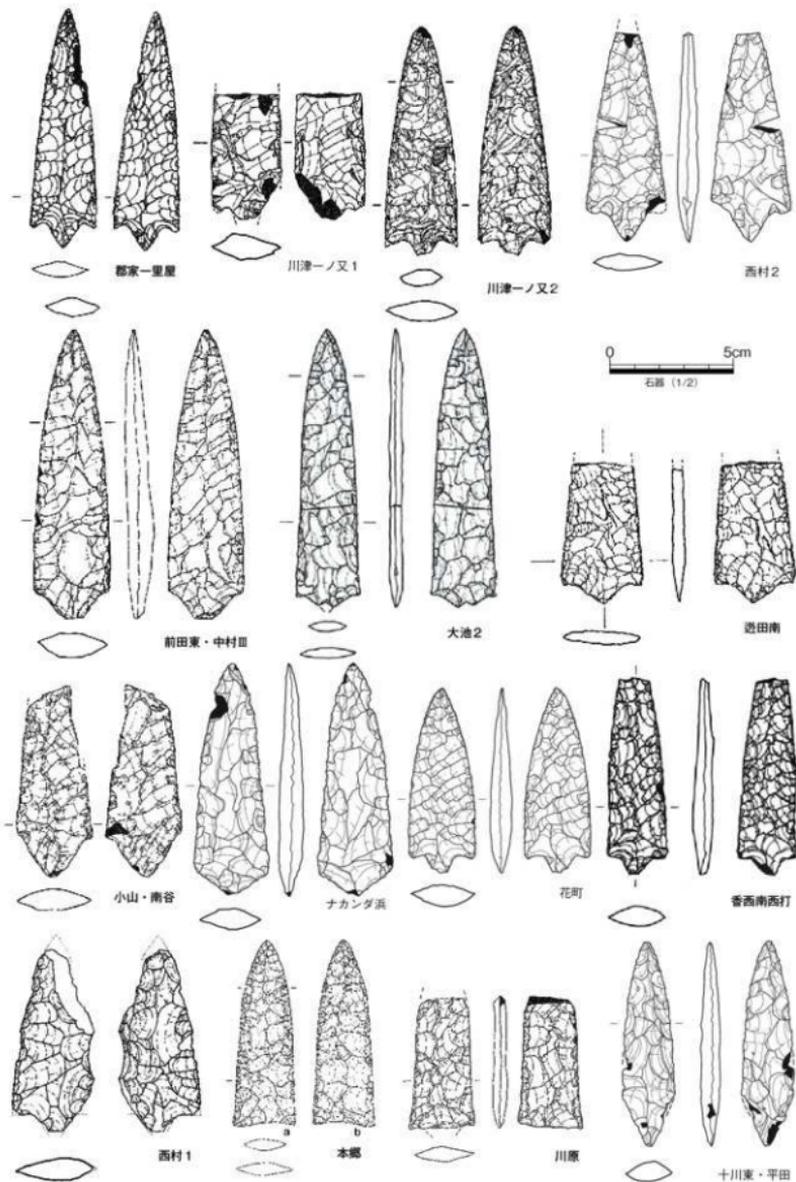
### 引用・参考文献

- 白石浩之2010「縄文時代草創期」『日本列島の旧石器時代遺跡 - 日本旧石器（無土器・岩屑）時代遺跡のデータベース -』  
日本旧石器学会  
鈴木道之助1986「新東京国際空港No.12遺跡の有舌尖頭器をめぐって」『千葉  
県文化財センター研究紀要』10]





第118図 香川県内出土有舌尖頭器実測図1



第119図 香川県内出土有舌尖頭器実測図2

図文番号	調査区	遺構名	層位	種類	形種	調査		色調		焼成	土質		計測値 (cm)		残存率	備考			
						外周	内周	外周	内周		石高・長石	赤色粒/角石	厚	口径			器高	底径	その他
1	Ⅰ区	包合層	14層	土師質土器	丸	口縁部：同様ナデ、底面同様にへら状ナデナデ	口縁部：同様ナデ	25X8-2 灰白	内面：25X8-2 灰白	良好	石高・長石	赤色粒/角石 <td>厚</td> <td>口径 <td>器高 <td>底径 <td>その他</td> <td>2/8</td> <td></td> </td></td></td>	厚	口径 <td>器高 <td>底径 <td>その他</td> <td>2/8</td> <td></td> </td></td>	器高 <td>底径 <td>その他</td> <td>2/8</td> <td></td> </td>	底径 <td>その他</td> <td>2/8</td> <td></td>	その他	2/8	
2	Ⅱ区	包合層	23層	土師質土器	丸	口縁部：同様ナデナデ、底面同様にへら状ナデナデ	口縁部：同様ナデナデ	10YR7/2 黄灰	10YR7/2 黄灰	やや軟	細・少	8.7	1.2	6.9	1.8	未測		1.8	未測
3	Ⅲ区	包合層	23層	埴輪類	杯	口縁部：同様ナデ、底面同様にへら状ナデナデ	口縁部：同様ナデ	7.5Y86/1 黄灰	7.5Y86/1 黄灰	良好	細・少	30.8	2.9	7.2	1.7	未測		1.7	未測
4	Ⅳ区	包合層	23層	土師質土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	10YR7/6 明黄灰	10YR7/6 明黄灰	良好	細・少	10YR7/6		5.3				1.8	
5	Ⅴ区	包合層	22層	土師質土器	丸	口縁部：同様ナデ、高台：ヨコナデ	口縁部：同様ナデ、高台：ヨコナデ	10YR8/4 灰白	10YR8/4 灰白	やや軟	中・少	10YR8/2		5.3	5.6	7.0		8.8	
6	Ⅵ区	包合層	14層	埴輪類	筒	口縁部：同様ナデ、高台：ヨコナデ	口縁部：同様ナデ、高台：ヨコナデ	25Y8-1 灰白	25Y8-1 灰白	良好	細・少	25Y8-1		5.3				2.8	十嵐山原産
7	Ⅶ区	包合層	23層	黒色土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	25Y7-2 黄灰	25Y7-2 黄灰	やや軟	細・少	25Y7-2		6.8				1.8	Ⅱ期
8	Ⅷ区	包合層	23層	黒色土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	25Y6-1 黄灰	25Y6-1 黄灰	やや軟	細・少	25Y6-1		7.6				1.8	A類
9	Ⅷ区	包合層	23層	黒色土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	25Y8-2 灰白	25Y8-2 灰白	やや軟	細・少	25Y8-2		6.0				1.8	A類
10	Ⅷ区	包合層	14層	土師質土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：ハゲ目	10YR8-4 黄灰	10YR8-4 黄灰	やや軟	細・少	10YR8-4		5.7				1.8	
11	Ⅷ区	包合層	7-8層	埴輪類	杯	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	7.5Y7/3 灰白	7.5Y7/3 灰白	良好	細・少	7.5Y7/3		4.3				1.8	肥前系
12	Ⅷ区	包合層	22層	埴輪類	杯	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	7.5Y8/3 灰白	7.5Y8/3 灰白	やや軟	細・少	7.5Y8/3		4.8				1.8	肥前系
13	Ⅷ区	包合層	10層	土師質土器	丸	口縁部：ヨコナデ、同様に上系、体部：同様ナデ	口縁部：ヨコナデ、体部：同様ナデ	10YR6/4 黄灰	10YR6/4 黄灰	良好	中・少	10YR6/4		30.4				1.8	未測
14	Ⅷ区	包合層	23層	青磁	瓦	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	7.5Y5/6-2 灰白	7.5Y5/6-2 灰白	良好	細・少	7.5Y5/6-2		9.4	2.3	5.0		5.8	中国製
15	Ⅷ区	包合層	23層	瓦器	瓦	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	N4 灰	N5 灰	やや軟	細・少	N4 灰		4.3				6.8	肥前系
16	Ⅷ区	包合層	23層	土師質土器	丸	口縁部：高台：マメツ	底面：マメツ	25Y7-2 黄灰	25Y7-2 黄灰	細・少	細・少	25Y7-2		6.1				2.8	
17	Ⅷ区	包合層	18-19層	青磁	筒	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	10Y3/7-1 灰白	10Y3/7-1 灰白	良好	細・少	10Y3/7-1		12.9				1.8	中国製
18	Ⅷ区	包合層	15層?	磁器	皿	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	6Y7/8-1 灰白	6Y7/8-1 灰白	良好	細・少	6Y7/8-1		12.3				1.8	未測
19	Ⅷ区	包合層	17層?	青磁	筒	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	25Y5/3 黄灰	25Y5/3 黄灰	良好	細・少	25Y5/3		10.0				1.8	未測
20	Ⅷ区	包合層	8層	黒色土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	25Y8-1 灰白	25Y8-1 灰白	やや軟	細・少	25Y8-1		5.6				1.8	A類
21	Ⅷ区	包合層	8層	埴輪類	筒	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	10Y6-1 灰	10Y6-1 灰	良好	細・少	10Y6-1		27.4				1.8	東洋系
22	Ⅷ区	包合層	9層	埴輪類	筒	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	N7 灰白	N7 灰白	良好	中・少	N7 灰白		27.4				1.8	未測
23	Ⅷ区	包合層	24層	土師質土器	杯	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	7.5Y8/2 黄灰	7.5Y8/2 黄灰	やや軟	細・少	7.5Y8/2		10.0				2.8	
24	Ⅷ区	包合層	24層	土師質土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	5YR7/4 灰白	5YR7/4 灰白	軟	細・少	5YR7/4		15.4				1.8	黒色土器の可能性あり
25	Ⅷ区	包合層	24層	黒色土器	丸	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	良好	中・少	5Y4/1 灰		6.8				6.8	B類
26	Ⅷ区	包合層	24層	埴輪類	筒	口縁部：同様ナデ	底面：同様ナデ	N8 灰白	N8 灰白	良好	細・少	N8 灰白		4.2				1.8	十嵐山原産
27	Ⅷ区	包合層	2層	埴輪類	筒	口縁部：同様ナデ	底面：マメツ	7.5Y8-1 灰白	7.5Y8-1 灰白	やや軟	細・少	7.5Y8-1		4.8				1.8	十嵐山原産

第7表 土器観察表(1)







器文 番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調		胎式	胎土	器量		残存率	備考	
						外面	内面	外面	内面			口径	器高			器深
136	Ⅱ区	SV09 (SV07)		土師質土器	杯	マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ? マメツ	1086.6赤黒	1086.6赤黒	今や軟	黒・並	11.5		1/8		
137	Ⅱ区	SV05		土師質土器	碗	マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ? マメツ	10787.4 灰黒	10787.4 灰黒	今や軟	中・多	14.6	4.1	7.0	8/8	
138	Ⅱ区	SV07		土師質土器	杯	口縁部: 同転ナデ 底唇部: 同転ナデ	口縁部: 同転ナデ 底唇部: 同転ナデ	10788.3 灰黒	10788.3 灰黒	今や軟	黒・少			7.8	7/8	
139	Ⅱ区	SV08		土師質土器	皿	口縁部: 同転ナデ 底唇部: 同転ナデ	口縁部: 同転ナデ 底唇部: 同転ナデ	10789.2 灰黒	10789.2 灰黒	良好	黒・少	10.6		1.8未測		
139	Ⅱ区	SV08		土師質土器	皿	口縁部: 同転ナデ 底唇部: 同転ナデ	口縁部: 同転ナデ 底唇部: 同転ナデ	10786.4 灰黒	10786.4 灰黒	良好	黒・並			1.8未測		
132	Ⅱ区	SV08		焼酎樽	罐鉢	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	5355.4 灰黒	5355.4 灰黒	良好	中・並		10.8	1.8未測		
133	Ⅱ区	SD1		土師質土器	皿	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	2537.4 灰黒	2537.4 灰黒	良好	黒・少	8.5	1.1	7.0	4/8	
138	Ⅱ区	SD1		土師質土器	皿	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10788.2 灰黒	10788.2 灰黒	今や軟	中・並	8.4	1.2	3.4	6/8	
135	Ⅱ区	SD1		土師質土器	皿	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	2538.2 灰黒	2538.2 灰黒	良好	中・少	8.7	1.7	6.7	6/8	
136	Ⅱ区	SD1		土師質土器	皿	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	2538.2 灰黒	2538.2 灰黒	良好	中・少	8.6	1.5	6.8	8/8	
137	Ⅱ区	SD1		土師質土器	皿	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	2538.2 灰黒	2538.2 灰黒	今や軟	中・並	7.9	1.6	5.5	6/8	
138	Ⅱ区	SD1		土師質土器	皿	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10788.2 灰黒	10788.2 灰黒	良好	中・少	8.6	1.6	3.9	6/8	
139	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁部: マメツ	口縁部: 同転ナデ マメツ	75388.4 成黒	75388.4 成黒	今や軟	中・並	13.4		1/8		
140	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10788.2 灰黒	10788.2 灰黒	今や軟	中・少	13.6		2/8		
141	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10785.1 黒灰	10785.1 黒灰	今や軟	中・並	14.0	3.6	8.7	6/8	
142	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10788.3 成黒	10788.3 成黒	今や軟	中・少	13.3	4.4	5.9	7/8	
143	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10787.3 灰黒	10787.3 灰黒	今や軟	中・少	13.6	4.0	8.4	6/8	
144	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	1078.2灰白	1078.2灰白	今や軟	中・少	13.6	3.5	9.5	7/8	
145	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	2538.3 成黒	2538.3 成黒	今や軟	中・並	11.9	3.6	10.9	8/8	
146	Ⅱ区	SD1		土師質土器	杯	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	口縁-底唇: 同転ナデ マメツ	10788.4 成黒	10788.4 成黒	良好	中・並			7.6	5/8	
147	Ⅱ区	SD1		栗色土器	罎	口縁部: マメツ	口縁部: ミギナ	552.1黒	552.1黒	良好	黒・少	6.2		1.8未測	白面	

第11表 土器観覧表(5)

館文書番号	調査区	遺構名	部位	種類	詳細	外周	調査		西周	色調	地味	敷土		残存率	備考	
							敷土	西周				石瓦・灰石	赤色粘			角四石
148	Ⅱ区	SD11	土師瓦土器	甕	底部～高台：マヌ、高台内周：マヌ 口縁部：回転子、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	10YR6/2 灰黒	10YR6/2 灰黒	4ヶ所	中・並			15.3	5.1	6.4	5/8	
149	Ⅱ区	SD11	埴器	甕	口縁部：回転子、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	N4/灰	N7/灰口	良好	中・少					7/8	土師山産	
150	Ⅱ区	SD11	瓦器	瓦	口縁部：回転子、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	N5/灰	N6/灰	良好	細・少					1/8未満	和瓦	
153	Ⅱ区	SD12	土師瓦土器	甕	口縁部：ヨコナテ、高台内周：ヨコナテ、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	10YR7/3 灰黒	10YR6/4 灰黒	良好	中・少					1/8未満		
154	Ⅱ区	SD12	土師瓦土器	甕	口縁部：ヨコナテ、高台内周：ヨコナテ、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	10YR8/3 灰黒	10YR8/3 灰黒	良好	細・少					8/8		
155	Ⅱ区	SD12	埴器	鉢	口縁部：ヨコナテ、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	10Y2.3赤黒	10Y2.3赤黒	良好	中・少					1/8未満		
156	Ⅱ区	SD12	埴器	甕	口縁部：ヨコナテ、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	5YR4/1 灰黒	25Y6/3 灰黒	良好	細・少					1/8		
157	Ⅱ区	SD12	土師瓦土器	甕	口縁部：ヨコナテ、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	10YR8/4 灰黒	25Y6/3 灰黒	良好	中・並			22.6		1/8未満	体部内周白着	
160	Ⅱ区	SD15	土師瓦土器	甕	口縁部：ヨコナテ、体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	10YR8/4 灰黒	10YR8/3 灰黒	4ヶ所	中・少			13.8	3.6	8.1	2/8	
165	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y7/3 灰黒	25Y7/2 灰黒	良好	細・少					1/8		
166	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y4/3 灰黒	25Y2.1 灰黒	良好	細・少					3/8		
167	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y7/1 灰黒	軸：25Y7/1 灰黒	良好	細・少					1/8未満		
168	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y6/6 灰黒	軸：25Y6/6 灰黒	良好	細・少					8/8		
169	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y7/2 灰黒	軸：N4/灰	良好	細・少					4/8	底部、2本の横溝	
170	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：3Y6/3 灰黒	軸：5YR8/2 灰黒	良好	細・少					3/8	底・白変色	
171	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：N5/灰	軸：7.5YR/1 灰口	良好	細・少					7/8		
172	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y7/1 灰口	軸：7.5YR/4 灰口	良好	細・少			19.0		1/8未満		
173	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：10YR/1 灰口	軸：N8/灰	良好	細・少			11.3		1/8未満		
174	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y6/1 灰口	軸：5Y4/1 灰口	良好	細・少					1/8		
175	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y7/1 灰口	軸：N8/灰	良好	細・少			7.6	3.8	5.8	2/8	
176	Ⅱ区	SD25	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y6/6 灰黒	軸：25Y6/6 灰黒	良好	細・少			19.0	7.1	10.8	1/8	
179	Ⅱ区	SD24	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：N8/灰	軸：N8/灰	良好	細・少					1/8		
180	Ⅱ区	SD24	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y8/2 灰口	軸：2.5Y8/2 灰口	良好	細・少					1/8	底部、?	
181	Ⅱ区	SD24	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：N8/灰	軸：N8/灰	良好	細・少			9.0		1/8	底部、?	
182	Ⅱ区	SD24	埴器	甕	体部：高台、回転子、ナナ、ササ、ナナ	軸：25Y7/1 灰口	軸：2.5Y7/1 灰口	4ヶ所	細・少					2/8	底部、?	

第12表 土器観察表(6)

標本番号	遺跡名	層位	種類	図様	外観	彫刻	色調	胎成	胎土	胎質	胎厚 (cm)	残存率	備考
183	Ⅱ区 S124	下層	埴輪陶器	皿	底部: 同軸ナデ、高台 ナデリ後ナデ	内面 底部: 輪軸・帯目痕 口縁部: 輪軸	外周 輪: 25V72 底口 輪: 20Y8/1 底口 輪: 20Y8/1	内面 輪: 20Y8/1 底口 輪: 20Y8/1	石成・長石 (赤鉄質) 角四石・雲母	口縁部: 彫高 底口: 彫高	40	2/8	彫高系
184	Ⅱ区 S124	上層	磁器	碗	底部: 同軸ナデ・輪軸 口縁部: 輪軸	口縁部: 輪軸	外周 輪: 25V8/1 底口 輪: 25Y8/1	内面 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1	7/4			1/8	彫高系?
185	Ⅱ区 S124	上層	磁器	碗	底部: 高台内: 輪軸・高台 内面: 彫高	底部: 輪軸	外周 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1	内面 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1		24		3/8	彫高系?
186	Ⅱ区 S124	上層	磁器	碗	底部: 高台内: 輪軸 口縁部: 輪軸	底部: 輪軸	外周 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1	内面 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1				6/8	彫高系(帯付)
187	Ⅱ区 S124	下層	埴輪陶器	鉢	底部: 高台内: 輪軸・高台 口縁部: 輪軸	底部: 輪軸	外周 輪: 5V2/2 底口 輪: 5V2/2	内面 輪: 5V2/2 底口 輪: 5V2/2		55		1/8	彫高系(彫毛目)
188	Ⅱ区 S124	下層	埴輪陶器	器?	口縁部: 輪軸	口縁部: 輪軸	外周 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1	内面 輪: 25Y8/1 底口 輪: 25Y8/1	12/3			1/8	大形碗?
189	Ⅱ区 S124	下層	埴輪陶器	盃?	底部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	底部: 同軸ナデ	外周 輪: 25Y8/4 底口 輪: 25Y8/4	内面 輪: 25Y8/4 底口 輪: 25Y8/4	13/6		1/8未調	1/8未調	彫高系
190	Ⅱ区 S124	下層	埴輪陶器	鉢	底部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	底部: 同軸ナデ	外周 輪: 25Y8/4 底口 輪: 25Y8/4	内面 輪: 25Y8/4 底口 輪: 25Y8/4	14/1		1/8未調	1/8未調	彫高系
191	Ⅱ区 S124	上層	埴輪陶器	鉢	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 10Y8/4 底口 輪: 10Y8/4	内面 輪: 10Y8/4 底口 輪: 10Y8/4	20/1		1/8未調	1/8未調	彫高系(彫高)
192	Ⅱ区 S124	上層	瓦質土器	始物	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 10Y8/4 底口 輪: 10Y8/4	内面 輪: 10Y8/4 底口 輪: 10Y8/4	41/0		1/8未調	1/8未調	彫高系
193	Ⅱ区 S124	下層	瓦質土器	始物	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V6/1 底口 輪: 5V6/1	内面 輪: 5V6/1 底口 輪: 5V6/1	40/2		1/8未調	1/8未調	彫高系
202	Ⅱ区 S125	埴輪陶器	碗	小盃・高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V6/1 底口 輪: 5V6/1	内面 輪: 5V6/1 底口 輪: 5V6/1	48		2/8	2/8	彫高系(彫高)
203	Ⅱ区 S125	埴輪陶器	碗	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 10Y6/1 底口 輪: 10Y6/1	内面 輪: 10Y6/1 底口 輪: 10Y6/1	9/4	61	37	3/8	彫高系(彫高)
204	Ⅱ区 S125	埴輪陶器	碗	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 25V6/1 底口 輪: 25V6/1	内面 輪: 25V6/1 底口 輪: 25V6/1	9/8	68	43	1/8	彫高系(彫高)
205	Ⅱ区 S125	埴輪陶器	碗	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 25Y3/2 底口 輪: 25Y3/2	内面 輪: 25Y3/2 底口 輪: 25Y3/2			45	4/8	彫高系
206	Ⅱ区 S125	埴輪陶器	鉢	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 25Y8/3 底口 輪: 25Y8/3	内面 輪: 25Y8/3 底口 輪: 25Y8/3	31/2			1/8	彫高系(彫高)
208	Ⅱ区 S126	埴輪陶器	皿	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V6/2 底口 輪: 5V6/2	内面 輪: 5V6/2 底口 輪: 5V6/2	11/4	20	54	2/8	彫高系
209	Ⅱ区 S126	磁器	磁器	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V3/1 底口 輪: 5V3/1	内面 輪: 5V3/1 底口 輪: 5V3/1	4/3			2/8	彫高系
210	Ⅱ区 S126	埴輪陶器	鉢	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	内面 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	4/4			8/8	彫高系
211	Ⅱ区 S126	埴輪陶器	鉢	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	内面 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	9/4			1/8	彫高系
215	Ⅱ区 S128	埴輪陶器	鉢?	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	内面 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	6/0			1/8未調	彫高系
219	Ⅱ区 S128	瓦質土器	瓦質土器	鉢	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	内面 輪: 5V3/3 底口 輪: 5V3/3	12/4		87	1/8	
220	Ⅱ区 S101	埴輪陶器	鉢	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 25Y7/2 底口 輪: 25Y7/2	内面 輪: 25Y7/2 底口 輪: 25Y7/2	9/1	46		4/8	
220	Ⅱ区 S101	埴輪陶器	鉢	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 25Y8/3 底口 輪: 25Y8/3	内面 輪: 25Y8/3 底口 輪: 25Y8/3	9/9	53		3/8	
221	Ⅱ区 S101	埴輪陶器	鉢	高台	口縁部: 同軸ナデ・高台 口縁部: 同軸ナデ	口縁部: 同軸ナデ	外周 輪: 10Y8/7/2 底口 輪: 10Y8/7/2	内面 輪: 10Y8/7/2 底口 輪: 10Y8/7/2	7/1	82		1/8	

第13表 土器調査表 (7)

順文番号	調査区	遺跡名	階位	種類	詳細	状態	調整		色塗	機軸	船上		残存率	備考
							内面	外面			石・瓦石	赤色砂		
222	Ⅱ区	SI402	土師質土器	皿	口縁部:同軸ナナ?、底面:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	2578.4 底面	2578.3 底面	8.7	14	6.5		2/8		
223	Ⅱ区	SI402	土師質土器	皿	同軸ナナ	5176.6 底面	2578.6 底面	9.2	1.7	6.4		1/8		
224	Ⅱ区	SI402	土師質土器	筒	同軸ナナ	2578.2 底面	2578.2 底面	13.2				1/8未満	片断系	
225	Ⅱ区	SI402	黒色土器	碗	同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.1 底面	10737.1 底面			6.8		1/8	黒色土器B類	
226	Ⅱ区	SI402	土師質土器	筒	同軸ナナ	1036.4 底面	2577.2 底面			6.9		1/8		
227	Ⅱ区	SI402	土師質土器	皿	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	75786.6 底面	75786.6 底面					1/8未満		
229	Ⅱ区	SK36	弥生土器	細頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	2577.2 底面	2577.2 底面	10.3				1/8		
231	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	2577.6 底面	2576.6 底面	9.8				1/8未満		
232	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.6 底面	2577.6 底面	23.3				1/8未満		
233	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.6 底面	2577.6 底面	27.8				1/8未満		
235	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.2 底面	10737.2 底面			3.5		1/8		
236	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10738.2 底面	10738.2 底面			6.6		1/8		
237	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.2 底面	10738.2 底面			8.1		1/8		
238	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10738.4 底面	2578.3 底面	26.6				1/8未満		
239	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10738.2 底面	10738.1 底面					1/8未満		
240	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	5176.6 底面	10737.6 底面	13.2				1/8未満		
241	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.4 底面	10738.4 底面	11.8				1/8未満		
242	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	75786.4 底面	10738.1 底面			9.1		1/8		
243	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.6 底面	2578.1 底面					1/8未満		
244	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.2 底面	5177.1 底面			7.8		2/8		
245	Ⅱ区	SI402	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10738.3 底面	2578.3 底面	14.6				3/8		
246	Ⅱ区	SI402	弥生土器	壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	2578.2 底面	2578.2 底面					1/8		
248	Ⅱ区	SK30	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	75785.4 底面	75784.1 底面			8.1		1/8未満	小径皿、丸字孔	
249	Ⅱ区	SK30	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	10737.6 底面	10737.6 底面	10.6				2/8		
250	Ⅱ区	SK33	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	5176.6 底面	5176.6 底面	12.6				1/8		
251	Ⅱ区	SK33	弥生土器	短頸壺	口縁部:同軸ナナ?、口縁部:同軸ナナ?	2578.3 底面	2577.6 底面	17.2				1/8未満		

第14表 土器観察表(8)



観文番号	調査区	遺跡名	種別	種類	部種	調査	西園	外園	色調	地質	地上	計画面積 (cm)	残存率	備考
279	V区	SD07	弥生土器	甕	体一底部:エガキ、底面:ナデ	西園:指サユエ、V 外園:7.5YR6/4 土色	N2	黒	82	中・多	石瓦・灰石 赤色粘土	18	5/8	
282	V区	SD09	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
283	V区	SD45	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:7.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
284	V区	SD09	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
285	V区	SD09	弥生土器	台付鉢	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
286	V区	SD46	弥生土器	甕	底面:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
289	V区	SK40	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
290	V区	SK09	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
290	V区	SD49	弥生土器	口口器	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
294	V区	SD51	弥生土器	口口器	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
295	V区	SD51	弥生土器	甕	底面:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
297	V区	SP27	黒色土器	甕	口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
298	V区	SP43	黒色土器	甕	口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
299	V区	SP90	黒色土器	甕	口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
300	V区	SD18	土師器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
301	V区	SP71	弥生土器	口口器	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
302	V区	SK38	土師質土器	杯	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
303	V区	SK38	土師器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
304	V区	SD52	土師質土器	皿	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
305	V区	SD52	土師器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
307	V区	SK11	土師質土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
309	V区	SD50	土師質土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
310	V区	SD57	弥生土器	口口器	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
311	V区	SD04	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
312	V区	SD04	弥生土器	甕	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	
319	V区	SD55	土師質土器	杯?	口縁部:Vメソ 口縁部:Vメソ	西園:Vメソ 外園:2.5YR6/3	82	黒	10YR6/6	中・少		98	1/8未調	

第16表 土器観察表 (10)

観文番号	調査区	遺構名	層位	種類	器種	調整		色調	焼成	胎土		計測値 (cm)		残存年	備考
						断面	断面			石莖・長石	赤色粒	角閃石	雲母		
320	Ⅱ区	SK13	瓦器	瓦	底部：マメフ	断面	底部：マメフ	5X8/1灰白	良好	細・少			4.4	2.8	和瓦型
321	Ⅱ区	SK13	白磁	罎	底部：高弁内；胴部：ケスリ	断面	底部：胎輪・沈澱1条	輪・5V7/3灰白	良好				6.1	2.8	中国製
322	Ⅱ区	SK13	土師瓦土器	瓦	口縁部：ヨコナデ？マメフ。胴部：胎オケエ・ナメナデ？マメフ	断面	口縁部：ヨコナデ。胴部：胎オケエ・ナメナデ？マメフ	10YR7/3灰白	やや軟	中・多			2.8	1.8	1.8未満 十亀山産産？
323	Ⅱ区	SK13	土師瓦器	罎	口縁部：胎輪ナデ	断面	口縁部：胎輪ナデ	5Y6/4灰	良好	中・少				1.8未満	十亀山産産
324	Ⅱ区	SK13	瓦質土器	罎	口縁部：胎オケエ・ナメナデ	断面	口縁部：胎オケエ・ナメナデ	5Y6/4灰	やや軟	細・少				1.8未満	
325	Ⅱ区	SK13	瓦質土器	鉢	口縁部：胎輪ナデ	断面	口縁部：胎輪ナデ	7.5Y4/1灰	良好	中・少			2.6	1.8	十亀山産産
326	Ⅱ区	SK13	土師瓦器	鉢	口縁部：胎オケエ・ナメナデ	断面	口縁部：胎オケエ・ナメナデ	N7/灰白	良好	細・少				1.8未満	
327	Ⅱ区	SK13	瓦質土器	鉢	口縁部：胎オケエ・ナメナデ	断面	口縁部：胎オケエ・ナメナデ	N5/灰	やや軟	中・少			11.9	1.8	1.8未満

第17表 土器観察表 (11)

観文番号	調査区	遺構名	層位	器種	器種	調整		色調	焼成	胎土		計測値 (cm)		残存年	備考
						外面	内面			石莖・長石	赤色粒	角閃石	雲母		
30	Ⅱ区	包含層		陶器	胎輪ナデ	外面	胎輪ナデ	10YR6/3	良好	中・並	5.0	3.9	1.7		破片
161	Ⅱ区	SD15	上層	胎輪口ナデ	胎輪口ナデ	外面	胎輪口ナデ	N4/灰	良好	中・並	4.0	3.4	2.3		破片

第18表 土製品観察表

観文番号	調査区	遺構名	層位	器種	器種	調整		色調	焼成	胎土		計測値 (cm)		残存年	備考
						凸面	凹面			石莖・長石	赤色粒	角閃石	雲母		
84	Ⅰ区	SD2	下層	赤瓦	神仕ナデ	凸面	凸面	N5/灰	瓦質(良好)	中・少	1.2	1.6	5.6	1.2	破片(赤少)棟瓦
194	Ⅱ区	SD24	上層	巴文？ナデ	巴文？ナデ	凸面	凸面	N3/陶灰	瓦質(やや軟)	中・並	14.2	1.6	2.6	1.2	破片(瓦当面ナデ)使用

第19表 軒丸瓦観察表

観文番号	調査区	遺構名	層位	器種	器種	調整		色調	焼成	胎土		計測値 (cm)		残存年	備考
						凸面	凹面			石莖・長石	赤色粒	角閃石	雲母		
151	Ⅱ区	SD11	中層	軒丸瓦	軒丸瓦	凸面	凹面	10YR7/4	土師質(良好)	細・多	14.7	1.6	1.7	2.8	破片
195	Ⅱ区	SD24	上層	平瓦	平瓦	凸面	凹面	N3/陶灰	瓦質(良好)	中・並	28.6	1.09	5.7	1.6	破片

第20表 平瓦観察表

観文番号	調査区	遺構名	層位	器種	器種	調整		色調	焼成	胎土		計測値 (cm)		残存年	備考
						凸面	凹面			石莖・長石	赤色粒	角閃石	雲母		
162	Ⅱ区	SD15	中層	丸瓦	丸瓦	凸面	凹面	2.5Y6/1黄灰	7.5Y4/1灰	土師質(やや軟)	中・少	6.8	6.8	2.3	破片

第21表 丸瓦観察表

順文番号	調査区	遺構名	層位	器種	計測値 (cm・g)			石材	残存	備考	
					現存長	最大幅	最大厚				重量
31	Ⅲ区	礎丸		石蔵	19	19	04	096	サヌカイト	上海折損	凹式
32	Ⅲ区	包含層		石蔵	25	12	03	073	サヌカイト	上下端折損	凹式
33	Ⅲ区	包含層	14層	石甕丁	31	40	09	1483	サヌカイト	手折	未完成
34	Ⅲ区	包含層	14層	石甕丁	62	38	11	3520	サヌカイト	手折	
35	Ⅲ区	包含層	8層	片方石斧	110	32	22	14455	塩基性片岩	刃部欠損	
85	I区	SD02		スクレイパー	27	50	08	1292	サヌカイト	ほぼ完存	
86	I区	SD02		砥石	75	36	35	14901	流紋岩	ほぼ完存	
87	I区	SD02		石臼	202	114	104	17900	角礫凝灰岩	欠損	上白
109	I区	SX01		石臼	175	121	113	20009	角礫凝灰岩	欠損	下白
123	Ⅱ区	SR01	上層	石蔵	21	11	03	060	サヌカイト	一部折損	平式
124	Ⅱ区	SR01	下層	石蔵	27	13	03	075	サヌカイト	一部折損	凹式
125	Ⅱ区	SR01	下層	石蔵	26	17	03	087	サヌカイト	ほぼ完存	凹式
129	Ⅱ区	SK13		有舌尖頭器	83	22	08	1231	サヌカイト	一部折損	
152	Ⅱ区	SD11		石蔵	24	14	03	090	サヌカイト	一部折損	凹式
164	Ⅱ区	SD15		砥石	45	19	42	3526	不明	一部残存	
177	Ⅱ区	SD23		石蔵	30	18	04	214	サヌカイト	一部折損	凹式
207	Ⅱ区	SD25		打撃石甕丁	51	33	09	2326	サヌカイト	左辺右半折損	
213	Ⅱ区	SD26		砥石	99	47	15	10375	デライト	一部折損	
214	Ⅱ区	SD26		石臼	129	129	76	8838	角礫凝灰岩	欠損	上白
216	Ⅱ区	SD28		ナイフ形石器	34	17	08	753	サヌカイト	一部折損	
217	Ⅱ区	SD28		石蔵	39	34	11	1791	サヌカイト	上下端折損	
228	Ⅲ区	SD32		石蔵	23	13	03	093	サヌカイト	ほぼ完存	平式
247	V区	SP156		片方石斧	144	48	10	14008	千枚岩	ほぼ完存	破損後再加工
287	V区	SK31	中層(3層)	楔形石器	31	44	06	1094	サヌカイト		
289	V区	SD37		楔形石器	37	40	11	1725	サヌカイト		
281	V区	SD37		楔形石器	44	72	12	3735	サヌカイト		
287	V区	サヌカイトブロック		石核?	120	114	35	59554	サヌカイト	一部折損	
288	V区	サヌカイトブロック		剥片	26	55	11	1290	サヌカイト	完存	
291	V区	SK39		片方石斧	78	16	06	1331	珪質泥岩	中位折損	
292	V区	SD48		石蔵	25	16	04	154	サヌカイト	上海折損	凹式
296	V区	SD51		楔形石器	49	50	16	5860	サヌカイト	一部折損	
306	V区	SD52		石蔵	32	13	04	189	サヌカイト	上海折損	平式
308	V区	SX11		石蔵	16	05	02	029	サヌカイト	一部残存	凹式
313	V区	SR04	上層	楔形石器剥片	21	27	05	311	サヌカイト		
314	V区	SR04	下層	使用痕のある剥片	21	43	05	485	サヌカイト		
315	V区	SR04	下層	剥片	59	31	18	2129	チャート		
316	V区	SR04	下層	楔形石器	45	51	10	3531	サヌカイト		
317	V区	SR04		石核	114	97	67	99579	チャート		
318	V区	SP422		石蔵	24	17	05	191	サヌカイト	下端折損	凸式?
328	V区	SX13		石蔵	20	12	02	053	サヌカイト	一部折損	凹式

第22表 石器観察表

順文番号	調査区	遺構名	層位	器種	計測値 (cm)			本取り	残存	備考
					現存長	現存幅	最大厚			
230	Ⅳ区	SK24		板材	120	9.3	1.5	板目	上下右端折損	

第23表 木製品観察表

順文番号	調査区	遺構名	層位	器種	計測値 (cm・g)			材質	残存	備考	
					現存長	最大幅	最大厚				重量
36	Ⅴ区	包含層	14層	鏃・鏃先?	27	16	0.5	鉄	破片		
37	Ⅴ区	包含層	24層	鏃?	100	12	0.8	鉄	下端欠損		
88	I区	SD02		角釘	4.3	0.8	0.5	鉄	上下端欠損		
89	I区	SD02		角釘	4.3	0.9	0.6	鉄	上下端欠損		
90	I区	SD02	下層	鉄滓	6.6	6.8	1.9	9452	鉄	一部欠損	鈍型滓
91	I区	SD02	上層	鉄滓	11.2	8.2	3.0	32846	鉄	一部欠損	鈍型滓
92	I区	SD02	下層	鉄滓	8.5	7.8	3.0	20771	鉄	一部欠損	鈍型滓
93	I区	SD02	上層	鉄滓	10.9	8.7	3.9	41572	鉄	一部欠損	鈍型滓
110	I区	SX01		鉄滓	4.5	6.1	3.3	9678	鉄	一部欠損	
111	I区	SX01		鉄滓	5.1	6.4	1.5	6706	鉄	一部欠損	
158	Ⅱ区	SD12		銅塊	2.4	2.4	0.2		銅	ほぼ完存	水軍遺物
159	Ⅱ区	SD14		鉄滓	4.4	4.1	2.4	3406	鉄	一部欠損	
163	Ⅱ区	SD15		鉄滓	8.1	10.0	3.5	35750	鉄	一部欠損	鈍型滓
178	Ⅱ区	SD23	上層	鉄釘	2.0	0.5	0.5		鉄	上下端欠損	角釘
196	Ⅱ区	SD24	上層	鏃・鏃先	5.3	2.7	0.3		鉄	上下端欠損	
197	Ⅱ区	SD24	上層	不明	6.9	0.3	0.3		鉄	両端欠損	
198	Ⅱ区	SD24	下層	鉄滓	5.9	5.8	2.6	9951	鉄	一部欠損	
199	Ⅱ区	SD24	下層	鉄滓	5.3	6.1	2.1	8234	鉄	一部欠損	
200	Ⅱ区	SD24	上層	鉄滓	5.5	7.4	3.5	13119	鉄	一部欠損	鈍型滓
201	Ⅱ区	SD24	下層	鉄滓	5.6	7.1	3.3	14862	鉄	一部欠損	
212	Ⅱ区	SD36		鉄滓	6.6	9.6	3.8	30050	鉄	一部欠損	
329	Ⅴ区	SX13		鉄滓	4.5	4.6	1.0	3039	鉄	一部欠損	

第24表 金属器観察表

# 写真図版



I～III区全景（航空写真、上が北）



IV・V区全景（航空写真、上が北）



IV・V区全景（航空写真、上が北）



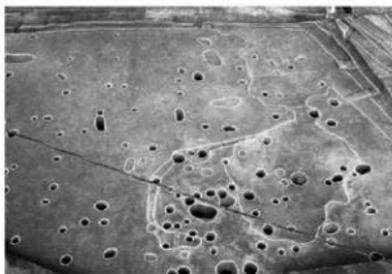
VI・VII区全景（航空写真、上が北）



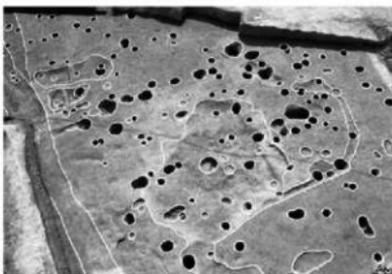
I・II区全景 (南東より)



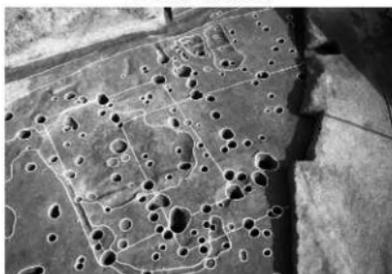
I区全景 (南より)



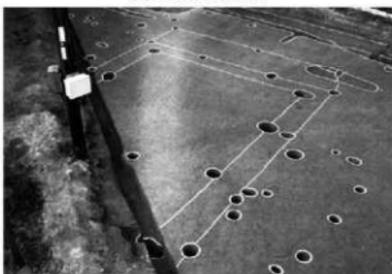
I区全景 (南より)



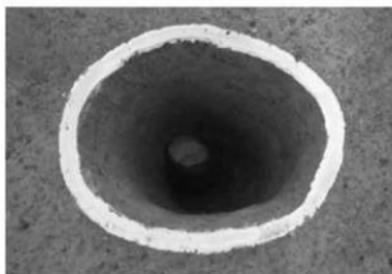
I区全景 (北より)



I区全景 (西より)



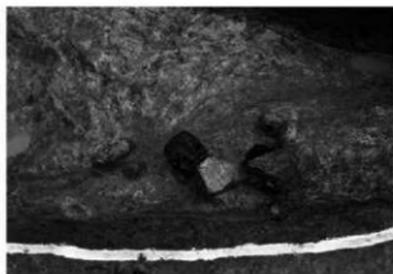
I区 SB01 全景 (南東より)



I区 SP124 遺物出土状況 (北より)



I区 SP141 遺物出土状況 (北より)



I区 SD02 下層遺物出土状況 (南より)



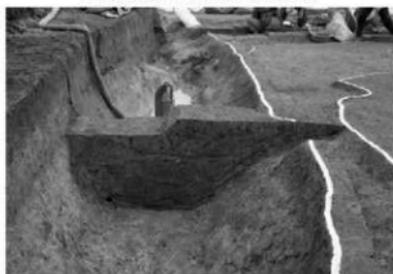
I区 SX01 遺物出土状況 (西より)



I区 SD01 土層断面 (北より)



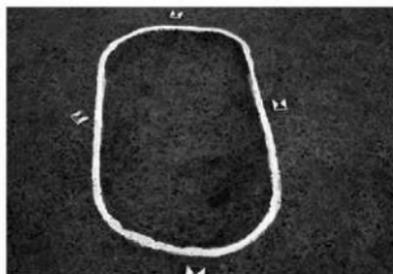
I区 SD02・01 土層断面 (北より)



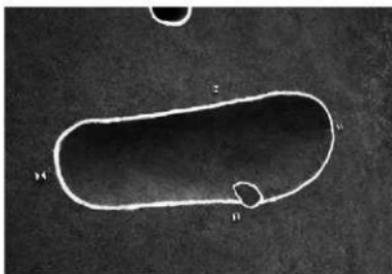
I区 SD01・02 土層断面 (西より)



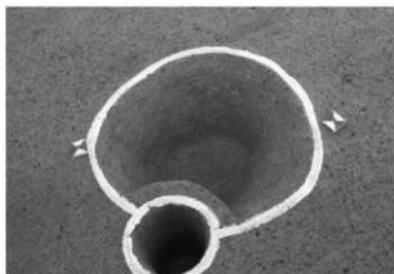
I区 SK03 全景 (西より)



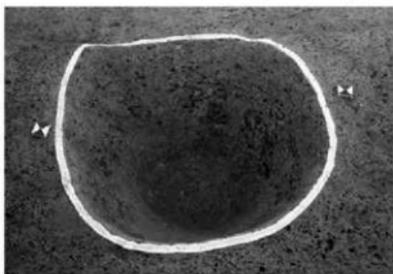
I区 SK02 全景 (南より)



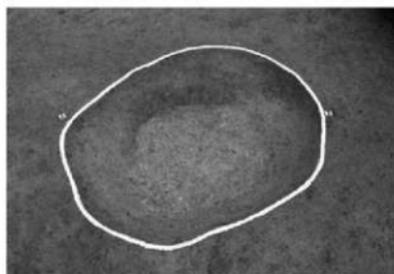
I区 SK01 全景 (東より)



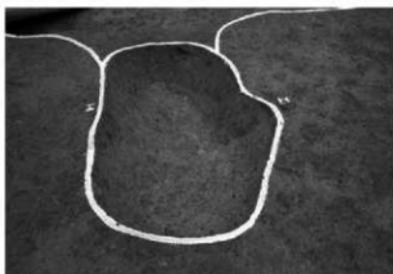
Ⅱ区 SK05 全景 (南より)



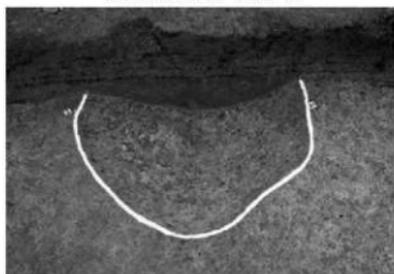
Ⅱ区 SK14 全景 (南より)



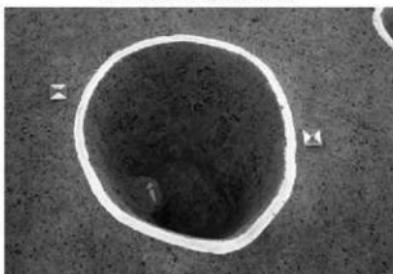
Ⅱ区 SK04 全景 (南より)



Ⅱ区 SK05 全景 (西より)



Ⅱ区 SK07 全景 (北より)



Ⅱ区 SK13 遺物出土状況 (南より)



Ⅱ・Ⅲ区全景 (南西より)



Ⅱ・Ⅲ区全景 (南西より)



Ⅱ・Ⅲ区全景 (東より)



Ⅱ区全景 (西より)



Ⅱ区全景 (西より)



Ⅱ区 SB07・09 全景 (南より)



Ⅱ区 SB09 全景 (南より)



Ⅱ区 SB08 全景 (南より)



Ⅱ区 SR01 全景 (南東より)



Ⅱ区 SD11 遺物出土状況 (西より)



Ⅱ区 SD15 遺物出土状況 (北より)



Ⅱ区 SD25・26 遺物出土状況 (南より)



Ⅱ区 SD11 遺物出土状況 (北より)



Ⅱ区 SD26 集石検出状況 (北より)



Ⅱ区 SD26 集石検出状況 (西より)



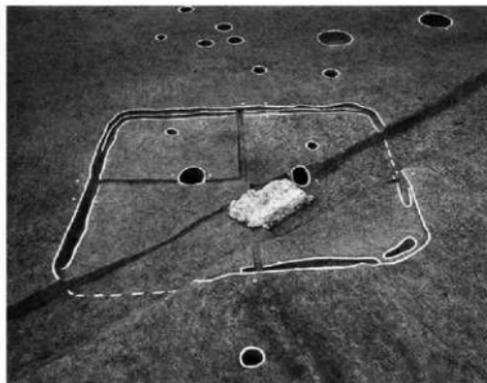
Ⅲ区 SB10 全景 (南より)



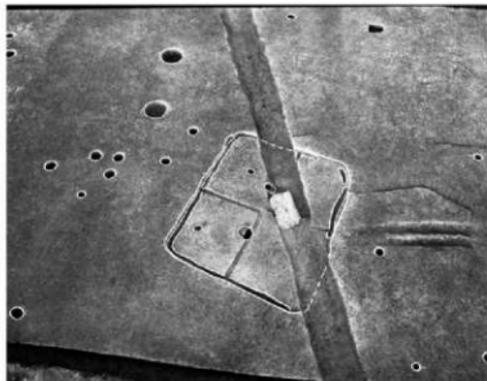
Ⅲ区調査区北壁東半土層断面 (東南より)



Ⅲ区調査区東壁土層断面 (北西より)



Ⅲ区 SH01 全景（東より）



Ⅲ区 SH01 全景（南より）



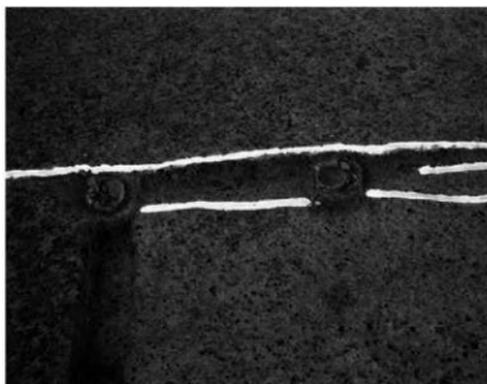
Ⅲ区 SH01 全景（西より）



Ⅲ区 SH01 土層断面 (北東より)



Ⅲ区 SH01 内 292・293・294  
出土状況 (南東より)



Ⅲ区 SH01 内 292・293・294  
出土状況 (北より)



IV・V区北半部全景 (南西より)



IV・V区北半部全景 (南より)



IV・V区北半部全景 (東より)



IV・V区全景 (東より)



IV区全景 (西より)



IV区全景 (東より)



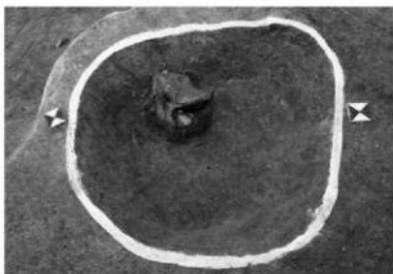
IV区 SR02 土層断面 (南より)



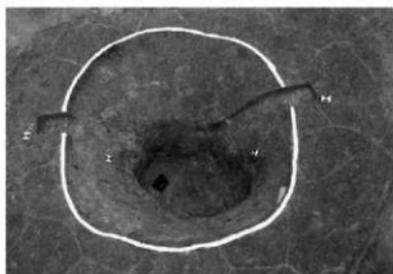
IV区 SR03 土層断面 (南より)



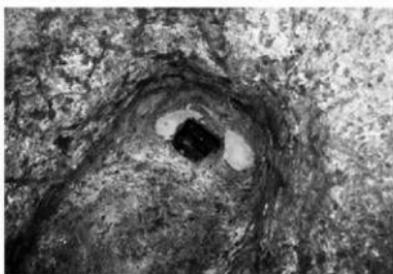
IV区 SR02 全景 (南より)



IV区 SK23 遺物出土状況 (北より)



IV区 SK24 全景 (南より)



IV区 SK24 遺物出土状況 (東より)



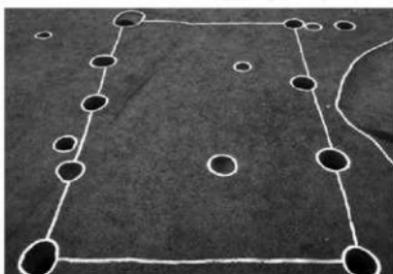
V区北半部全景 (南西より)



V区 SB11・SB12 全景 (南より)



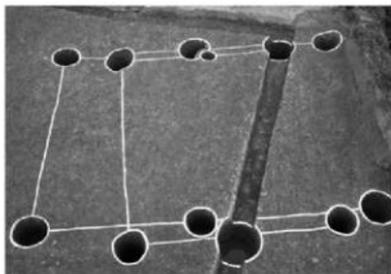
V区 SB14・15・16 全景 (東より)



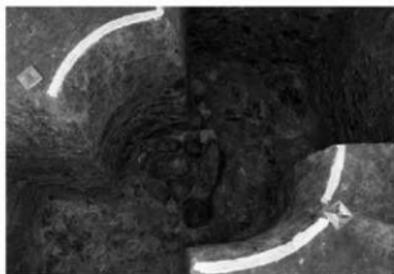
V区 SB12 全景 (東より)



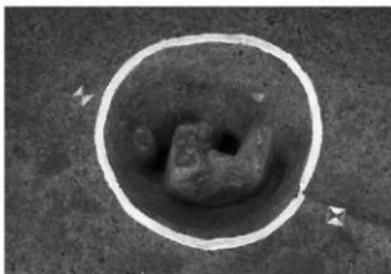
V区 SB11 全景 (西より)



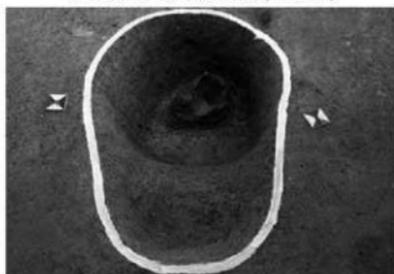
V区 SB15・16 全景 (南より)



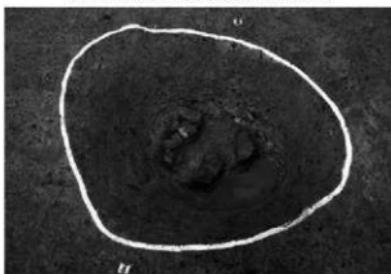
V区 SK16 根石検出状況 (北より)



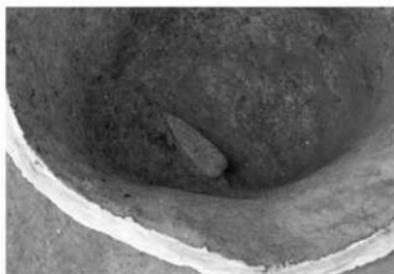
V区 SK16 遺物出土状況 (北より)



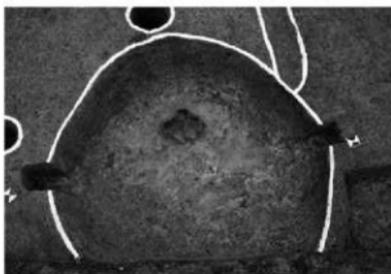
V区 SK30 遺物出土状況 (南より)



V区 SK31 石礎出土状況 (南より)



V区 SP156 遺物出土状況 (北より)



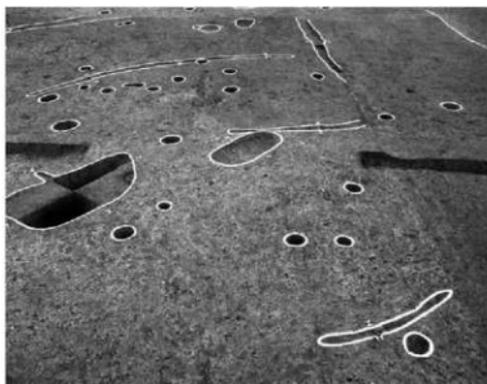
V区 SK36 遺物出土状況 (東より)



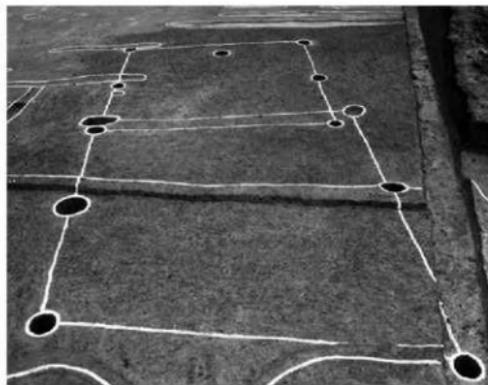
VI区全景（南より）



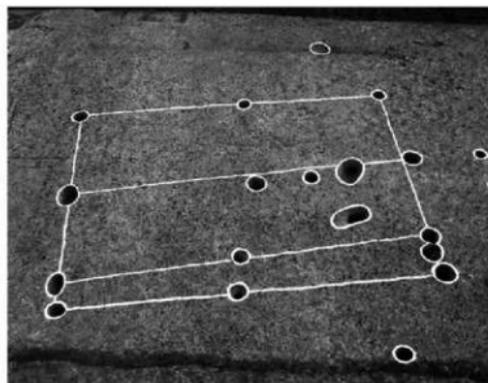
VI区全景（西より）



VI区 SH02 全景（南より）



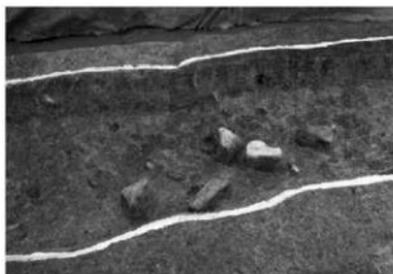
VI区 SB21・22 全景 (西より)



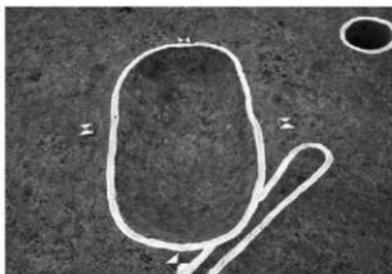
VI区 SB20 全景 (北より)



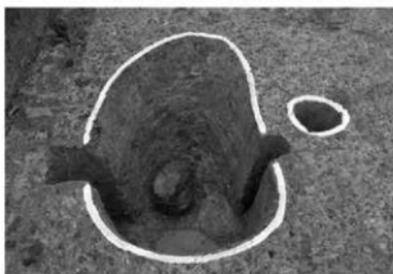
VI区 SB17・18 全景 (南より)



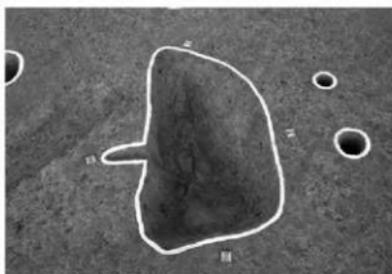
VI区 SD52 遺物出土状況 (北より)



VI区 SK40 全景 (北より)



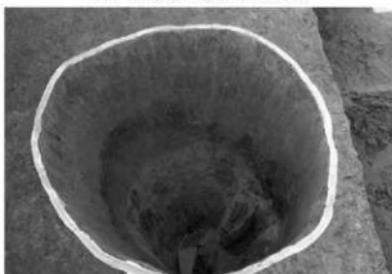
VI区 SK38 遺物出土状況 (南より)



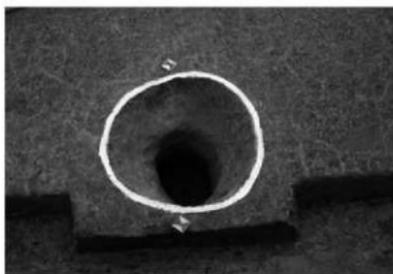
VI区 SK39 全景 (南西より)



VII区 SK47 全景 (北より)



VII区 SP413 遺物出土状況 (東より)



VII区 SK45 全景 (西より)



VII区 SK47 土層断面 (南より)



Ⅵ区サヌカイトブロック全景(西より)



Ⅶ区全景(西より)



Ⅶ区2面全景(西より)



52



263



121



245



249



219



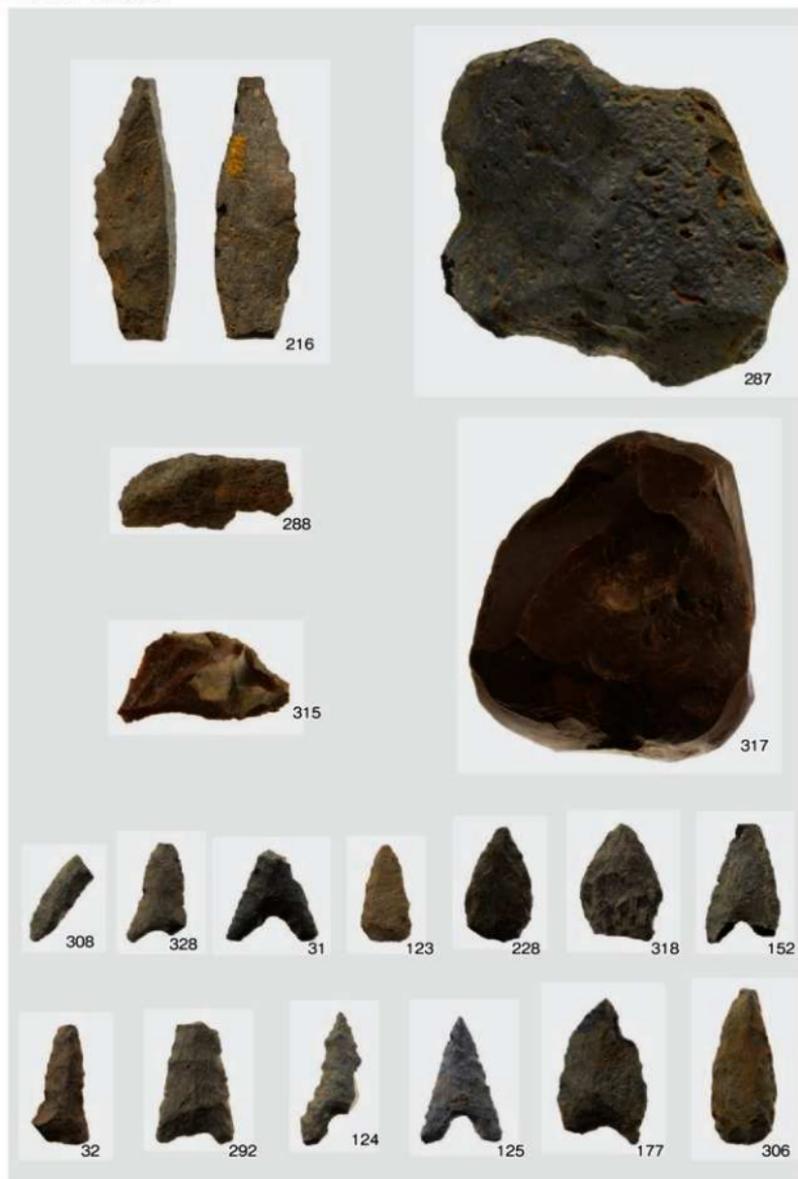
220



268











# 報告書抄録

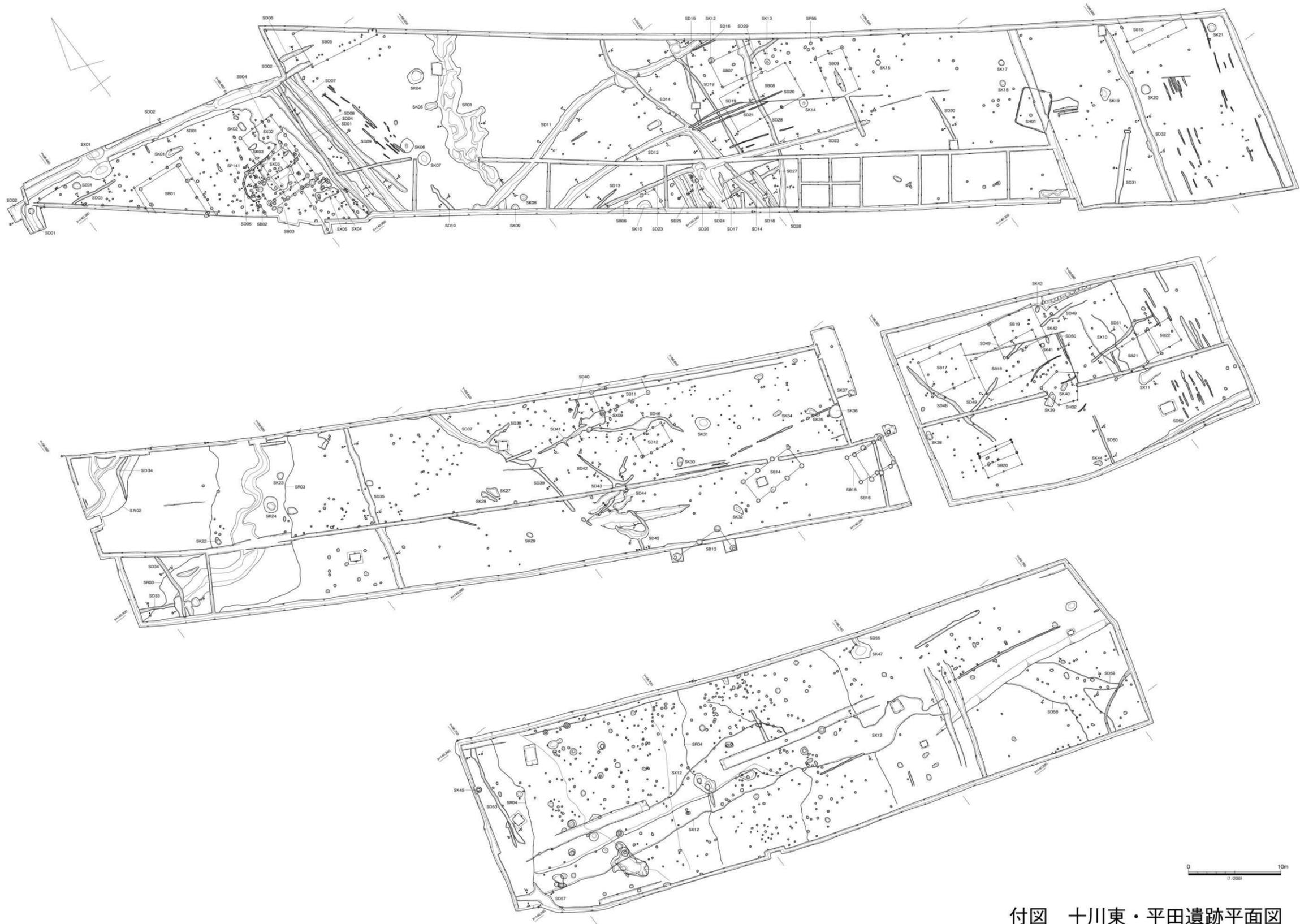
ふりがな	そがわひがし・ひらたいせき							
書名	十川東・平田遺跡							
副書名	県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
編著者名	蔵本晋司（編）、文化財調査コンサルタント株式会社、石丸恵理子、竹原弘展、藤根久							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 762-0024 香川県坂出市府中町字南谷 5001-4 Tel 0877-48-2191 E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp							
発行機関名	香川県教育委員会							
発行年月日	2016年3月14日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町	遺跡番号					
十川東・平田遺跡	香川県高松市十川東町	37201		34°16'01"	134°06'43"	1995.09.01 ～ 1996.03.31	8,000㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
十川東・平田遺跡	集落	弥生中～後期・中世・近世	堅穴建物2・掘立柱建物22・土坑・井戸1・溝		弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・瓦器・輸入陶磁器・近世土器・陶磁器		混入資料だが、翼状剥片と有舌尖頭器が出土。	
要約	<p>十川東・平田遺跡は、高松平野南東部の低位段丘上に立地する弥生時代から近世にかけての集落遺跡である。弥生時代以前の遺構は不明だが、翼状剥片や有舌尖頭器が混入資料として出土したほか、基盤層中よりサヌカイト礫が多数出土した。サヌカイト礫については産地同定分析を実施し、五色台や金山とは異なる新たな産地の可能性が示されたことは興味深い。また、県内の有舌尖頭器について資料を集成し、本遺跡出土資料の位置付けについても考察をおこなった。</p>							

県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告

## 十川東・平田遺跡

2016年3月

編集 香川県埋蔵文化財センター  
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4  
Tel 0877-48-2191  
E-Mail maibun@pref.kagawa.lg.jp  
発行 香川県教育委員会  
印刷 ナカハタ印刷株式会社



付図 十川東・平田遺跡平面図